

---

# 風都紅塵戦奇譚      三．春の燔祭

秀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

風都紅塵戦奇譚 三・春の燔祭

### 【Nコード】

N2248E

### 【作者名】

秀

### 【あらすじ】

吐蕃暦331年。5月は吐蕃皇国全土で春の訪れを祝う祭りが行なわれる。通称「花の祭」を準備中の沙南公国。嵐と百はそこで新たな情報を得て東の公国、沢東へと旅立つ。一方、皇国の首都・大都会では通称「春の燔祭」が行なわれる。祭を控えて常に賑わう町では、移動芸能集団の一座、『天藍』の公演が話題を呼んでいた。中でも一番人気が『砂漠の舞姫』と呼ばれる一人の踊り子であった。そんな町の中、紅珠はある人物を探していた。・・・オリジナルファンタジー小説。歴史好き、古代史好き、神話好き、オカ

ルト・ミステリー好きの作者による、色んな要素の詰め込まれまくった話です。

## 1 花の祭

まわれよ まわれ  
緑の束は てっぺんに  
白い 乙女の手で

大地は 火をおこ熾し  
火は 風を呼び  
風は 水を揺らし  
水は 大地を潤おし  
そして大地は 緑を生む

だから

おどれよ おどれ  
裸足の爪先で 緑がおどる  
白い花かがり 裾に散らし

おどれよ おどれ  
くれないの乙女の腕に  
緑の束を その腕に

（トゥバン吐蕃の春祭りに歌われる民謡より）

## 1 花の祭

吐蕃<sup>トゥバン</sup>奥<sup>オウ</sup>コ<sup>コ</sup>ク西部の有力国、沙南<sup>シャナン</sup>公国はこの時季、本格的な春の訪れ

を迎えるため、その準備に人々が忙しく立ち働いている。特に5月は農業を本格的に始めるに当たって、豊作を願うての春祭が催される。

この春祭は、沙南公国に限らず吐蕃全土で、少しずつ時期や内容を変えて行なわれているものである。

沙南公国の地形は盆地でやや緯度も高いため、気候のわりには春の訪れは遅い。しかし年間を通して比較的温暖湿潤な土地柄であった。また、沙漠との境界に一本の南部へと流れ下る川があり、そこから水を引いた水路が公国内部に張り巡らされている。これは先年まで吐蕃皇国全土で行なわれていた運河造営事業の一環として整備されたもので、吐蕃皇国首都、大都<sup>ダイト</sup>まで直通の水路もある。

地形は西の沙漠から川を隔てた平地から、北、東、南側の山地へとなだらかに高度を上げていく。そのなだらかな地形の高低が、緩やかな季節の変化を生み、多様な自然の恵みをもたらしていた。

現在沙南公国の経済の主力は東西交易、地下資源の発掘、金属精製であった。農耕も行なわれているが、地形上、あまり広い耕作地は取れない。そのため、穀類よりも果樹や野菜の栽培が中心となっている。しかし全体として沙南は豊かな国である。何よりも三つの大陸横断交易路の内の一つ、「沙漠の道」の東側の終着点であり、交易の拠点となっていることが大きい。交易商人の間で「緑の宝石」などとも呼ばれているところからも、その繁栄ぶりがうかがえるであろう。

嵐<sup>ラン</sup>が沙南公国領内に入ったのは初夏の頃、吐蕃暦331年の5月のこと。丁度沙南では春祭の準備が行なわれているところであった。「なるほど噂通り大した町だのう」

祭の準備に賑わう沙南公国中心市街地の一角に、嵐は立っていた。

嵐にとって沙南は初めて目にする吐蕃の大都市であり、初めての大都市でもあった。そのため冷静に観察しようとしていて、実のところ興味津々な感情を抑え切れるものではなかった。

沙南の町の中心に、西公セイコウの住まう屋敷兼沙南公国府がある。

西公とは通称で、吐蕃オウ皇によつて「公」の称号を与えられた者が治める三つの公国のうち、皇国の西側に位置するのが沙南公国であることから、沙南公のことを代々、「西公」と呼んでいるのである。現在の西公は珪潤ケイジュンという、30代前半の若き統治者である。

沙南公国府は別名「雲水城ウンスイジョウ」と呼ばれている。

西公の住まう屋敷や行政府などたくさんの建物がある周囲は大きな楕円形の土壁で囲まれていて、更にその周囲を三重の堀が囲んでいる。その堀で区切られた区画毎にエリアが分かれていて、内から住居区、商業区、農耕区、となっている。

そして公国府の南側は三重の堀の上を塞いだ大きな広場となっていて、国の行事や年に二度の大市など、多目的な場所として使用されていた。

沙南の春祭で中心行事が行なわれるのも、この広場である。

町の北側から沙南公国に入った嵐は、忙しげな人々の間をのんびり歩きながら広場まで辿り着いていた。

「これが有名な沙南の水上都市か……」

呟きながら見上げる嵐の視線の先に、沙南公国府がある。土壁造りの堂々とした、しかし素朴な、まるで塔のように見えるのが、公国の政治が行なわれている国府庁舎である。

その他の建物も同様の造りで、屋根部分は緑色のまる円瓦で葺かれていた。それが周囲の堀に湛えられた水や、耕作地と調和して、非常に穏やかで美しい風景を作り出していた。

これが沙南公国府が「雲水城」と呼ばれる由縁であり、沙南中心

地が「水上都市」と称される由縁でもあった。

「何だかほっとするの……」

うんつとのびをした嵐の表情が我知らずふにやっと綻んでいた。

その時丁度側を通りかかった老婆がにこりと笑いかける。

「あら坊や、お城は初めて見るの？ 大きいでしょう？」

「……ああ、まあ」

(…………『坊や』…………)

さすがに数秒言葉を失っていた嵐であつたが、とりあえず無難な答えを返す。

「坊や、沙南は初めて？」

しかし何の疑問も感じなかったらしい老婆は尚もにこにこと嵐に話し掛ける。

「……ええ、まあ」

嵐も彼女に合わせて笑顔を返す。

「いい時期に来たわねえ。ここのお祭はほんとに賑やかで楽しいのよ。私は毎年この時期が待ち遠しくて」

「……確か、祭は明日からとか？」

「ええと、そうね。明日の夜からね。でももうあっちの方ではお店もいっぱい出ているわよ」

老婆がにこにこした表情のまま、北の方を示す。嵐がそちらに目をやると、広場から外の通りにかけて、黒山の人だかりと色とりどりの天幕が続いていた。恐らく沙漠を渡ってきた商人たちも、そこで店を張っているのだらう、と嵐は思った。

「ししょー!!」

その時どこからともなく、過ぎるくらい元気な大声が聞こえてきた。その既に聞き慣れた声に、何となく嵐はほっとする。

「ああ、では連れが来たようなのでわしは……」

嵐は老若男女問わず苦手にすることもないし、大抵の人間とすぐに仲良くなることができるといふ特技を持っていたが、さすがに『坊や』扱いをされることは精神的に辛かつたらしい。しかしそんな感

情を表面に出さないのも、嵐という人物であつた。

「あらあら、引き止めちゃってごめんなさいねえ。ではごめんくださいまし」

最後までにこにこしたまま、老婆はゆつくりと歩み去っていった。

老婆と入れ替わりに元気な足音が近付いて来る。

「師匠、お待たせしましたー…って、あれ？どうかしました？」

「…いや、何でもない」

元気良く駆け寄って来た百が、きょとんとした表情で嵐を見下ろす。

（どちらも疲れる…）

内心ため息を吐く嵐の周囲には、珍しくどんよりした空気が漂っているようであつた。

「師匠、言われた通りの宿を見つけました！大きな荷物はおやじさんが預かってくれるってんで、お願いしてきました！それからいち市は城の東の方にたくさんあるそうです！」

百が元気良くはきはきした口調で嵐に報告する。こころなしか姿勢も直立不動である。

「うむ、御苦労であつたのう、百」

「えへへ…」

嵐のねぎらいの言葉に、百が嬉しそうに笑う。まるで子供である。

（よくもこれほどに素直な人間が育つものよのう）

百と出会って行動を共にするようになって数週間、既に嵐は感心の域にまで達している。

百の嵐に対する『師匠』という呼び名は、嵐の妥協の結果である。当初百は『お師匠様』と呼びたがっていたのだが、それはやめてくれ、と嵐は固辞した。嵐は普通に名前で呼べばよい、と言うのだが、それは百がどうしてもだめだ、と譲らない。『お師匠様』が駄目なら『先生』と呼ぶ、と言われる始末。それならばまだ『師匠』



の方がましだと嵐が折れたのである。百とは意外に頑固者であるようだった。

「あ、師匠、これ知ってますか？これ、春祭の塔なんです。まだ出上来がってないみたいだけど、花とかいっぱい飾って、すっげーきれいになるんですよ！」

百が広場中央を指して言う。

そこには2、3メートルほどの高さの塔があった。塔の胴体は鮮やかな緑色の草で作られていて、現在も二、三人が飾り付けの真っ最中であつた。周囲にはこれから飾り付けられるらしい草や花が並べられていた。中でも真っ赤な大きな葉の束があるのが、目立っていた。「オレ、昔、祭に連れてきてもらったことがあるんです。そんな時と同じだ」

懐かしそうな表情をする百に、嵐が微かにからかうような表情を向ける。

「お母上に連れてきてもらったのか？」

「父ちゃんも、アニキたちもいましたよ。すっげー賑やかで楽しかったー」

しかし嵐のからかいの表情には気付かないまま、百はにこにここと懐かしい記憶を甦らせているようであつた。そんな百の屈託のない言葉に、嵐も安心したように口許を綻ばせた。

百は数週間前まで、ちょっとした感情の行き違いから母親に素直になれないでいた。母親の愛情を素直に信じられず、しかし彼自身はとても母親を愛し、大事に思っており、そんな自分の感情も素直に認められない、そんなジレンマで内心葛藤を続けていたのである。それはちよつとした百の思い込みと親子の感情の行き違いが原因であつたのだが、嵐の言葉でそんな親子の感情の縛れが解けたのである。以後百と母親の関係は回復し、百は嵐を尊敬するようになり、つい終には嵐の旅について来ることになってしまったのである。

百と母親の関係が修復されたのは喜ばしいことだと嵐も思っている。しかし百がついて来てしまったのは計算外であった。

（まあ、よいか。なるようになるであろう）

それは諦念なのか樂觀視なのか、嵐にも区別はついていなかった。

嵐がそんなことを考えている間、百は昔の記憶をたぐるのに夢中であつた。

「そうそう、確かこの塔の周りで皆が踊るんです。そんで花をもらつたりしたっけ」

「そういえば沙南の春祭は花の祭とも言われておるそうなの」

嵐も記憶を辿る。といつても彼の場合は書物で得た知識であつたが。

「確か毎年祭の象徴として一人の乙女が選ばれ彼女の舞いで沙南に春を招くとか。選ばれた乙女は『春の使者』として公に花を捧げ、それをもつて祭を締め括るそうだな」

嵐の言葉に百が目丸くする。

「へえー、そうだったんだあ。オレ、ずっと昔に来たつきりだから、あんま知らないんすよ。さっすが師匠！本当に物知りですなー！！」  
きらきらと尊敬の念に目を輝かせる百に、嵐は微かに苦笑を浮かべる。

そんな会話を交わしながら、二人は広場から市の立つ東の通りに入っていた。

広い通りの両側には東西の珍しい産物が並べられた露店がぎゅうぎゅうに立ち並び、まだ祭の本番は始まっていないというのに人々が賑やかに行き交っていた。

嵐はここで馬を買うつもりでいた。旅の始まりから馬がほしいと思いつけているのだが、実はまだ手に入れることができずにいたのである。

「ところで師匠、何で馬がいるんですか？荷物ならオレが全部運べますよ。それに吐蕃までなら船に乗ればいいんじゃないんすか？」

百が尋ねる。実際、彼はキセ黄瀬から嵐と百、二人分の荷物を一人で運んできていた。嵐は自分の荷物は自分で持つからと何度も言ったのだが、「雑用は弟子の仕事です！」と百が主張し通したのである。

といつても嵐の荷物は必要最小限しかなく、百とてそれは同様であつたため大した量ではなかつたのだが。それでも百が本気でこれから荷物持ちを続けようとしていることを、嵐は疑っていないかつた。しかし嵐は別に荷物運びのためだけに馬を欲しがっているわけではなかつた。

「足が欲しいのだよ。自由に動ける足がの」

「船じゃ駄目なんすか？」

「ああ、自分の足が欲しい。それに船よりも馬の方が早い」

嵐のきつぱりとした言葉に、百は尚も不思議そうであつた。

しかし他人に何と言われようと思われようと、嵐にとつてこれは譲れなかつた。一刻も早く自由に移動できる手段を手に入れること、そして一刻も早く吐蕃の首都、大都に辿り着くこと。これが今の彼の至上命題と言つてもよかつた。

（後二ヶ月……いや、一ヶ月。一ヶ月だ。一ヶ月の内に大都に行く。

そのためには……）

「あ！師匠、見てください！あれ、果物のジュース、美味いんすよ！！飲みましょーよ！」

つい自分一人の思いに沈みそうになつていた嵐を、百の元気な声が妨げた。嵐が目を見ると、鮮やかな赤や黄色の柄の天幕の下で、様々な果物を山と積んだ店があり、その横で果汁を絞って冷たく冷やしたジュースが売られていた。天気が良く気温も上がっているためか、かなりの売れ行きのもようである。

「無駄遣いをしてある余裕はないのだがの……」

ぼつりと口の中でばやいたものの、嵐は百に引かれるままにジュース屋に向かつた。

（まあ……このような旅も良いか）

百に引き摺られる嵐はぶちぶちとばやいていたが、決してその表情は不愉快なものではなかった。

市には様々な店が建ち並んでいた。

沙南特産の果物や鉱物から作られた金属器や装飾品があるのは当然のこと、西方の珍しい果物や物品がたくさんあるのは、「沙漠の道」によつて沙南が繁栄していることを象徴的に示していた。

西方から来たものは売り物ばかりではなかった。美しい鳴き声の色鮮やかな鳥、滑稽な動きを見せる鼠などの小動物など、愛玩動物は人気商品の一つであった。また、売り物ばかりではなく、動物同士を闘わせる見世物も人気があり、そういった見世物には沙南公国民ばかりではなく、この祭に集まった各国の人間がたくさん集まり、皆それぞれ楽しんでいた。また公然とではないが、往々にしてそのような見世物では賭けが行なわれていたりもした。その他には雑技の見世物なども祭では人気があった。

そんな見世物小屋の一つで嵐はのんびりと酒など嗜みながらその辺の人間たちと世間話に興じていた。一方、百はその見世物、腕相撲の勝ち抜き戦に出場していた。現在のところ三人抜きの真つ最中である。

「……『オウコウ皇公会議』？」

嵐が眉根を寄せながらおうむ鸚鵡返しに問う。

「そう。この夏にみやこ都でやるらしいぜ」

頷いた男は、そう言うときとぐいっつと杯を干した。「もう一杯ね」と斜向かいで酒を売っている売り子の少女に赤ら顔で笑いかける。

「しかしそのような話、聞いたことがないぞ」

「そりゃそうだ。今聞いたんじゃないか」

「いや、そういうことではなく……」

男たちのやや調子外れの笑い声の中で嵐は苦笑する。まだ真昼間

というのに、すっかり男たちはできあがってしまっているようだった。その中でちびちびとやっている嵐は、まだ全くのしらふ素面であつたが、そもそものが酒に強い男なのである。

「ああ、でもな、俺も結構最近聞いたぜ、それ。やっぱ急に決まったんじゃねえか？」

東方の国々から商品を仕入れてきたという男が言った。

「…そうだよな。確か今年の夏は試験があるはずだろ？都の工事もあるし、変だよな、こんな時期に会議なんて」

「変じゃねえよ、なんたつて皇サマのことだぜ？ただ単に思い付いたつてことじゃねえの？」

「おいおい、そんなん役人に聞かれてみるよ、おまえ首が飛ぶぜ？」首に横に手を当てて引く動作をしながらの台詞に、嵐が首を傾げてみせる。

「…ああ、都じゃあ皇の悪口言っただけで両手が後ろに回るなんていうんだよ。ま、ほんとかどーかは知らんがね。でも実際、昔より役人が厳しくなつたつて感じはしたがね」

昨年冬に皇都・大都オウトにいたという男が言う。

「なんかさー、やりにくくなつたよな。規則だかなんだか知んねえけど、役人どもが最近うるせーのなんの。前はどこで店やってようが文句なんて言われたことねーんだけど、こないだなんか、くじひかされてさ、それで場所決めさせられたんだぜ、違つてここで店やつてた奴は捕まつて罰金取られたつて聞いたしな」

別の、やはり大都にいたという男の台詞に、会話に加わっていた男、旅商人たちが一斉にざわめく。それぞれが顔を歪ませて嫌そうな表情をしている。

その中で嵐は冷静に考えを廻らせている。

（確か、現在皇都では新しい都を建設途中であつたな。そしてそれは東西の道路できつちりと区画整備された計画都市であると聞く。住宅地も身分で階層分けがはっきりしていて、一般庶民は都の中に家を持つこともできぬと聞く。その代わり、都の城壁内部はイメー

ジが統一され、たいそう美しいものになっていると聞く。

であれば、おそらく臨時の市の開かれる場所などもしっかり決められているということなのであるうな。そしてその内訳もその都度抽選できつちり分けて管理するというわけか。いや、そのときに場所代を取っていたりするかもしれないし、ある程度人物を選んでおるやもしれぬ。まあ、良し悪しはともかく、窮屈な感じにはどうしてもなるであろうな。

それにしても、『皇公会議』か。確か前回行なわれたのは三年前、皇位継承の儀のとき。それ以降は大きな会議は行なわれておらぬはず。しかもここ数週間で開催が決定され、しかも日時が二、三ヶ月後……いかにも性急で異常だ。それほどに緊急の事情があるのか？それとも　　)

考えを廻らす嵐の耳に、わっと歓声が届く。

「ししょー！八人抜き達成ですー！！新記録だそうですー！！！」  
その歓声突き破って自称・弟子の声が嵐の意識を現実に取り戻す。嵐が視線を遣ると、百がにこにこ満面の笑みを浮かべながら、両手を大きく振っている。嵐も軽く手を振ってそれに応えた。

腕相撲はまだ続いているようであった。記録を更に伸ばすこととしたりしい。わくわくして、楽しくて仕方ないのだろう。相手を迎えて構える百の表情は今までで一番いい表情をしている、と嵐は思った。

それにしても、と嵐は考える。

(やはりあやつは相当力があるようだのう。伊達にきこり樵をやっておったわけではないようだ。やはりあやつを活かすのは戦闘用員としてか)

嵐は百を弟子として迎えているつもりはない。実際、それは百にもはつきり告げてある。それでもよいならついてきていい、と告げると、それでも百は嬉しそうに頷いたのだ。

嵐は、実際のところ、百に何も教えることができないわけではない。学のない百に文字や計算を教えることもできるし、嵐自身が今

まで蓄えてきた知識を伝えることだって、可能である。しかしそれは決して百を高めるものではない、そう嵐は何となく思う。もちろんそうして悪いことはない。だがそれで百は何をすることができなのか。百は決して頭は悪くないと、嵐は思う。だが彼に学問が似合っているとは思わない。彼を活かす道は、必ず別にある。その方向へ導くことができないなら、自分に百の『師匠』たる資格はない、と嵐は考えている。しかし。

（……わしにあやつを鍛えることができるわけがないではないか）  
自分が百に戦闘技術を教える様を想像すると、笑わずにはいられない。どう考えても百のほうが嵐よりは強い。もちろん、嵐の杖の力を使えば別だが、それでは百を鍛えることにはならない。

（それにあやつには別の力も感じる。…恐らく、術力だ。かなり微弱だしその性質も探れぬが…どちらにせよ、術力の無いわしにはそれもうしようもないこと）

嵐は術力の箆められた杖を扱うことはできるが、彼自身に術の能力は無い。術具が使えるとは言っても、術具であれば何でも使えるかといえば、そうではない。

ひとことと言えば、嵐には戦闘力はまったく無いのである。以前、沙漠の街で出会った女戦士には簡単に見破られてしまったように。ついでに言えば、彼の持つ術具も、基本的に守護の術具である。『過剰防衛』を『攻撃』の力に応用することがせいぜいなのである。

（…どうすればよいのかのう……）

一番よいのは百の戦闘能力を引き出し、効果的に鍛えてくれるような人物に彼を預けることである。しかしあいにく嵐にはそのような人物に心当たりはない。そもそも吐蕃国内に人脈は無い。旅の中で何人もの戦士には出会ったが、百を預けられるほどに信用できる人物というのは、残念ながらいなかった。

（…いや、全くないこともないが）

たった一人、信用してもよいと思える人物は、しかし所在が知れない。

（信用できぬ者に百を預けるわけにはいかぬしのう）

嵐は百を弟子としては認めていないが、かといって百に責任を感じていないわけではない。何よりあそこまで無邪気に慕われて、無碍にできるほどには嵐も冷血ではなかった。

（仕方ない、やはりわしがなんとかするしかないかのう…）

考えている嵐の視線の先で百が九人目の相手に多少てこずったものの、見事に勝ち抜いた。

「後一人で十人抜きだ！！」

司会の男が芝居がかった口調と仕草で叫び、観客がどつと沸く。百の十人抜きを応援する者もその阻止を期待する者も、皆益々期待のこもった視線を競技台に集中させる。嵐も丁度こちらを見た百と視線を合わせ、頷いて見せた。ここまできたら、十人抜き、是非達成してもらわねば。

それはそれとして。嵐は仕入れねばならない情報があつた。

「ところで教えてほしいことがあるのだ。馬を手に入れたいのだが、どこで手に入るのだ？」

嵐はここに来るまでも市の中をくまなく回つてみた。しかし生憎乗騎を売っているところはなかった。もちろんまだ祭の始まる前であるため、準備中の店も多かったが、しかしそれにしても一軒もないというのは不思議なことであつた。

嵐の問いに、商人の男たちは困つたような表情をした。

彼らによると、現在個人で馬を手に入れるのは少々困難なことであるらしい。

良質の乗騎は、主に北方が原産である。東方も馬の原産地であるが、こちらはどちらかというと農耕作業に向いたもので、体力、持久力はあるが、速力は鈍い。それでも乗騎にならないわけではないが、それすら今は余裕がないという。

理由は、長年続いている皇国中での巨大土木工事である。

先年までは皇国中で運河が建設されていた。それが一段落したところで、今度は二年前の遷都に伴う都の建設工事である。それがま



た先例のないほど壮大なもので、各公国をはじめとして皇国内から供出された労働力や物資は相当に膨大なものである。当然、馬や牛なども物資運搬その他の目的で多量に供出されている。そのため、最近では一般市場に馬や牛が出回することは稀なのだという。

「まあ、そうだなあ。北に行きやあまだ、手に入れられるかもしれない。だがなあ、あそこはなあ」

「遠いだろ」

「あぶねーしな」

「いや、最近は大分安全だぞ、あの辺は。ほら、お妃様が北の方の出身だろう？だから北の方は最近結構優遇されてんだ。おかげで騎馬民族も行動をおさえられてるらしい」

「そうか…どちらにせよ遠いのう、北は」

嵐が苦く笑う。北の遊牧民を、嵐は恐れることはない。しかし彼らと接触しようと思えば、首都の大都よりも北へ行かねばならない。それでは意味がない。

「そうだ。東へ行ってみるといいかもしれんぞ、今の時期なら」

ふと一人が思い出したように言う。

「東公のところでも、もうすぐ祭だろう？あそこは王妃様の出身地だから、国も大きくて豊かなんだ。何より東公はお祭が好きで武勇の者が好きでな、力自慢の者を集めて格闘技の大会をひらくのも好きだし、武器関係も比較的楽に手に入るんだ。それにあそこは北との付き合いも結構ある。馬も手に入るかもしれないぞ」

彼の言葉に、嵐は表情を変える。

「ああ、それに東の祭の武術大会に優勝したら何でも好きな商品がもらえるって噂だな」

「まあ、それは噂だし、今から行っても大会には間に合わないかもしれないが…でもまあ、行ってみる価値はあるんじゃないか？」

「東か…」

嵐は本気で思案する表情になった。

ここ沙南から東の公国へは、もちろん運河が繋がっていて、直通

の船便もある。また、定期便を使うなら、吐蕃王国へは東の公国を経由することとなる。旅程として特に問題はない。

また、東は現在後宮で最も位の高い「王妃」の称号を得ている姫君の出身地であり、吐蕃の中でも歴史ある由緒正しい家柄の一族の治める国である。嵐としても充分に興味のある国であった。

「百選手、見事十人抜き達成――！！！」

そのとき、どつという歓声と共に司会の男の一際大きな声が周囲に響いた。

嵐が振り向くと、百が両手を上げて観客の歓声に応えているところであった。百が嵐に向かって滅茶苦茶に両手を振り回している。嵐もにつこり笑って手を振り返してやった。

（…せっかくの祭だが、あまりのんびりしておられぬようだな）  
嵐は既に心を決めていた。

二日後の早朝、嵐と百の二人は東行きの定期便船に乗り込んでいた。

向かうは東の公国、沢東。<sup>タクトウ</sup>到着するのは順調にいつて一カ月後のこととなる。

## 2・砂漠の舞姫

吐蕃<sup>トゥバンオウコク</sup>皇国首都・大都<sup>ダイト</sup>は広い。また全国各地から集った者たちで町中溢れ返っている。その職種も様々であった。

政治家、商人、職人、そして芸能者。

大都では毎日複数の人種、職業、言語が入り乱れて交わされていたが、基本的に彼らの住まいや活動区域は厳密に区分されていた。

王城<sup>エンジョウ</sup>である『円城』を中心として役人や高官たちの居住区、行政区、商業区、という順で、それ以外の者は大都の城壁の外にいた。

しかし大都会であるがゆえの弊害もある。

大都は都として既に機能している。しかし今現在も造営中である。そのため、必然的に都全体に警備の目は届かない。その警備の目の届かないところに、低所得者、又は浮浪者やならず者の集まった地域、いわゆる貧民窟<sup>スラム</sup>が存在していた。

この地域のことは一種の禁忌<sup>タブー</sup>である。大都の住人、果ては大都の守備職である、軍や警察も見て見ぬ振りをしているのが現実であった。誰も進んで関わりうとはせず、触れようとはしない。スラムには一種独特のルールが存在していると言っても過言ではない。

吐蕃曆331年4月末。

このスラムを一人の人物が歩いていた。都市の整備の最も遅れた地域であるそこは、乾いた土。それは赤みを帯びた吐蕃地域独特の色をしていた。と粗末な天幕、そして建造途中なのか破壊されたのか、所々崩れた城壁があるのみで、まるで王都ではないような印象であった。

そこここからの好奇や敵意の視線を浴びる中、その人物は何かを探すかのように視線をあちこちに向けながら歩いていた。

その姿は黒の頭巾にこれまた黒の長いマント、歩を進めるたびにのぞく足もやはり黒革のブーツといった、正に全身黒づくめであり、その背中に長く突き出した二本の棒状のものがあった。

歩みは堂々としたもので、全くこのスラムという空気に遠慮も萎縮もなく、奇妙な威圧感すらあった。行き交う者たちも興味を引かれて視線を向けてはいるものの、何となく近寄り難さを感じて遠巻きにしているのみであった。

（誰だあいつ…？）

（またえらく毛並みがいいじゃねえか）

（この辺じゃ見かけねえな……）

（政府のヤクニンか？）

（いや、それならあんな妙なかつこしねえだろ）

（たった一人で来るわけもねえ）

そんな囁きが聞こえぬでもないだろうに、その人物は全く気にした風もなく、相変らず何かを探している風に歩いていた。

そんな奇妙な緊張状態が不意に破れた。

数人の男たちが歩いてくるのをかわしそこね、肩がぶつかったのである。

どん、と軽い音とがちゃりと金属の鳴る音が重なる。

「あ、すまない」

短い謝罪の言葉は黒づくめの人物から発せられた。その声に、怒鳴りつけようとしていた男の動きが一瞬止まる。

「…こいつ、女か！」

その声は意外に響き、周囲の空気が一気にざわめく。

当然のことながらスラムには女性もいないことはない。しかし圧倒的に人数は少ないし、職種も大抵あるものに限定される。スラムにいる女性が珍しいというほどのことはない。しかし、たった一人で、若い女性が乗り込んでくるということは皆無に等しい。

それも美女というなら尚更のこと。

彼女が振り向く間もなく、黒の頭巾が引き摺り落とされた。ふわりと長い黒髪が揺れ、甘い香りが微かに散った。

周囲のざわめきが一層高まる。

頭巾の下から現れたのは若い女性の顔。それも端的に言ってとびきりのつく美女。都の美女を見慣れている彼らでも思わず見惚れてしまう、絶世の美女であった。

頭巾を落とされて、彼女は不快そうに眉を顰める。深い紫色の瞳が周囲を睨み付ける。

「何してんだよねちゃん、こんなところで」

好色そうな表情でにやにやと口許に笑みを浮かべた男が彼女に顔を近付ける。彼女は益々表情を歪めて男から顔を反らす。

「迷子かあ？ここがどこなところか知ってて入って来てんのかい？」

反らした先で別の男が先ほどの男と似たような表情で彼女に近付いてくる。彼女は形の美しい眉を寄せて再び視線を反らす。

彼女の明らかな嫌がっている反応が益々男たちの嗜虐心を煽る。

しかし彼らは彼女の表情が嫌がってはいるものの、恐怖心を感じてはいないことに、気が付いていなかった。

少しの間に彼女は10人ほどの男たちに囲まれていた。更にその周囲では、近付いては来ないものの、あからさまな好奇の視線が包囲していた。

彼女はふうつと深くため息をつく、眉を顰めて周囲の男どもをぐるりと見渡した。

「…一応、尋ねてみるが」

やや低めの、よく通る声が発せられる。その声音すら音楽的に耳に美しかった。

「人を探している。『エック』という名の人物だ。この辺りでは占いなどをしていると聞いている。誰か、心当たりのある奴はいないか？」

しかし誰も答えられる者はいなかった。彼女は更に周囲にも視線を向けるが、良い反応は返ってこなかった。

「ねえちゃん、占い師なんかは何の用だよ？」

好奇の表情と声で無精髯の男が一步近付く。

「男運でも占つてもらおうってかい？」

「そんなもんより俺らと……」

背後から近付いた男が彼女の肩に手を触れようとする。しかし一瞬早く、彼女がくるりと身を翻した。男の手が空を切る。

「私に触れるな」

冷たい声が男を、男どもを打つ。作り物のように整った端正な顔と、美しい紫色の瞳に見下ろされ、男がかつと紅潮する。

「お高くとまつてんじゃねえよ、何様だ、貴様あ」

スラムの住人に包囲されているというのに、彼女の表情も態度も恐怖とは全く無縁であった。むしろ好奇で群がってくる男どもを蔑んでさえいる。そこまで気付かずとも、彼らが嫌がられてはいるものの、恐れられていないことは明白で、男たちの自尊心を傷付けるには充分であった。

「……私は何者が知らぬ者に用はない」

ぼそりと呟くと彼女はくるりと踵を返した。まるで包囲している男たちを無視したその行動に、一瞬男たちはあつけにとられたが、すぐに気を取り直す。

「ふざけてんじゃねえよ！このあま女ア！」

怒声を発しながら、背を向けた彼女に、殴りかかる。瞬間、半身を捻った彼女の腕が殴りかかってくる男の腕を弾く。男は勢い余って地面に突っ込む。

「てめえ……！」

別の男が殴りかかる。頭に血を上らせた男たちは剣やナイフを抜いて彼女に飛びかかる。乱闘が始まった。

「……ああもう、うつとおしい」

心底うつとおしいという表情と口調で彼女が吐き捨てる。何人かの

拳をかわすと、体を捻る反動でばさりとマントを跳ね上げる。右手が背中の細長い棒状のものを引き抜く。そして軽く踏み込むと跳躍して体を回転させる。

「ぐえ！」

「げほっ！」

耳障りな悲鳴を発して何人かが倒れる。その中にひらりと彼女が着地する。頭の天辺で束ねられた長い髪とマントがふわりと空を舞い、まるで舞を舞っているかのように美しかった。しかしその手には優美さとは縁薄いもの、鞘に収められたままの長刀が握られていた。

「すぐ終わらしてやるよ、怪我したくないならどつか行きな！」

よく響く、耳障りの良い声が、優美さとはかけ離れた台詞を吐く。言うと同時に左手が背中のもう一本の棒を引き抜く。それは右手のものよりやや短い、鞘に収められたままの刀であった。

乱闘は数分で片が付いた。

呻き声を上げて地に伏す怪我人たちの只中で、元通り背中に二本の刀を収めながら、女が周囲に視線を投げる。結局二本の刀は一度も鞘から抜かれることはなかった。

あつけにとられているギャラリー観客に向けて、彼女は声を張り上げた。

「私の名前は紅珠<sup>コウジュ</sup>。『エック』という者を探している。何か情報があつたら教えてくれ。相応の礼はする」

そう告げると、地面に落ちたままであつた頭巾を拾うと、元通り被り、マントを直しながら歩き始めた。

（人とはなかなか見付からないものだな…）

紅珠は水路の石段に腰掛けて頼杖をつき、水面を眺めていた。

彼女が吐蕃皇国首都・大都に入城したのは二週間ほど前。それから毎日、彼女は人探しを続けていた。仕事のない時間には必ず町を歩き回り、何ヶ所かに散らばるスラムに入り込んで情報を求め、協力者を集めてきた。

初日に乱闘騒ぎを起こしたことで、「紅珠」の名前はスラム中に知れ渡っていた。もちろんその武勇も共に。そのため腕におぼえのある者から狙われることもいさかならずあったが、しかしそれも彼女の計算の内であった。

スラムにはスラムの秩序があり、ルールがある。もっとも解りやすいものが「弱肉強食」である。反対に言えば、力の有る者はほぼ無条件に一目置かれる存在となるのである。

また、スラムの秩序をある程度制御する役割として、各地域のボスが存在していた。彼らはスラムのことなら何でも把握していた。当然スラムで名が知れるということは彼らに目をつけられるということでもある。彼女はそれを逆手に取った。自分の存在を彼らに知らせることによって近づく機会を作ったのである。

彼女は既に何人かのスラムの有力者や情報屋と接触した。スラムでの探しものは彼らの協力を得ることができればほぼ見付かる。しかしそれでもこの二週間、彼女は探し人に会うことができずにいた。「まあ、覚悟はしていたからな」

ふっと息を吐くと、彼女は軽く髪をゆすって顔を上げた。その動きに合わせて、しゃらん、と涼しげな音が鳴る。

彼女は、スラムに入り込んでいるときと現在では全く違う姿をしていた。

今身に着けているのはいつもの黒のなめし皮の丈の短いチュニツクではなく、淡い若草色の長衣であった。色自体は地味だがその長い袖先や襟や裾には赤や黄の色系で美しく刺繍が施されており、とても華やかであった。その下は白のゆつたりとしたズボンである。

服からのぞく手首と足首にはそれぞれ小さな鈴の付いた輪飾りが



嵌められていて、微かな動きでちりちり、と可愛らしい音を立てていた。

普段は動きやすく束ねてあるだけの髪も、今は幾本もの束に編まれていて、玉やりボンが編み込まれたり飾られたりしていて、非常に華やかであった。

その姿は見る者が見れば分かることであつたが、吐蕃北方一帯の少数民族のものとよく似ていた。もちろん彼らはここまで派手に飾り付けられた格好はしていない。だが、衣装の若草色はその地域では春を象徴する色であつた。

もちろん彼女がこんな派手な格好をしているのには理由があつた。

「おい、紅珠！もうそろそろ始まるぜ！」

水路沿いの天幕から出てきた男が彼女を呼んだ。

「ああ、今行く」

返事をして立ち上がった紅珠の耳元で、台に三つの紅玉の嵌め込まれた耳飾りが揺れ、きらりと西日を反射した。

これから、彼女の大都での「仕事」が始まるのである。

\*\*\*\*\*

ティエンラン

『天藍』は現在大都で最も人気のある芸能一座である。

メンバーは全員が『砂漠の民』で、各地を旅しながら芸を披露して生計を立てていた。

現在は大都で一ヶ月ほど前から公演を続けている。

『天藍』の公演は一日二回、昼と夜で、一回毎に演目を少しずつ変えており、それが観客を飽きさせず、人気を呼ぶ元となっていた。

演目は様々である。

この日は四、五人の踊り子の登場から始まった。露出度の高い衣装を纏った踊り子たちが、軽快なステップで男たちを誘う舞を披露する。

天井のない藍色の幕を円形に張り巡らせただけの野外劇場で、あかあか明々と燈されたかがり火に照らされて、観客の歓声や囃し声を浴びながら賑やかに踊り子が去ると、軽業師や動物使いの出番である。

美しい女猛獣使いが従順な犬のように巨大な獅子を引き連れて退場しても、拍手は鳴り止まない。むしろ更なる期待が籠められて益々熱くなる。

観客の関心は続く演目に集中する。通称『砂漠の舞姫』の登場。これがここ二週間ほどのこの公演のメインとなっていた。

充分に余韻を引っばったところで、しゃん、と曲調が変わる。するとあれほど騒がしかった観客がピタリと静まった。

増やされたかがり火の火灯りが周囲をやわらかな明るさで満たした。

賑やかな、聴いているだけで楽しくなってくるような音楽が奏でられる。

《春が来たよ

春が来たよ

天からの光が

我らを包んでくれる

枯れた大地に

光が染み込んでゆくよ》

演奏に会わせて、張りのある、涼やかな歌声が重なる。

高くもなく低くもなく、耳に心地良い、響きの良い歌声であった。歌に続いて劇場中央に人影が現れる。若草色の長衣に白いズボン、頭には白いレースのベールを被った、その姿に、いったん静まっていた観客たちが、再びわつと賑わう。

幕を張り巡らせただけの野外劇場は、どちらかと言えば演じることが難しい。声も音も動きも、そのエネルギーのほとんどが周囲に吸収されてしまう。

そんな場にあつて、しかし彼女の存在は圧倒的な力を持ってその場を魅了していた。

《彼らは天の使者だった

彼らは優しい心だった

女の涙が枯れた大地を潤おして

男の温かさが凍えた生物を解かし出した》

闇を明るく切り取ったかがり火の中、彼女の声が、足先が、腕が、指の一本の動きさえその場のすべての視線を惹き付け、その舞によって語られる物語に、その空間に、観客たちを引き込ませた。

それが、彼女に『舞姫』の異名をとらせ、大都で一躍人気の芸人とさせた由縁、人々を魅了する舞の圧倒的な実力である。

ふわり、と舞いながらターンをし、その勢いでベールを引き落とす。しゃらん、と涼やかな音がして、幾束もの編まれた黒髪が火灯りに煌めいた。ちゃらり、と三連紅玉の耳飾りが揺れる。

ひゅうつうつと、観客席から口笛が飛ぶ。

炎に映えて白い顔の中の紫色の瞳がふつと笑みをたたえた。くつきりと施された化粧によってより際立つ美貌が、舞と歌声の魅力に重ねて観客の心を捕らえる。

しなやかに腕が空を舞い、手甲の金属片がしゃりん、とりズムを

刻む。

《空とはこんなにも青かったのか

大地とはこんなにもやわらかなものだったのか

水とはこんなにも透るものだったのか

草も木も花も

こんなにも美しいものだったのか

これらはすべて

彼らのもたらした春によるもの》

たんたん、と踵が打ち鳴らされ、足輪の鈴がりりん、と鳴る。

今夜の演目は「春の舞」と呼ばれるもので、元は吐蕃北東の少数民族に伝わるもので、春を迎える祭において演じられるものである。これは一つのストーリーを楽器の演奏と踊りと語りで表現するというもので、ストーリーは同じでも、表現方法や長さは微妙に違い、演者によつては一週間から一ヶ月近くの時間がかかる。

しかしそんなに長いものはこのような公演の場にそぐわない。そのため、彼女が今夜演じているのはそのストーリーのほんの一部分、長い不毛の時を経て、二人の「天の使者」の働きで、「春」がその地の民にもたらされる、クライマックスの場面である。

その地には長い間、春が訪れるということがなかった。光が奪われてからというもの、大地は枯れて荒れ果て、草木は凍え、生き物は生命を脅かされていた。

そんなある日、男女二人連れの旅人がやって来た。

実は彼らは天から降りて来た使者で、その地の惨状に大層心を痛めていた。

彼らはその地のお姫様の願いを聞き届け、天にはたらきかけた。彼らの尽力により、天から光が射し込み、大地には再び生命が甦

った。

お姫様は彼らに大変感謝して、お礼に舞を舞った。

そのお姫様の感謝の舞が、彼女が今演じているものである。

大きな感謝と喜びを歌ったこの舞は非常に楽しく、賑やかなもので、観客と演者が一緒になって盛り上がることができる。

《春は光

春は命

たたえようたたえよう

我らの大地に春が来た》

即興混じりの演奏と踊りは充分に観客を引き込み、興奮させ、そして共に終焉へと導かれる。

伸び上がった腕が天を抱き、ひらりと身を翻して大地に膝まづく。こつべ頭を垂れるその姿は祈りにも似て、物語の終わりを表していた。

『砂漠の舞姫』が退場した後も観客の熱狂は止まない。

興奮の続く場内に、笛と打楽器の演奏が軽妙に響く。

派手な仮面を被った男が八方に礼をしながら終演の口上を述べている。

しかしそんな声を圧倒して観客の声はいつまでも『舞姫』を、『天藍』の名を称えていた。

\*\*\*\*\*

「お疲れ様、紅珠！」

公演も終わり、何とか観客も全員が帰った後で、楽屋となっている天幕の中で、踊り子の少女が声をかけてきた。

「お疲れ様、荔枝<sup>リージー</sup>」

舞台衣装を着替え、化粧を落としていた紅珠が振り返る。

「それにしても紅珠って、ほんとすごい。あんなだけの数の観客奪っちゃうんだもん。あたしなんか全然叶わない。ほんと羨ましいわあ」

荔枝は『天藍』の踊り子で、やはり『砂漠の民』の一員である。

彼女はほんの小さな頃からこの劇団に所属して、踊り子として修行を続けていた。まだほんの少女だが、今夜も第一の演目の踊り子の一人を務めるほどの実力である。そんな彼女のやや紅潮した頬を見遣って、紅珠は苦笑する。

「何を言っているの。あなたも充分魅力的よ。私は私。あなたはあなた。そもそもキャリアが違うわ」

ここで全く謙遜などしないのが彼女という人物であった。しかしそれが全く厭味に聞こえないのは、彼女の持つ雰囲気によるものが大きいであろう。

「ほんと、座長がいきなりあなたをメンバーにしたときはびっくりしたけど、まあ、それも納得だね。『舞姫のいる一座だ』何て言われちゃって、あなたのおかげでうちも大成功しちゃってるしさ」

「ああ、感謝してるよ。急にお願ひしたにも関わらず、私を受け入れてくれたしな。いきなり演目の一つ持てと言われたのはさすがに驚いたがな」

苦笑しながら髪を簡単にまとめると、彼女は長いマントを手に立ち上がるうとした。その様子に、荔枝が目丸くする。

「あれ、また今夜も出かけるの？たまにはご飯でも一緒に食べようかと思ってきたのに」

やや残念そうなその言葉に、紅珠は一つ瞬きすると、微笑んだ。

「…ああ、ありがとう。だがもう行かねばならないんだ。座長に朝までには戻ると伝えておいてくれ。　ご飯はまた、今度一緒させてくれないか？」

「　うん、わかったよ。いつものことだしね」

そう言つて頷く荔枝に軽く頭を下げると、紅珠は荷物とマントを持って天幕を出た。

天幕を出たところで両肩に二本の刀を担ぐと、その上からマントを被った。

（今日は…北の方へ行ってみるか）

夜更けになつても明かりの消えない大都の町を、紅珠は静かに歩き始めた。

### 3・『隠者』

吐蕃<sup>トウバンオウコク</sup>皇国の首都、大都<sup>ダイト</sup>には、他の都市にはない、誇るべきものがある。

その一つが都市の地下に整備された地下水路である。上下水とも揃ったそれは、この時代、世界唯一のものであった。

もっとも、地上には運河に繋がる水路が縦横に引かれているため、下水はともかく、上水は必要がないようにも思われる。確かに下水道が都市全体に整備されているのに対して、上水は町の北側のみに敷かれている。つまり王族や貴族など、位の高い人物の居住区でのみ使用することが出来るものであった。

しかしそれでも地下に上下水の設備を有しており、汚水が都市の表面を流れるということがないだけでも、大都の水道設備は、現在世界唯一の、画期的な技術なのであった。

(…ここが汚水路でなくて、本当によかった……)

ようやく視界が闇に慣れたところで、紅珠<sup>コウシュ</sup>は複雑な心情でため息を吐いた。

紅珠は元々傭兵という職業柄、夜目の利く性質であり、闇への順応性も高い。更に突発的な事態に対する反応も優れている。恐らく、彼女がこの地下水路に落ちてから、ものの30秒と経ってはいないであろう。しかしだからといって安心できる状況では、実はなかった。

紅珠はなるべく音を立てないように慎重に身を起こしながら、神経を極限まで鋭敏にして周囲の状況を探る。しかしどんなに気配を探っても、危険を感じるものはなく、やや訝かしみながらも、彼女はようやく緊張を解いて立ち上がった。



紅珠が現在いるのは大都の地下水路である。

地下水路には地上の水路と繋がっているものもある。ここはその一つで、水路の水位がある一定の高さを越えると、余分が流れ込むような仕組になっているのである。こういった仕組が都市中何箇所か設けられていて、それによって例えば大雨が降ったりして水路が増水しても、都市が水浸しにならないように、調節されているのである。

現在は特に増水しているわけではないが、大都の水路に水を引いている川　大都の北を流れる大河、明江　の上流である西方地域の大雨の影響が、途切れることなく水路から地下へと水が流れ落ちてきている。

地上から急斜面を流れ落ちてきた水は、少し広めの「池」に溜まり、その上澄みが闇の奥へと水路を伝って流れるようになっていて。紅珠が立っているのは、その「池」の場所であった。

水深はさほどなく、立ち上がった彼女の脛辺りまでであった。しかし水路に後ろ向きに突き落とされたため、背中から水に落ちてしまった彼女は、当然全身ずぶ濡れの状態であった。

紅珠は憮然とした表情で、まずマントを脱いだ。全身を隠せる大きさのそれは、たつぷり水を吸い込んでずしんと重くなっていた。その水気を絞ってから、顔と髪の毛の水を払う。彼女の髪は腰の辺りまでの長さがあったが、今日は半分ほどを後頭部に纏め上げて残りを垂らしている程度だったので、ほとんど濡れなかったのが幸いであった。もし本当に頭から水を被った状態になっていたりしたら、頭が重くて大変なことになっているところであった。

幸い、マントの下地の黒革のチュニクはほとんど水を吸い込んでいなかった。ブーツも沙漠の塵芥を入れない仕様であったのが幸いして、水の浸入を防いでくれていた。

手早く全身の水を拭くと、彼女はようやく眉間の皺を解いた。そしてつい先ほど自分が落ちてきた穴を見上げた。

（さっきのはなんだったんだ…）

高くから射し込む地上の光に目を細めながら、紅珠は今までのことを思い返していた。

紅珠はここ最近、日課のように貧民窟（スラム街）通いを続けている。目的はただ一つ。この大都のどこかにいるという「エック」という人物を探すためである。

「あんたも粘るなあ」

今日もスラムに姿を現した紅珠に、彼はニヤニヤと笑いを浮かべながら言った。彼はこの大都のスラムを仕切る有力者の一人で、秦シといった。

連日スラムに入り込み、何かと掻き回す女がいると部下たちに訴えられ、紅珠に興味を持った彼が、彼女を連れて来させた。普通こういった場合、優位に立つのはスラムのボスである秦のはずであったが、いつの間にやら彼らの関係の主導権は紅珠が握ってしまっていた。そして彼女の人探しに協力するため、情報を提供するようになっているのである。

その日、『天藍ディエシラン』での朝の練習を終えてスラムにやってきた彼女は、いつものように全身黒尽くめで背中に二本の刀を背負った姿で秦の目の前に立った。

足首まであるマントで彼女の全身が隠れているのは、非常にもつたいたい、彼は思う。いや、そのおかげで時折覗く指の白さだとか、ブーツに包まれた足の形の良さだとかが強調されて想像力も働くというものであるが。

一方、紅珠は秦の品のない笑みに冷めた一瞥をかけただけで、本題を切り出した。

「何か情報は入っているか？」

「いや…悪いな」

ちつとも悪いとは思っていない表情で答える秦に、紅珠は軽く肩を竦めた。

「くエツク」がこの町にいるというのは確かなんだな？」

確認する口調に、秦はうなずいた。

「ああ、確かにそういう奴がいるって噂は耳にしてる。だが俺も姿は見たことがないし部下にもそういう奴はいねえ」

何度か聞いた台詞であったためか、紅珠は無感動とすら言える表情でうなずくのみであった。

紅珠の表情には何も表れてはいなかったが、正直なところ落胆していないといえば嘘であった。

一ヶ月。この大都に来て、人探しを始めて一ヶ月である。

一言で一ヶ月といってしまうえば簡単だが、手ばかりも足がかりもない、初めての土地での人探しである。使える手段は『沙漠の民』の情報網と大都の人間の情報。しかし沙漠の民の情報網がいかにもくとも、限度はある。ましてや吐蕃王国の首都である大都でのこと吐蕃を構成する中心の民族である吐蕃人が幅を利かせるこの土地では、いわゆる余所者は行動にあまり自由が利かないというのが実情である。

吐蕃王国は多民族国家である。主なものだけ挙げても、吐蕃王国の吐蕃族、沙南公国シャナンのユン族、沢東公国タクトウのスー族、南方海岸地域に点在する壮族など、それぞれの地域に多大な勢力を持つ民族がいるのである。

それ以外にも、例えば『沙漠の民』に代表されるように、東西南北含めて吐蕃王国に流入してきた他民族も皇国内には存在する。そういったものを含めると、実に数え切れないほどの民族が混在しているのが吐蕃王国なのである。

しかしだからといって吐蕃王国が彼らにとって住みやすい場所かといえそうでもない。

一応吐蕃皇国内に生活基盤を持つもので一定の基準を満たしている者は「皇国民」として認められている。しかし感情面では他民族に対する差別心をなくすることはできず、住居の場所や就職面で、公然とした差別が行なわれているというのが実情である。

特にその傾向が強いのが皇国の中心である「吐蕃王国」の吐蕃民族であった。ちなみにそれに対して比較的その傾向が薄いといわれるのが西の「沙南公国」を形成するユン族であった。

つまり「砂漠の民」がいかに情報収集に関して有能でも、吐蕃皇国の中心、吐蕃民族の本拠地である吐蕃王国首都大都ではなかなかその能力の本領を発揮できないのである。

そこで紅珠は「砂漠の民」の芸能一座である『天藍』に所属することで砂漠の民の情報網を利用しつつ、自ら大都の貧民窟スラムに潜入して協力を得、大都の表裏の情報を入手することとしたのである。

現在のところ、彼らの協力を得ることは成功している。しかし肝心の探し人の搜索が、進まないままなのであった。

ふと気が付くと、秦がじつと紅珠を見詰めていた。我知らずうつむいていたことに気が付いて、紅珠は視線を上げた。しかし秦はにやにやと好奇の視線を崩さなかった。こういう場合に恥らったり動揺したりしては付け込まれるだけである。そう冷静に考えたわけではなかったが、反射的に紅珠の表情は冷静さを保っていた。しかし既に遅かったのかもしれない。

「…本当に、粘るなあ、あんた」

目つきの割にからむ口調にはそれほどの粘っこさはない。紅珠は落ち着いていた。

「一体、どんな奴なんだろうねえ、あんたがそこまで必死に探してる相手ってえのは」

「…お前が詮索好きとは聞いてないぞ」

冷めた紅珠の口調に、秦は全く堪えていなかった。だらしなく組ん

でいた足を解いて座り直しながらも視線は紅珠から外さない。

「いやあ、何しろこんだけ絶世の美女がこんな必死に人探ししてんだってんだからなあ。好奇心もわこうつてもんじゃねえか」

「口が軽いとも聞いてないぞ」

紅珠の返答は冷静を通り越して冷厳であつた。

「一体、何があんたみたいな女にそこまでさせてんだろっねえ」  
「……」

もはや返答する気もない紅珠は、相変わらずニヤニヤ笑いを続ける秦の視線を軽く無視することにした。

しかし正直なところ、紅珠にも、自分自身のことがよく分からなかった。

（何ガアンタミタイナ女ヲ　　？）

何故自分は見たことも会ったこともない人物を、初めての土地で探しているのだろうか。

そもそも<エツク>という人物のことを紅珠が知ったのは、つい先日のことである。

久しぶりに紅珠は育ての親である男に会いに行っていた。その男は彼女を7歳の頃から親代わりに育ててくれた人物であり、また彼女の剣の師でもあつた。つまり彼女にとっては親代わりであり、師匠でもあつて、紅珠が全幅の信頼を寄せる存在なのであつた。

また、彼は紅珠にとって非常に信頼に値する人物であるが、客観的に評価しても知勇に優れていて、他者の尊敬を集める人格者で、指導者としての器を備えていた。

そんな彼の元へ、彼女は傭兵として独り立ちしてからもしばしば戻り、相談をしたりアドバイスを受けていたりしていたのである。そして彼のアドバイスで的外れなことも、彼女のためにならないことも、今までに一度としてなかったのである。

そんな彼が、今回戻ってきた紅珠に＜エック＞という人物のことを告げた。

紅珠の話を聴き終わった彼は、珍しい表情でふっと笑ってみせた。そしていぶかしむ彼女に、吐蕃の首都大都へ行き、＜エック＞という人物に協力を求めろ、と教えたのである。

「お前のやろうとしていることは相当に大変なものだ。だがお前ならできないことはない。俺は信じているよ」

いつも彼は紅珠に対して優しく、かつ厳しかったが、その時の彼はかつて見たことのない表情で笑っていた。温かいような、優しいような、そして寂しいような。

その表情の意味することは彼女にはよく分からなかったが、彼の言葉はいつものように彼女に勇気を与えた。そして紅珠にはそれを成し遂げることができるといふ彼の信用にも応えたい、と思った。

しかしだからといって紅珠は、彼女の「計画」が成功するのか、正直なところ何も分からなかった。そもそも、その目的のために、どんなことをすればよいのか、どんな結果を得ればいいのか、はつきりとしたヴィジョンはまだなかった。ただ知りたいことがあり、どうにかしたいことがあり、その根源は恐らく「吐蕃王国」に、ひいては皇の近辺にあるだろう。それだけしかまだ分からないのである。

彼女がこんなにも無計画に動くことは極めて珍しいことであった。そしてこんなにも必至になることは。紅珠はそんな自分自身のことを客観的に把握しながらも、今現在自分を突き動かしているこの衝動が何なのか、理解してはいなかった。

「まあいい、引き続き情報を集めてくれ。また来る」  
そう言って紅珠は踵を返した。

「ああ、あんたになら多分見つかるさ」

天幕を出ようとしたところで秦が彼女の背中に声をかける。その台詞に紅珠は思わず立ち止まって振り返った。

肩越しに見た秦は、先ほどと全く同じ姿勢で、やはりニヤニヤと彼女を見詰めていた。

「…あんたみてえな光り輝く美女に想われてんだ、どんなに闇の底に潜り込んでるような奴だって一目会ってみてえって思うだろうぜ」思わず吹き出さなかった自分を、紅珠は自分自身で褒めていた。

秦の言葉は、そのむさくるしい風貌に全く似合わないほど、気障なものであった。

（それにしても無様なことだ…）

いつまでも立ち尽くしていてもしょうがない、と地下水路を歩きながら、紅珠は思った。

紅珠が落ちた地下水路は地上から3メートルほどもあった。地上への壁は垂直に近かったが、彼女の運動神経をもつてすれば、登るのは不可能ではなかった。しかし彼女は地上に出ず、地下に行くことを選んだ。

理由はいくつもある。

貧民窟は大都の町中に点在している。その中には町の北側、つまり行政区や貴族たちの居住区、そして皇の住居であるエン円城のある場所にも密かに存在している。紅珠は今日はそこを目指していた。しかしそこへ行くには地上を行くと目立ちすぎてしまう。そのため彼女は水路に下りて北へ向かっていたのである。しかし目立たないようにするのなら、地下に潜ってしまうのが一番良い方法である。そこで地下に落とされたのを幸い、そのまま北上することに決めたのである。

もう一つの理由は、彼女が地下に落ちた理由にある。

秦の元を辞した紅珠は、そのまま水路に下りて歩き始めた。

しばらくは何の問題も起こらなかった。地上の商業区の喧騒が頭上から響いてくる。一方、水路にはほとんど人影も見当たらなかった。吐蕃の都市計画では、ここにはそのうち遊覧船が通ることとなるらしい。また岸には磨き上げられた石畳が敷かれ、四季折々の花を咲かす草木が植えられる計画だという。

しかしまだその工事には手がつけられていなかった。ただ水路はしっかりと造られていて、緻密に組まれた石組みは、むしろ美しくさえあった。ただ、付近には工事資材があちらこちらに放置されていて、雑然としていた。ときどきその影に見える人影は、浮浪者が親や役人の目を盗んで遊んでいる子供たちであつた。

そういつた雑然とした風景も、商業区から行政区に入る辺りから姿を潜める。そして喧騒も間遠になる。

そういつた中で、ふと彼女はあるものに気が付いた。数m毎に、水路の壁に格子の嵌った口がある。

（ああ、これが水量調節のための水の逃げ口か…）

吐蕃皇国は現在、世界一番の技術国である。土木に関してもそうで、地下上下水道設備が現在世界唯一のものであることは、前述の通りである。それは現在彼女が踏んでいる石組みにも現れている。数ミリの隙間もないほど緻密に石を組む技術は、それがあってこそ地下に水を通すこともでき、ひいては国土全体に運河を張り巡らせることもできるのである。

紅珠はこれまで傭兵として働くうちに、いくつかの国や都市に行ったことがある。しかしここ吐蕃の大都ほどに圧倒的な技術力によって造られた都市は見たことがなかった。素直に感心しながら格子の隙間を覗いたとき、彼女はふと背後に異質な空気を感じた。

反射的に振り返った紅珠の頬を、何かがかすった。背後の石壁にぴしりと何かが当たった音がする。しかし彼女にはそれが何なのか見ることができなかった。



（ちっ……………）

攻撃を受けるまで注意を疎かにしていた自分自身に舌打ちしながら、彼女は懷に手をやった。そこに潜ませている短刀を探りながら、攻撃がきたと思われる方向を睨む。しかしそこには何もいなかった。（えっ！？）

目を疑いながら、しかし彼女は次の瞬間、身を伏せた。先ほどまで彼女の身体があった付近の石壁にぴしり、と何かが当たる音がする。

（何もない、のではない。何かがいる。見えないだけだ！）

判断した紅珠は周辺に意識を張り巡らせた。見えない蜘蛛の巣を自分を中心に張るようなイメージ。そしてそれが紅珠の視界に姿を現した。

「えっ……………！」

しかし見えたものに、思わず紅珠は絶句する。それは人の姿をしてはいなかったからである。

（姿隠しではなく化け物！？）

その一瞬が隙となった。強烈な圧力が正面からぶつかってくる。

「きゃ……………！」

とつさに左腕を伸ばして石壁に身体を支える。そうやって勢いを殺したものの圧力には抗しきれず、背中が格子に打ち付けられる。

痛い、と思った瞬間、ふっと背中中の感触が消えた。

（え！？）

ふらり、と重心が後ろに寄る。何故か、そこについて先ほどまであった格子が消えていた。慌てて両腕を伸ばして石壁に突き、力を込めて身体を支えようとする。一瞬体勢を持ち直すが、その面前に半透明に見える化け物が迫ってくるのが見える。

その姿は人間に近いものではあったが、体長は成人の三分の二ほどしかない。その三分の二ほどが頭部で、縦に異様に大きく膨張していて、口は耳元まで裂けている。顔の中心に二つ大きく開いた眼窩は、虚ろに暗かった。小さく細い身体から生えた四肢は昆虫めい

てカチカチと音を立てながら蠢いていた。

嫌悪感を感じさせるその姿がゆっくりと、確実に近づいてくる。それと共に紅珠の体を押す圧力も強まってくる。石壁に張り付く手指がぎし、と体内で音を立てる。

紅珠はとつさに判断した。そして腕の力を抜いて引く。

ぐん、と圧力がかかり、支えを無くした身体が後ろに押される。体反射で踏ん張った足が、平らな石のおもて面を滑り、革のブーツの底がきゅきゅ、と擦れて音を立てる。

ブーツの踵が地面を失う。瞬間、紅珠の体を浮遊感が包んだ。

落ちている間のことはあまり記憶がない。ただ頭から、あるいは背中から地面に叩きつけられないよう、できる限り体勢を安定させていた。おかげでひどいけがはしなかった。

そしてなぜ地上に戻らなかったのかといえば、地上に先ほどの化け物がまだいる可能性を考えたからである。化け物は地下までは追って来なかった。それはそれで奇妙なことだが、追って来ない確証も待ち伏せしていない確証もなかった。ならば前進したほうがましであろうと紅珠は判断したのである。

（それにしてもアレは何だったのだろうか…）

地下水路の暗闇を、携帯用の灯りを頼りに進みつつ、紅珠は考えていた。

「アレ」とは彼女を水路で襲ったもののことである。

姿の見えない敵にはいくつかの場合がある。最も多いのが彼女が最初に考えた、『姿隠しの術』を使った人間の場合である。この能力を持った人間は多くはないが、術具はいくつか存在していて、入手はさほど困難ではない。

他には遠距離の攻撃。術の威力は、範囲もそれぞれで、中には姿の見えないほど遠くから攻撃することが可能な術者もいる。また、武器を隠す術や、見えない武器を作る術もある。

その他に考えられるのは見えない生き物を行使するというもの。

例えば姿を隠す能力を持った化け物を操ったり、見えない生物や化け物を術力で作り、敵を攻撃したりする場合である。そして先ほど紅珠を襲ったのは、こういった見えない化け物であった。しかしそう考えると奇妙な点がある。それは、これらの化け物に関わる術のほとんどはきんじゅつ禁術、つまりげほう外法であり、吐蕃に限らず全世界で禁止され、厳しく規制されているという事実である。

（また、外法が関わっているのか？）

しかしそんな馬鹿な、と紅珠は思う。

何故ならここは吐蕃の首都である大都。大陸中最も強大な勢力を誇り、絶大な権力を有する吐蕃皇国の、その支配者である皇の、正に足下なのである。例えそういった術を使う外法士がいたとしても、どうやってこんなところに潜り込むことができるのか。まず不可能である。

（それに、さすがに外法ならばあそこまで気配を感じ取れないわけがない）

紅珠は自分の感覚に絶大な自信を持っていた。それがあってこそ、年若い女の身で今まで傭兵稼業を続けることができたのである。その感覚が鈍ったのでは、彼女はこれから先生き延びてゆくこともできない。

そう考えると、結局疑問は振り出しに戻ってしまうのである。

「アレ」は、何だったんだろう…」

考えつつ進んでいた紅珠は、何個目かの水路の分岐点に来た。そこで足を止めて頭上を見上げる。見上げたところで見えるのはただ石の組まれた地下の天井でしかなかったのだが、彼女の意識はそこを通り抜けて地上を思っていた。

「多分、そろそろ円城の近くまで来たと思うんだが…」

独り言を呟きながら今までの道のりを考える。

この地下水路はきつちり南北に敷かれているようで、今までの分岐点は全て直角に交わっていた。だから地上の様子の見えない地下にあっても、紅珠の方向感覚は狂うことはなかった。

その感覚によれば、この分岐点は貴族の居住区の北端、円城の敷地に近いはずであった。そして分岐した地下水路は多少の段差があつて北に向かっている。

彼女が迷っていたのはこの辺りで地上へ出るか、それとも更に地下を進むか、ということである。

そろそろ円城の辺りなら、円城の城壁を囲む堀があるはずであり、それならば先ほど彼女が落ちた穴のように水の逃げ口や、あるいは整備の人間の使う入り口があるはずである。

しかし結局、紅珠はそのまま地下に行くことに決めた。

（どうせなら大都の北端まで行ってみよう）

大都の北は大河、明江に接している。そこから水を引いている道があるはずである。

（そこから外へ出られないようなら、またその時考えればいい）

そう判断して、紅珠は北への道に踏み込んだ。

一瞬、何か透明のものが体を通り過ぎたような気がした。

はっと気が付いたときには、辺りは暗闇であつた。手にした灯りも、何故か消えている。携帯用の灯りは風の強い砂漠の旅でも容易には火が消えないような仕組のものである。第一、地下水路で強風が吹くはずもない。当然水を被ったわけでもないし、水を被っても簡単には火が消えないような仕組になっている。

（空気が薄いわけでもない）

紅珠は慎重に自分の体と、その周囲に意識を払った。微かな自分の呼吸音が聞こえるほどの静寂と闇。息苦しくはなかった。妙な匂いもない。ただ、自分の周囲前後左右上下、全て暗闇で、何一つ見

えなかった。足下には確かに地面を踏む感触があったが、こう真つ暗闇では、その感触さえ信じられなくなりそうである。

（やられた…）

紅珠は今日何度目かの舌打ちをした。どうやら誰かの張った結界の中に入り込んでしまったようであった。それにしても見事な結界である。彼女に全く気配を感じさせなかったのだから。しかも、今度は充分注意をしていたのに、である。

（先ほどの攻撃といいこの結界といい…相当な使い手のようだな）

紅珠には先ほどの化け物による攻撃とこの結界とが無関係であるとは、全く思えなかった。しかしそれはそれで構わない、と考えた。罾なら罾で、打ち破ればいいだけのことである。

紅珠は腰に差した刀に手を置きつつ、慎重に歩き始めた。

「あなたは、誰？」

不意に声が響いた。続けざまに同じ声が響く。

「あなたは、誰？」

「あなたは、何者？」

「あなたは誰」

「あなたは」

「あなたは」

「うるさい！」

紅珠は思わず怒鳴っていた。そして気が付く。声は耳に聞こえたのではなかった。脳内に直接響いてくるのである。

「訊いているんだよ」

「あなたは誰？」

「何者？」

しかし声は続く。紅珠はぐつと唇を噛み締めた。声を無視して、進もうとする。しかし声は続く。

「あなたの、名は？」

「あなたの」

「あなたの」

「私の名が、そんなに重要か！？」

思わず怒鳴ると、一瞬の間があって笑い声のようなものが響いた。

「当たり前じゃないか」

「あなたは、ここへ踏み入ってきた」

「あなたは、何らかの目的があつて来たんだ」

「あなたは、何者であるか、名乗らねばならないよ」

「あなたは、誰？」

「あなたは、何者？」

脳内でわんわんと反射する声に、紅珠は眉をしかめて頭を押さえた。しかし当然、そんなもので音を遮断することはできない。

「あなたは、誰？」

「……紅珠、だ」

「あなたは、誰？」

「あなたは、何者？」

「……紅珠だ、と名乗ったろう！」

紅珠の怒鳴る声が、水路にわんわんと響く。しかし紅珠の中に響

く声には全くの動揺がなかった。

「あなたは、名乗った」

「でも、それは」

「あなたが」

「誰、であるか」

「では」

「ないね」

「うるさい！」

紅珠は大きく頭を振って怒鳴った。

「私は私だ！それ以外の何者でもない！それ以上何を望む！」

ぎり、と宙を睨む紅珠の表情は、常にないほど厳しかった。それだけで大抵の者は怯んでしまったであろう。しかし今の状況で、果たして相手にこの表情が見えているのか、はなはだ疑問であった。

「そうだね」

「あなたは、あなただ」

「でも」

「逃げられないものだって、あるはずだ」

「あなたは」

「何者だ？」

「…もう、答えた。それ以上は、ない。」

紅珠は呼吸を整えた。相手の狙いが彼女の心を揺さぶることであることは分かっていた。第一、周囲を暗闇にして視界を奪ったことだって、そうである。

相手の手の内は見たい。しかし乗せられていては見えるものも見えなくなる。

「私は、紅珠だ。人を探してここまで来た」

静かに息を吐きながら、紅珠は続けた。

「誰も姿を見たことがないとも言われている、『隠者』。お前がそうなのか？」

紅珠は賭けに出てみた。相当確率が低いと思ったが、受身でいてはどっちみちどうしようもないと思ったのである。

「あなたは、聡明な人だね」

「勇気もある」

「でも賢くはないね」

どう判断すればいいだろう。紅珠は反応に迷った。

「まだ、あなたが見えない」

声は響き続ける。

「あなたの望みも」

「あなたの本当にやりたいことも」

「私に、何ができるのかも」

「……………!!」

不意に闇が消えた。

今まで何事もなかったかのように、地下水路の光景がそこにあった。そして紅珠の目の前には、梯子段があつて、頭上の白い光に続いていた。手元に目をやると、灯りはきちんと点いていた。

「……………」

無言のまま、紅珠は梯子段を登った。登り付いた先はやはり水路であつた。

先ほど地下に下りたときとほとんど変わりのない風景。もちろん場所の違いが、周囲に人の気配はなかった。そして近くで大きな水の



流れる音が聞こえていた。水路の先に目をやると、突き当たりに地上よりも更に１メートル程高く石の壁が組まれていて、そこに扇形の格子が見えた。どうやらその先は明江であるらしい。

「……やられたっ！」

がんっ！と紅珠の拳が石壁に叩きつけられた。

どうやら結果から締め出されたらしい。それとも結界の主が逃げたのか。判断はできなかったが、今日はもっつかまらないだろうと紅珠は思った。

（とりあえず場所は分かった…それだけでもいいか）

無然としたまま、紅珠は何かそう自分に言い聞かせることができた。ただの勘でしかなかったが、結界の主はこれつきり姿を見せないつもりではない、と紅珠は思っていた。

「明日また、仕切り直しだな…」

紅珠は大きく息を吐いた。そして気を取り直して視線を上げた。とりあえず戻らなければならない。その視界を、奇妙なものが横切った。

（…！？使役獣！？）

一見、普通の犬のようにも見えたが、それならばこの水路の場所から見えるはずがない。もつと大きくて、しかもその足は宙を駆けていた。その先に目をやって、彼女は反射的にその後を追いかけて走り出していた。

ふわふわと揺れる長い髪の毛。その大きさから見て、間違いなく少女であると紅珠は思った。

（何であれ少女が追われているには違いなし…！）

数メートル先は行き止まりになっている。恐らく地上もそうなっているはずである。

紅珠が本気を出して走ると、相当速い。しばらく走ったところで獣に並んだ。更にスピードを上げると、水路の壁に向かって跳んだ。壁で右、左と二回跳躍。その勢いで地上まで跳び出すと、右手を

軸にそのままの勢いで身体を回転させた。

鈍く重い音がして、紅珠の革のブーツに包まれた脚が、狙い済ましたように獣を吹っ飛ばした。吹っ飛ばされた獣は城壁に叩きつけられ、鈍く籠った悲鳴を上げてくずおれる。

紅珠は獣を蹴り飛ばしてもまだ勢いを殺しきれず、そのままごろごろと道を滑って、二回転ほどしたところで止まって立ち上がった。そして城壁の下にうずくまっている獣がぴくりとも動かないのを確認して、振り返った。

道の突き当りの城壁に縋り付いていた少女が、呆然とした表情でこちらを見ていた。淡い茶褐色の髪を後ろで束ね、やや大きめの男物のような服を身に纏った、小柄な少女であった。大きく見開いた董色の瞳がとても印象的であった。

「大丈夫か？怪我は？」

紅珠が優しく声をかけると、びくりと少女は背筋を伸ばした。そして直立不動のような姿勢から、へなへなとその場に座り込んでしまった。

「あ、おい、大丈夫か？」

慌てて紅珠が駆け寄った。近付いて顔を覗き込むと、やや青褪めではいたが、その視線は気丈なままで、紅珠を見返した。

「大丈夫…です。ちょっと……びっくりした、だけ」

少女の気丈さに、紅珠は思わず口元を緩めていた。

「私の名は紅珠。とりあえず場所を移したほうがいい…歩けるか？」

紅珠の差し出した手を取りながら、少女がまだ微かに震えながら、頷いた。

「ありがとう。…助けってくれて。私は、ミンセイ明青」

#### 4・砂漠の舞姫2

同じ手を二度くつてはならない。それは傭兵としての心得である。失敗は即、死にも繋がる世界なのである。

そう考えると私は既に二回は死んでるってことだな。紅珠は舌打コウシュちすると、腰の物入れから携帯ランプと火打ち石を取り出した。

あの日。何が何だか分からないうちに地下水路に落とされ、闇の結界に捕らわれ、そしていつの間にか追い出されていた日。

あの日以来、紅珠は地下水路の、その周辺を重点的に調べていた。あの結界の術が、どの程度の効力範囲を持つのか分からなかったが、素直に考えれば、あの結界の張られていた周辺に術者はいるはずである。

してやられた前回は反省していて、彼女はあることに気が付いた。闇に落とされたとき、確かに手にしていたはずの灯りは、手の中にはなかったのである。そして闇が晴れたとき、手には元通り灯りが握られていた。つまり、闇に落とされたとき、彼女の視覚も、もしかしたら感覚全てが幻術に捕らわれていたのである。

それを反省して今回は前回以上に手を打ってここまで来ていた。それにも拘らず、今また彼女は闇の結界に捕らわれている。彼女にとっては、不本意以外の何ものでもなかった。

一人は確実に震え上がらせそうな仏頂面で、紅珠は灯りを点けようとした。しかし何度やっても火は点かなかった。紅珠は眉を顰めた。火打石もランプも、今朝、持って出る前に確認している。地下を歩むうちに湿ったわけでもない。やはり術の効力で、灯りを点けることはできなくなっているようだ。

「導きの光は待っていたって現れないよ」

突然脳裏に声が響く。知らずめまいを覚え、紅珠は二、三步足を踏みしめた。頭の中に響く声は確かに気持ち悪かったが、二度目なので動揺も酷くはなかった。

「灯りくらい点けさせろ」

『隠者』が再び現れたのだ、そう確信した紅珠が闇に向かって怒鳴る。彼女の周囲は前回と同様、上下左右全く何も見えない暗闇である。二度目とはいえ、足の下に踏みしめるべき地面が見えない状況というのは、気持ち悪い以外の何物でもなかった。

「何？何か問題ある？」

むしろ楽しんでいるような口調に、紅珠はむかむかする。

不愉快でもあるし、実際に脳内でわんわんとこだまする声は脳内を掻き乱して内臓が揺さぶられるような感覚で、胸が気持ち悪かった。

この声の主がどんな奴であれ、性格が悪いということだけは絶対に疑いようがない、と彼女は確信していた。

「当たり前だろう」

むかむかする感覚を撥ね退けて、紅珠が怒鳴る。返る声は相変わらず楽しんでいるようであった。

「そもそもここは真っ暗じゃないか。何も見えはしないよ」

「灯りがないと落ち着かないだろう」

そう返すと、ふと周囲の空気が変わったような気がした。気持ち悪さをこらえて、紅珠は身構えた。

「何故落ち着かないか知っているかい？」

急に声が深くなった気がして、紅珠はぎゅ、と唇を噛み締めた。  
声は答えを待たず、続けられる。

「本当は見えているからだよ」

「最も厭なものが何か」

「最も己が恐ろしいと思っているものが」

「そして、あなたは、知っている」

「闇に潜んで、あなたを狙っているものが何か」

「やめろ！」

怒鳴り様、右腕を振り上げた。がん、と壁を殴った拳がびりびりと痛んだが、そんなことはどうでも良かった。もしかしたら血が流れているかもしれないが、それだってどうでも良かった。

「貴様が何を知っている！貴様が私の何を知っていると言うのだ！知った風な口をきくな！」

紅珠の声は元々アルトの、耳に心地よい美声であった。それはどんな汚い言葉を使っても、どんなに怒鳴っていても、変わりはない。なかった。

しかし今、彼女の声は、普段とは少し違っていた。いつもより更に美しく、艶めいて、威圧的なその口調は、思わず平伏してしまいそうな、威厳とでも呼ぶべきものすら、感じられた。

大多数の人間が怯んでしまうであろうその声に、しかし闇の中の声の主は全く動じた様子がなかった。

「知っているよ」

その声は、いっそ清々しいほどであった。

「知っているよ」

「あなたが、何者か」

「あなたが、どんな人か」

「あなたが、どうしてここまで来たか」

「あなたが、今までどうしてここまでできたのか」

「みんな、知っているよ」

「私は、何でも分かるんだよ」

(……!!)

頭の中のその声に、紅珠ははっとした。

一瞬の内に頭が冷める。冷めたことで、自分が今まで相当熱くなっていたことを悟る。

声の主に、熱くさせられていたということが、分かる。

(『賢者』……)

その者なら、お前の力になるだろう。何故なら、彼は全てのことを見通す、『賢者』と呼ばれた者だから。もつとも、普段は全く他人と関わりを持たないから、『隠者』と呼ばれるのが普通だがね。

紅珠の養父でもある師匠は、そのときそう、＜エック＞のことを彼女に説明した。

(私のこと、が、分かる、と?)

紅珠の心の中の声に呼応するように、声が聞こえる。

「私は、あなたを知っているよ、『お姫様』」

「……」

擲揄する響きさえ含まない、その声に、つい先ほどまでなら反発して怒鳴っていたであろう紅珠が、じっと目を据えて闇を見詰めた。

「……………お前は、私を『お姫様』と呼ぶのか？」

ややあつて発せられた紅珠の言葉に、おかしそうな声が返る。

「だって、あなたは『姫様』でしょう？」

「…違う」

紅珠は軽く頭を振った。

「私は、紅珠だ。私は『姫』ではない」

決然とした声であつたが、怒りは含まれてはいなかった。その表情は、ただ静かに、ただ否定していた。

「あなたは、聡明なお姫様だね」

くすくすと笑うような波動に、紅珠が顔を顰める。  
脳内がくすぐられるように、気持ち悪い。

「お姫様に教えてあげよう」

「待っていたって、光は導いてくれないんだよ」

「手に生み出した光は足下を照らしてはくれないんだよ」

「光は」

「あなた自身が照らさねば」

「道は」

「見えないんだよ」

はつと気が付くと、紅珠の周囲の闇は晴れていた。そして目の前には水路の壁に設けられた梯子段があった。

「…また逃げられたか…」

ため息を吐いた紅珠は、手の中で結局使われることなく握られたままだった灯りの道具を元通りしまうと、梯子段に手をかけた。

『ティエンラン』

『天藍』の天幕に戻った紅珠を、団員が呼び止めた。

「あんたに客人だぜ」

「客？」

この大都で、わざわざ白昼会いに来るような知人に心当たりはないのだが、と不思議に思いながら、彼の示す先に目をやった紅珠は軽く目を瞠った。天幕の陰に華奢な少女が佇んでいた。少女が紅珠に気が付いて、表情を変えた。やや頬を染めながらぺこりと頭を下げるその姿には、確かに見覚えがあった。

「ああ、なんだ、あなた…明青？<sup>ミンセイ</sup>」

紅珠の言葉に、少女は近づきながら頷いた。

明青は先日、紅珠が助けた少女である。

例の地下水路に落とされてさまよったあの日、地下から出た紅珠は、獣に襲われている少女を助けた。それが明青であった。

その日は明青を落ち着かせると、彼女が泊まっているという宿舎へ送り届けてそのまま別れた。彼女に会うのはその日以来である。

「一人で来たのか？」

紅珠の問いに、明青が頷く。紅珠は少ばかり感心してしまった。

『天藍』は「砂漠の民」の移動芸能一座である。こういった職業の者は、大体的場合、一般よりも低い身分とみなされる。宮廷お抱えの立派な舞台に立つ芸能者が、立派な屋敷や高給を与えられるといった厚遇を受けているのに対して、移動芸能者は大体において賤民扱いされ、一箇所に長逗留することは好まれない。その芸は民衆



を喜ばせ、祭などの時には喜ばれ、時にはわざわざ招かれたりもするが、例えば何か事件が起こったりすれば、真っ先に疑われるのが彼らなのである。

今回だって、『天藍』は一ヶ月ほど大都に留まっているが、これは興行の評判が良すぎるという事情があり、更に今が春祭りの最中であり、ただでさえ芸能者がもてはやされる時期であるという事情が重なっているから、許されているのである。しかしそれでも移動芸能一座である『天藍』に許された興行場所は大都の最も南、移動職能者たちの集められたエリアなのであった。ここはどちらかと言うと、治安の悪い場所とみなされる。大都の城内であるだけ、まだましだとされているのである。

そんな場所であるから、よほど用がない限り、女一人で訪れたりすることは避けられるのである。

「あなたが『天藍』で働いていると言ってたから……」

明青がまっすぐに紅珠を見ながら言う。つまり私に会うためにわざわざ一人で来たのか、と更に紅珠は感心してしまった。今までにも「砂漠の舞姫」に会いに来た人間はいたが、それは下心ありありの助平共だけだったので、容赦なく追いついていたのである。

余談ではあるが、そうやって追いつかれた者の大半は、益々「砂漠の舞姫」の虜となって、昼に夜にと通い詰めているようである。とりあえず紅珠の身に危害が加えられるわけでもなく、更には『天藍』の売り上げに貢献しているわけだから、放置しているが、更にコアな者が出ないだろうか、というのが最近懸念されるところである。

それはともかく、明青のことである。何かあつたに違いないと紅珠は思った。

明青は皇立研究所の研究員となるための試験を受けるため、上京してきた娘である。

この試験は世界一難しく、かつ厳しいとされる。しかし合格して

研究員、あるいは官僚になることができれば、それは大変な名誉である。と同時に、生活の面では、衣食住の全てが完全に保証される。そして能力さえあれば、受験資格に制限はない。立身出世を志す者が、試験に合格するために人生を賭けるのも当然であろう。

受験者は試験までの約一ヶ月は専用の宿舎に入らなければならぬということになっている。ここは全室個室になっている。これは試験までの最後の追い上げをする受験者に配慮したもので、それ以外にも様々なものが備えられていた。もちろん滞在費用は免除である。

トッパンオウコク吐蕃皇国の東の田舎から出てきた明青ももちろんそこに入っている。紅珠が気にするのはそこで、当然受験者は試験当日まで宿舎で勉強を続けているのが普通である。それこそ生活の他の面を全て切り捨てている者の方が多いと聞く。そんな環境に居るはずの明青が、なぜこのような場所に、しかも一人で来ているのか。

「姫に会いに来たらしいよ」

天幕の陰から顔を覗かせた雑技師の男がにやにやと笑いながら言う。

「紅珠、あんたどこでこんなかわいい子をひっかけてきたんだよ。随分思いつめた顔で待ってたんだぜ、この子」

いつの間にか大勢の団員が彼女たちの周囲に集まっていた。彼らの好奇の視線にさらされて、明青が頬を紅潮させる。紅珠はといえば、皆の好奇心に呆れ顔である。

「あーあ、何で男だけじゃなくていい女までうちの舞姫さんは引っ掛けてくるんだろうなあ。一人でいいからこっちにも回してくれよ」  
「誤解を招く言い方はよせ……」

猛獣の世話係である大男につつかれて、紅珠がさすがにげんなりした声を出す。明青はといえば、頬を真っ赤にして、おろおろしている。

無理もない、と紅珠は思った。

紅珠は、自分は相当世慣れしてすれているという自覚がある。こ

ういった品の無い冗談を流せる余裕もある。しかし明青は普通の少女である。もちろん彼女は相当な美少女だから、今まで全くからかいの種になったことがないとも思えないが、こういった状況で、明らかに普通じゃないタイプの人間に囲まれて、注目を浴びるなどということは初めての経験であろう。

明青は確かに美少女である。体つきも華奢で、淡く長い髪の毛が肩の辺りでふわふわ揺れているところなど、同性である紅珠の目から見ても、相当可愛らしい。

そんな彼女が思いつめた表情でじっと人待ち顔に佇む姿は、それは絵になるであろう。ただしこの場合、思いつめたような表情は、慣れない移動芸能者の舞台裏にもぐりこんでしまったという緊張感であり、更には一度しか会ったことのない人を待っている緊張感であつたろう。また、彼女をここに来させる原因も、彼女の表情を訝えなくさせていた原因であろう。決してからかいのネタとなるような歪んだ妄想の登場人物にはしないでもらいたいと、その妄想の一方の登場人物にされてしまっている紅珠は思った。

「とりあえず、ここじゃ話もできないな……」

紅珠は言いながら明青に手を差し伸べた。

「待たせてしまって悪かったね。外へ出ようか。ここじゃ落ち着いて話もできない」

うなずく明青を連れてその場を離れる紅珠の背に、どよめきのような声がかけられる。

「……なんであのヒト、ああいう仕草が様になつちやうの？」

その様子を少し離れた天幕の影から眺めていた荔枝<sup>リージー</sup>が呆れ顔で呟く。

明青に向かって差し伸べた腕をさりげなくその背中に戻して導く姿は、まるで肩を抱いて歩くような姿になっていたのだ。

さりげない行動一つ一つが決まりすぎれば、からかうしかしょうがなくなるという事実を、荔枝は目の当たりにして納得してしまっ

たのである。

\*\*\*\*\*

亜麻色の髪の少女が一人、楽しげに踊っている。花摘みをして遊んでいるらしい。

そのとき、どこからともなく全身黒の者たちが現れ、波に巻き込んで流し去ってしまうように少女を連れ去ってしまう。

少女は振り返りながら両手を天に差し伸べ、悲鳴を上げる。

『かあさま、たすけて！』

しかしそれも空しく、少女の姿は舞台から消える。

母の許に娘の助けを求める声が届いたのは、娘が居なくなつて、既に大分経ってしまったからであつた。

母は驚き、嘆き悲しみつつ、娘の行方を捜して、方々を彷徨い続ける。

舞台上に、一条の光が射す。そこに照らされ現れたのは、薄汚れたみなり身形の一人の女。目深にベールを垂らし、トーガと呼ばれる異国の衣装を纏っていた。

背筋を曲げ、杖を突いて足を引きずるその姿は、哀れみと同情を見る者に催させる。

弦楽器の物悲しい音楽の中、ずるり、ずるり、と女は舞台中央に歩み出る。

『ああ、私はもうどれほどの地上を流離つたのだらう？』

立ち止まった女が、天を仰ぎながら慨嘆する。

『髪はこんなにも霜降り、背も腰も足も私のものではないように痛む』

女の手が、自らの身体を頭为天辺から足の先まで撫で擦る。手首から先現れた指は、ごつごつと節くれ立ったように強張り、うずくま蹲るように屈み込みながら、不器用にくるぶし踝を撫でた。

自分の爪先をじつと眺めていた女が、やがてのろのろと頭を上げる。その視線がぐると周囲に向けられる。その表情は疲れ汚れて強張っていた。既に何にも動じないほど絶望し切った表情であったが、その時その瞳に、更に新たな悲しみが表れる。

『 ああ、 ああ 』

悲鳴のような慟哭が女の喉から漏れる。

『この大地の荒れようはどうだ。この大地を凍えさせる白い氷。この大地を荒らす灰色の草木はどうだ。かつてこの大地を覆っていたあの緑はどうしたのだ。この大地はいつからこんなにもごつごつした岩だらけになってしまったのだ。こんなにもひび割れて干からびてしまったのだ』

舞台中央で嘆く女の傍に、音もなく一人の少女が現れていた。

客席から見ていた明青は、突然増えた光線が照らし出した少女を見て、驚いた。それほど女の一人芝居に意識が奪われていたのだ。

新たに現れた少女は、透けるように美しい、柔らかそうな薄物一重の衣装をまとっていた。頭上の小さな冠をはじめ、全身をきらきら輝く装飾品が飾り、薄汚れた最初の女と比べて、まるで正反対の軽やかで美しい姿をしていた。

『申し、どうなされました、お方様』

少女が蹲る女に優しく声をかける。その声は女と比べて少女らしい、甲高いものだった。

（ああ、この声は確か、荔枝さん……）

明青は昼間会った、踊り子の少女の姿を思い出して、頷いた。一方、声をかけられた女は、少女を継るように見上げる。

『おお、そなたは川の妖精か。そなたに尋ねたいことがある。私の娘がどこかへ連れ去られたのじゃ。私は娘を探してずっと旅を続けておる。そなた、もしや、私の娘を見かけなかったかえ？娘は川べりで遊んでおったのじゃ。花を摘み、小鳥たちと戯れ、いつものように遊んでおった。なのに、突然、娘の姿が消えたのじゃ。』

側におった者どもは、大地が裂け、そこから現れた一団が娘を攫って、再び大地に消えたと申しておる。だがそれ以外、一向に行方が知れぬのじゃ。私はこの大地の方々を探し回り、せめて娘の姿を見た者がいないかと訊いて回った。だが誰も見ておらぬという。

ある者は言った。もうむすめご娘御は生きておられぬのではないか。

ある者は言った。もう諦めてあなたは本来の場所へお戻りになられた方が良くはないか。

しかし、娘が姿を消したのは川べりなのじゃ。誰も見ておらぬなどあろうはずもない。ゆえに私は諦め切れぬのじゃ。

そなた、川の妖精よ。そなたはどうじゃ？何か見ておらぬか？何でも良い。知っておることがあれば私に教えて欲しい。』

しまいには泣き崩れるように、ただ訴える女の姿に、少女　川の妖精は胸を打たれたようだった。

蹲り、身体を震わせる女の傍らにひざまずき、その肩をそっと抱くようにした。

『お気の毒に、お気の毒に、お方様　』

女同様、涙を流しながら、川の妖精は女を抱き起こす。

『お気の毒に、お方様。大地の女神であらせられる貴女がこんなにもお心を痛めておられるなんて。こんなにも大地が荒れ果ててしまふほど、貴女がお心を苦しめられているなんて。私は何とかしてお力になって差し上げたい。分かりました。私の知っている限りのことをお話いたしましょう』

女が　川の妖精が「大地の女神」と呼んだ女が　ば、と顔を上げる。その勢いで頭を覆っていたベールが外れ、素顔が現れた。光の下に晒されたその表情に、客席の明青は思わず息を呑んだ。

（嘘…あれが、あの、紅珠…！？）

彼女はぼかん、と口を空けてただただ食い入るように視線を舞台上の光景に釘付けにする。

ベールの下から現れたのは、げっそりとやつれた女の顔。ただ、その美しく結い上げられた髪にたくさんの綺麗なかんざしがさっさつていたり、額や耳を美しい装飾品で飾っていたりする辺りに、向き合う「川の妖精」の少女同様、否、それ以上の高位の女性であることがうかがえる。

大地の女神は、強張った表情の中、ただその瞳だけをららんと輝かせて、目の前の川の妖精である少女に詰め寄る。

『教えて、そなたは何を知っておるのじゃ？私の娘を見たというの

か？」

（凄い…恐い……）

その剣幕に、明青は全身を撃たれたような衝撃を感じた。舞台に立つ、「大地の女神」が、昼間会話を交わした紅珠という女性であり、「川の妖精」が、やはり昼間会った荔枝という少女であるということは分かっていたが、舞台に立つ二人は、まるで別人であった。

『申し訳ありません、申し訳ありません、私共をどうかお怒りにならないでください。どうか私共を責めないでください。私共も心苦しかったのでございます。ですが私共に何ができましょう。口外するなとあの方に言われて、口を噤む以外、私共に一体何ができたでしょう。』

ですが、私にはもう我慢できません。貴女のそんなお姿を見て、そんなおいたわ劳しい姿を見て、貴女をこれ以上苦しめるようなことはできません。私の知っていることを、目撃したことを、貴女にお話いたします。ですが、どうか、お約束ください。決して、あの御方をお恨みなさらないでくださいまし

『

泣きじやくりながら川の妖精の少女が語ったのは、大地の女神の娘を攫ったのは、地下深い宮殿に住む、死の神たるおんかた御方であるということ。死の神はずっと以前から大地の女神の娘に懸想していた。その心を知った、娘の父親である天の神が、彼に娘を与えたというのである。

死の神は娘を乗せた馬車で、地上と地下を何度か行ったり来たりしながら自らの住居である地下の宮殿に向かった。その道すがら出会った川や草木の妖精、または地上の動物、空を舞う鳥たちにすら口止めをしていった。口止めをされた者たちは、死の神と、そして天の神を恐れて、口を噤んでしまったというのである。



『何ということ...』

どうか怒らないで、と何度も言い残しながら川に消えた妖精の姿を見送りながら、大地の女神は呆然と呟いた。その姿はやはり薄汚れていたが、表情は一変していた。

自分を騙した天の神、死の神、そして地上の全てを彼女は憎んだ。彼女の憎しみは瞬く間に地上に広まり、大地は凍え、死の沈黙が広まった。大地の豊饒を司る彼女が大地を呪ったために、生命の営みが停止してしまったのである。

舞台中を、大地の女神が狂ったように舞い踊る。女神以外に踊るのは、大地を駆ける動物や草木、そして川や風たちである。彼らは女神を宥めようとし、また呪われて止まっていく生命の営みの一つ一つに深く悲しみ、そして動きを止めてゆく。

女神は狂い、舞い踊る。身体を厚く覆っていた長衣は一枚一枚、剥ぎ取られ、ベールは引き裂かれた。

そのしなやかな腕が、髪を留めるかんざしを掴み、引き抜いた。ばさりと、髪の方が垂れ、その表情とあいま相俟って鬼気迫る様相を呈した。

弦楽器や笛の演奏は彼女の動きに合わせるように盛り上がり、哀切な、激しい音を響かせる。そしてそれらに合わせるように、客席のボルテージも上がっていく。

客席にいた明青は、四方からこずかれ、どぎまぎしながら、それでも舞台から視線を離せなかった。

彼女はこのような舞台を、生まれて初めて見た。それ以前に、一人で見世物小屋に来たことすら初めてであったのだ。周囲の、彼女から見れば異常なほど興奮している観客たちに、正直怯えていた。しかし、そんな彼らの興奮が分からないわけではなかった。

紅珠の踊りは心を惹きつける。その声はどんな音や声にも紛れず、するりと耳に滑り込んでくる。狂女を演じていても、それが確かに

鬼気迫るものであっても、その姿は目を、耳を、心を、全身の感覚を惹き付ける。心を掴まれて放せない。

「これが、『砂漠の舞姫』……」

視線を舞台に釘付けにしたまま、呆然と明青の唇から言葉が漏れる。

舞台上では、動きを止めた踊り手たちが、まるでたくさんの彫像のように立ち並んでいた。その中央で、大地の女神は緩やかに舞っていた。

かんざしは全て落とされ、乱れた長い髪の毛が、しかし美しく、顔から肩へ、そして腕や胸に絡まって腰へと流れ落ちていた。その身にまとうのは薄物一枚で、肌の色すら透けて見えそうなその姿に男たちは興奮しているように、明青は思った。しかしその姿は、同性の目から見ても、厭らしいというよりもむしろ美しく、つい見惚れてしまっていた。そんな姿で、しかし額の飾りは外されないまま燈火に煌めいていた。

大地の女神の嘆きと怒りと呪いに、大地の全ての生命は活動を停めてしまった。それに困ったのは、天の神と死の神である。天の神は大地の女神と死の神の間を取り持って、和解させた。大地の娘は、年の半分は地上の母の許で、もう半分は地下の夫の許で暮らすことに決まり、女神は澁々ながらも呪いを解いた。

舞台の燈火が一旦、全て消された。ややあつて再び明るくなった舞台上に、一人の女が佇んでいた。舞台の中央で、緩やかな長衣を優雅にまとい、頭には透けるベールを被り背に長い髪を流したその立ち姿は、先ほどまで狂い踊っていたはずの、大地の女神の姿であった。

（衣装…変えた？ううん、あれはさっきの衣装だわ。ただ、着方が

違うんだ。お化粧も…変わってる、はずない。そんな時間なかった。ただ、表情が違っただけなんだ…！！）

明青はぞくりと背筋が震えた気がした。

舞台に新たに一条の光が射す。その光に一人の少女の姿が浮かび上がる。大地の女神と瓜二つの衣装。しかし上に纏う外套は大地の女神の純白に対するように真っ黒であった。

『ああ、愛しい娘、私の娘……！！』

『おかあさま！！』

二人が弾かれたように駆け出す。そしてしっかりと抱き合った。舞台を照らす灯りが全て燈された。それと同時に舞台の四周から一斉に踊り手たちが飛び出した。彼らは女神の呪いで凍り付いていた者たちである。

花や木、動物や鳥、そして川の精や風の精。大地の全ての生き物たちが大地の女神とその娘の喜びに呼応して舞いを舞う。

喜びの舞いは客席をも巻き込んだ。舞台から客席に手が伸ばされ、何人かの観客が舞台に飛び込んだ。舞台に出られない者たちも、その場で喜びの歓声を上げ、身体を揺らす。

舞台上と同じ盛り上がりを見せる周囲の様子にやや戸惑いながら、明青はやはり舞台から視線を外すことができなかった。

演者が退がっても観客の興奮はなかなか収まることなく、『天藍』の天幕は、結局その夜、一晩中燈火を落とすことができなかった。

とうとう警備の役人がやってきて警告を受けてしまった。その際、一部では小競り合いさえ起こったという。

\*\*\*\*\*

観客と団員と吐蕃の役人とで混乱している『天藍』の天幕を、どうやってだかうまく抜け出した紅珠と荔枝と明青の三人は、広場の少し離れた場所からその様子を眺めやった。

「…凄いことになってるわね」

明青が伸び上がって、天幕の様子を眺めながら言う。

一方、その騒ぎの元凶ともいえる紅珠は、まるで他人事のように、側の大木に寄りかかってその様子を眺めていた。

「役人まで出てきてしまったのはまずかったな…」

ぽつりと呟く紅珠に、一体誰のせいなんだか、と荔枝は誰にも聞こえない声でばやく。

「でも、分かるわ。凄い舞台だったもの。みんな興奮するのも当然だわ」

明青が言って、紅珠と荔枝をかわるがわる見詰める。

「さすが、大都一の役者ね。私、劇とか踊りとか、そんなに見たことなんてないけど、分かるわ。あなたたちの舞台は本当に凄い。私、鳥肌立つちゃったもの」

その時の興奮を思い出したのか、やや頬を紅潮させながら、明青がにつこりと笑った。

「「砂漠の舞姫」なんて、大げさだなんて思ってたけど、全然大げさじゃないわね。あなたは「舞姫」の称号に相応しい人だわ。私、踊りを見て感動したのなんて初めてよ」

「…それは、ありがとう」

真正面から賛辞の言葉を浴びせられて、さすがに紅珠も照れたような表情を見せた。

「それにしても、不思議な舞台だったわ。聞いたこともないお話だったし。あれはあなた方の創作なの？」

明青の問いに、紅珠が微笑を浮かべながら、頭を振った。

「いや、あれは西の国の神話劇なんだ」

紅珠の言うところによれば、先ほどの話は、この吐蕃から遠く離れた西方、バルジャの一地方に伝わる神話の一説であるという。かの国では芸事が盛んで、大きな劇場では、神話を題材に採った話や、現実の事件を脚色した舞台が頻繁に行なわれており、市民は気軽にそれらを楽しんでいるという。

中でも今回紅珠が演じた舞台は、その国の神話で、冬と春の所以を語るもので、その国でも限られた者だけが春を迎える祝いに演じる、特別なものなのだという。

「私は今回、この『天藍』で、ずっと「春」をテーマに演目を選んでいるんだ」

「…ああ、そうか、今大都是春のお祭をやってるから…」

紅珠の言葉に明青は素直に頷いたが、荔枝は眉を寄せて首を傾げる。「…でも、あなたは何故そんなお話を知ってるの？あたしだってそんなお話、知らないわ」

荔枝は「砂漠の民」の踊り子である。

「砂漠の民」は出身地も様々だし、生活も、基本的に一つところに長く留まることなく、旅を続けながら生きている。だから「砂漠の民」は大陸中の多種多様な文化に触れ続けて生きており、「砂漠の民」の文化は、それらを貪欲に吸収し、取り込んだものとなっている。

荔枝も幼い頃からこの『天藍』のメンバーとして、大陸各地を旅して育ってきた。西の国にも行ったことがあるし、彼女だっていっつか、西国の歌や踊りを身に付けている。

しかし紅珠が『天藍』で演じるものは、荔枝が全く知らないものばかりであった。実は荔枝も、もしかしたら紅珠の演目は紅珠の創作なのではないかと、密かに思っていたりしたのである。しかし荔枝の視線に、キャリア年期が違ふと、紅珠は苦笑を返す。

「それにしても、まだ騒いでるね…」

明青が再び伸び上がり、天幕の様子を見る。紅珠も少し視線を上げてそちらを眺めやった。燈火は相変わらずそこだけきらしく、真つ黒な人影がたくさんうごめいているのが見えた。時折怒号とも歓声ともつかないものが聞こえてくる。それでも先ほどよりは大部分静かになったようだ、と紅珠は思った。

明青はそんな様子を眺めながら、公演中の様子を思い出していた。「みんな凄かったなあ…客席の人たち、みんな踊ったり大きな声出したり…」

「そういえば、恐くはなかったか？」

紅珠が少し表情を改めて明青に振り向く。

公演前にはあまり時間がなかったために、後でゆっくり話をしようということ、紅珠はとりあえず明青に舞台を見てもらうという手もあったが、公演中の戦場のような裏方ではかえって明青も気を遣うし、危険ですらある。そこで紅珠は、客席の中でも比較的安全な辺りに明青を招いて、そこで見てもらうことにしたのだった。

「大丈夫よ。ちよつと恐かったけど、でも私もちよつと興奮してたから…」

照れたように明青は微笑んだ。

「でもみんな、凄く大騒ぎだった。あなたたちの舞台は、いつもあんななの？」

それなら毎回大変だろうと思いつつ言った明青の問いに、荔枝が頭を振った。

「まあ、あたしたちの舞台はお客に楽しんでもらうためのものだから、けっこう大騒ぎしてもらったりするわ。でもあんなのは紅珠のだけよ。ちよつと異常なくらい」

荔枝の言葉に、紅珠が苦笑する。

「まあ、今日のは凄かったな…」

しかしそれにも多少訳があるのだと紅珠は言った。

「あれは元々、神話劇だったと言ったろう？」

紅珠が今夜演じたのは、西国の神話で春の所以を説明するものであった。元々の劇では彼女が演じたもののほど動きは激しくなく、楽器も使われず、合唱団の声のみで音楽や効果音が演じられるのだという。しかし演者は全て神殿に仕える巫女たちであり、神殿付きの合唱団である。彼らの演目は即ち神々の世界を映すものであり、彼らの演技は即ち神々の姿であり、声である。その舞台では、演者も観客も一種のトランス状態に陥ってしまうのだという。

紅珠はそれを、普通の演目にアレンジした。しかしどうやら元々の精神的な影響力は消し切れなかったようである。

そんな紅珠の説明を、荔枝はじっと聞いていた。聞く内に彼女の眉間に僅かに皺が寄る。

「…ねえ、紅珠。もしかしてそれって…」

荔枝の声の調子に、紅珠が不思議そうな視線を彼女に向ける。

「それって…《シャーマニク・ダンス》？」

荔枝の台詞に、紅珠も僅かに眉根を寄せる。その表情に肯定を見て、荔枝はふいつと顔を背けた。

「あたし、そろそろ戻るわ。おやすみ…」

突然の荔枝の態度に、明青はただ驚いてその背中を見送るだけであつた。

「…どうしたの？彼女」

明青の問いに、紅珠は荔枝の後姿に向けていた視線を、和らげて振り向いた。

「大丈夫だ。ただ、彼女はプライドの高い砂漠の踊り子だから…」  
紅珠の浮かべた苦笑は、どこか気遣わしげであつた。

（敵愾心を燃やすだけなら構わないのだが…）

既に闇に姿の紛れてしまった踊り子の少女のことを思つて、紅珠はふつと心に影が過ぎったような感覚を覚えていた。

## 5・祭前夜

紅珠<sup>コウジュ</sup>が持ち出してきた軽い夜食をつまみながら、紅珠と明青<sup>メイセイ</sup>の二人は長いこと話し込んでいた。

内容はといえば、明青がこれから受ける皇立呪術研究所のことや試験のこと、吐蕃<sup>トウバン</sup>、特に大都<sup>ダイト</sup>のこと、その他の地域のこと、各地で行なわれている春祭の話、王城の噂話などなど。くだらないことからけっこう面白いことまで、内容は広く浅く所々深くといった感じであつた。

紅珠と明青は会つて二回目であつたが、どうやら馬が合うようで、紅珠も久し振りに自分が、どうでもいいことで楽しんでいるのを感じていた。

特に、庶民ではなかなか聞くことのできない城内の噂を聞くことができたのは、彼女にとつて相当有意義であつた。何故大都に来て一月ほどの明青が城内の噂を知っているのかといえば、それは彼女が幹部候補生養成所である皇立呪術研究所に出入りして勉強しているからである。彼女は宿舎に用意されている資料のみでは満足できずに、実際研究所に勤務している研究員に積極的に話しに行つており、そんな彼女をかわいがってくれる研究員が、特別に、と研究所にも彼女を招いてくれたりしているのだという。

皇立呪術研究所は、皇直屬<sup>オウコウ</sup>の研究機関で、そこでの研究成果が軍事、政治、宗教といった、吐蕃の重要な職で活かされている。研究員は同時に軍人であつたり政治家であつたり、神職であつたりもするのである。当然の如く、城内の情報も耳に入ってくるというわけである。

中でも、紅珠が気になつたのは『皇公会議<sup>オウコウ</sup>』が行われるという情報であつた。

「『皇公会議』？……何故、こんな時期に？それもまた随分急に……」  
紅珠が眉を顰めるのを見て、明青が首を傾げる。



明青は『皇公会議』というものを、研究員から聞くまで知らなかった。それも無理のないことで、彼女の出身は吐蕃皇国の東海岸地域にある山東県<sup>シャントン</sup>である。「県」は吐蕃皇国において自治権を認められていない。当然『皇公会議』に出席したり関わったりする立場にはないのである。恐らくそんなことが行われているという事実すら、一般には知らされていないのだと紅珠は推測した。しかも彼女の両親はごく普通の労働者であり、政治のことなど全く分からない生活だったのである。

一方、紅珠は『皇公会議』のことも、前回の会議のことも知っていた。

『皇公会議』とは国の大事な採決事案を話し合って解決するため特別に開催される会議のことで、主要な出席者は皇と北・東・西の各公が、その代理人の計四人である。この会議は、半分は皇国の統治が順調にいつていることを国の内外に知らしめるための儀礼的な意味合いも含んでおり、特に重要な議題がなくとも、数年に一度は開催されるのが暗黙の了解となっていた。

しかし近年では、3年前に行なわれたばかりで、いかにも早すぎる。しかもこの会議は特に急な決定事項でもない限りは半年ほどの充分な準備期間を設けて開催されるのが常であり、決して、こんな二カ月程度前に開催が決定されるようなものではないのである。

前回の『皇公会議』は皇位交代のために行なわれた。老齡の前皇から今上皇に皇位が譲られた。三公による皇の信任と、皇による北・東・西公国の公、および皇国の各職への任命、叙任式、そして新皇の即位式のため、三公が当時の吐蕃皇国の首都であった「江州」<sup>コウシュウ</sup>に集ったのである。

そういったことは知っていた紅珠であったが、この夏に『皇公会議』が行われるという事実は、今が初耳であった。

「噂では皇妃様を決定するためだそうよ」

紅珠の疑問に、明青が答える。

「皇様が即位してからもう三年になるし、そろそろちゃんと皇妃様を決めないといけないだろうって、言われ続けてたらしいから、多分それじゃないかって」

（立皇妃…ねえ……）

それはそれでもつともらしい理由だと思いつつ、紅珠はそれでも納得し切れなかった。

「皇妃」とは皇の妃として最も位の高いものに与えられる称号である。皇には数多くの妃がおり、彼女たちは王城である「円城」内にある後宮で暮らしている。しかし何人妃がいようと、「皇妃」となることができるのはたった一人である。そして一度「皇妃」が決定されると、それはめったなことでは廃されるものではない。「皇妃」とは皇に次ぐ皇国の権力者であるからである。そして吐蕃皇宮内では唯一といってよい、女性の権力者でもあった。故に、その擁立も慎重に行なわれる。

今現在、「皇妃」に最も近い立場にいるのは、「皇妃」に次ぐ高位の称号である「王妃」の位にある東公トウコウの娘姫である。普通に考えるならば、王妃がそのまま皇妃に任命されるであろう。

「でも今、大都では火晶様カシヨウが人気あるからね…」

現在大都の、いや、吐蕃皇国民全体のアイドルである火晶姫は、皇の妃だが無位の姫である。出身は北方。詳しく言うなら西域諸族の一部族である昌氏シヨウの娘である。一部族とはいえ、昌氏は北の公国にも強い影響力を有する大諸侯である。しかし王妃の父親、すなわち沢東公タクトウとは、家柄も勢力も桁違いである。

にも関わらず、「皇妃」に火晶の名が挙がるのは、一般の民に馴染みのない東公の娘姫よりも圧倒的に火晶の方が民に人気があり、何より現在皇の寵愛を一身に受けているという事実があった。

「みんなは火晶様が皇妃様になればいいのに、って言ってるわ」

無邪気に笑いながら言う明青に、紅珠は苦笑する。

「しかし火晶妃は後ろ盾が弱いからな…それに東の姫君は、とても皇妃に相応しい器量をお持ちだと聞く。火晶妃が皇妃になるのは少し難しいだろうな……」

「…紅珠ってば、夢がない」

生真面目な表情で分析する紅珠を、明青は少し呆れたように笑った。

そんなたわいもないことを話しながら、二人は夜の大都を歩いていた。もう夜も遅いので、明青の宿舎へ送っていく途中なのである。どうやら紅珠が心配したような、「何か」が明青にあったわけではなく、ただなんでもない話ができる相手が欲しかっただけらしい。

「それにしてもあなたって不思議な人ね」

ふとしたように明青が言う。

「よく言われるよ」

紅珠がさらりと言って、笑った。しかし明青は笑わず、真面目な顔でじつと紅珠の顔を見詰める。

「……………」

あまりじつと見詰められすぎて居心地が悪くなったのか、紅珠が苦笑いしながら首を傾げる。しかし明青はめげずに何かを考えているようにじつと紅珠を見詰めている。

「ねえ、それ…」

明青が何かを言いかけたその時、紅珠が不意に明青を制した。そのまま何気ない視線で周囲を一瞥する。

「明青、あなたは術者だったね。戦ったことがある？」

歩く速度を変えないまま、ちらりと明青を振り返りながら紅珠が訊ねる。

「え？戦って…？」

確かに明青は術力を持っていたし、そのためにいじめられたりし

たこともあり、術を他人に使ったこともあった。しかしそれは喧嘩と呼べる程度のもものではあっても、戦ったことがあるかといわれれば、彼女は戸惑うしかなかった。

「構わない。自分の身を守ることができればそれでいい」

明青の思考を読んで、紅珠が言った。そして厳しい視線で振り返った。

「すぐその角を右に！」

視線は後方に向けたまま、紅珠が鋭く明青に指示する。明青は戸惑いながらも素直に従う。その道は馬車一台がやっと通れるくらいの幅で、両側には高い塀が続いていた。既に彼女たちは大都の行政区の辺りを歩いていた。深夜であるために、周囲には人気がなかった。

明青に続いて角を曲がった紅珠が、身構えながらすぐに振り向いた。謎の紅珠の行動に明青は戸惑っているだけであつたが、次の瞬間、闇の中に人影を見つけて、びくりと心臓が跳ね上がる。

「きゃあ！」

思わず悲鳴を上げる明青を背中にかばうように、紅珠が道の角から現れた男たちの前に立ちはだかる。

（１、２、３……５人？）

職業柄鍛えられた夜目で、暗がりにも身を隠している人影を数え、紅珠は内心首を傾げる。

「こ、紅珠……？」

上ずった明青の囁きに、紅珠は振り向かずには頷いてみせる。

「落ち着いて。私はあなたをちゃんと守る」

紅珠の揺ぎ無い言葉は、驚きと不安にときどきしていた明青を、少し落ち着かせた。

「明青。落ち着いて。後ろを見て。誰がいるか？」

「……いない」

（……）

明青の言葉に紅珠は僅かに眉を寄せる。その間にも人影は近づいて

くる。紅珠たちが自分たちに気が付いたことが分かったためか、もはや姿を隠す必要もないと思ったのか、そろそろと二人に近づいてくる。その無造作な動きに、紅珠は益々疑問が胸に湧き上がる。

（…何だ？こいつら）

「そうだ。おとなしくしている。怪我をしたくないならな」

逃げようとしないう二人を、怖がって足が竦んでいると誤解したのか、人影の一つから声がする。その嘲笑うような酷薄な声に、明青は表情を強張らせた。しかし紅珠は表情を変えず、更に疑問が胸に積もるのを感じる。

（私の敵…ではないな。明青？…それにしても）

「お前らは幸運だぞ。何といっても神のお役に立てるのだからな」  
しかし続いた台詞に、紅珠は本格的に首を傾げる。

「…明青、聞き覚えのある声か？」

「……そんなわけ、ないじゃない」

明青がむつとしたのが背中を向けていても紅珠には分かった。

「いくらあいつらが馬鹿でもこんな狂信者使うほど人生捨ててないはずよ」

明青が『あいつら』と呼ぶのは、彼女同様、受験のために宿舍に入っている者たちのことである。世界一厳しい試験の受験生同士は、どうやら協力するよりも足を引っ張り合う傾向にあるらしく、明青はそのターゲットにされてしまったらしい。先日、彼女を追いかけていた「使役獣」は、受験生の一人が彼女に差し向けたものであったことが、既に判明している。

しかしいかに秀才揃いの受験生とはいえ、暗闇で人を襲うような怪しげな人間と関係のあることが分かれば、受験資格すら危うくなる。そんなリスクを背負ってまで明青に嫌がらせをする理由はない。ばさりと音がして、地面に何かが投げ出される。

（…網！？）

「捕らえる！！」

それを合図に、人影が飛び掛ってくる。暗がりでは見辛かったが、

どうやら棒状のものを持っているらしいと見て取り、紅珠は手加減しないことにする。何しろ紅珠は今、完全な平服であり、武器を持つていないのである。

「壁に背を付けて、自分の身は守りなさい！」

紅珠は一度だけ振り返って明青に指示すると、そのまま地を蹴った。

数歩助走をつけると、そのまま足を跳ね上げる。革のサンダルが黒装束の顔面を蹴り飛ばす。そのまま身体をひねり、左肘をもう一人の胸に叩き込む。

一気に二人を倒した紅珠に、黒装束たちの間に戸惑いが広がる。彼らのはか弱い女二人を捕らえるだけのつもりだったのだらう。反撃され、しかも自分たちがやられるということは考えていなかったに違いない。

紅珠は向き直って再び体勢を整える。その時、黒装束の下の顔が月影に微かに浮かぶ。それを目にして、紅珠はやはり内心首を捻った。

(…狂信者の表情、では、ない？どちらかといえば役人っぽい？) しかしのんびり考えている場合ではない。紅珠は軽く身を沈めると、再び跳ね上がった。

「こ、このやろう……！！！」

驚いたではあるうが、まだ自分たちの有利を、彼らは疑っていない。手に手に棒を構え、向かってくる紅珠を迎え撃つ。

(す、凄い……)

紅珠の言った通り、壁に背中を預けて身を守っていた明青は、目の前の紅珠の戦いにあっけにとられつつ、じっとその行方を見守っていた。いや、目を奪われていたといっても過言ではない。

三対一、いや、胸を強打された男は立ち上がったので四対一とな

つていたが、それでも紅珠の身体には、一発も打撃は打ち込まれていない。紅珠は身軽に動き回って巧みに彼らと一对一の状況を作り、打撃を受け流しつつ、確実に急所に攻撃を打ち込む。一人は首筋に、もう一人は腹に蹴りを受けて地面に昏倒した。

紅珠の動きはまるで先ほどの舞を見ているようで、しかし確実にそれとは違う凄みと力を振るう。武器を持った男たちを相手に素手で圧倒する紅珠に、しかし明青はふと疑問を覚える。

（あの人、武器を持ってないのに…なんで…？）

そんな考え事をしていたことが油断となったのか、明青は目の前に男がいることに気が付くのが遅れた。

はっとする明青の目に、両手で網を持った男が、荒い息をつきながら近付いてくるのが映った。

「いやあゝゝ！」

表情と声を引きつらせて、明青が悲鳴を上げる。その声にはっと紅珠が振り向く。

「明青！術を！」

（わ、分かってるけど…）

紅珠に言われるまでもなく口と手を動かしかけていた明青だが、一旦動揺してしまったため、その全てがちぐはぐになってしまっている。そんな明青を、男は齒をむき出して厭な声で嘲笑った。そして壁際の明青に飛び掛りつつ、網を投げた。

（！……）

明青の焦る表情が一変し、ぎっときつい目で網と、飛び掛ってくる男を睨みつける。

「私に触れるな……！」

明青の怒鳴り声と同時に眩い光がほとばしり、男が背中から吹っ飛ぶ。彼は地面に叩きつけられてぐもったうめき声を上げると、しばらく痙攣した後、ぐったりと動かなくなった。その側に落ちた網は、瞬時に炭化したように真っ黒になっていた。

（…炎の術力、か…？それにしても術を為していない、純粋な術力

だけであの威力。相当なものだ)

その様子を目の端で確かめつつ、紅珠は横から明青に近付こうとしていた男の懷に飛び込む。そして全身の体重を乗せた肘撃ちをその腹に叩き込んだ。

全員を斃したのを確かめると、すぐに紅珠は明青を連れてその場を離れた。

襲撃者の正体も、その目的も不明なままではあったが、明青がいる以上、彼女の身の安全が最優先事項であった。

宿舎への道を急ぐ紅珠を、やっと息を落ち着けた明青が引き止める。

繋いでいた手を引っ張られて、紅珠が振り返った。

「なんで？」

怒りの表情の明青に、紅珠は不思議そうな表情を返す。

「なんで？何であなた、あんな戦い方なの？」

「何故と言われても。私は戦士だからな。武器も持っていないなかったし」

当然のように答える紅珠に、明青はぶるぶると頭を振った。

「だって、あなた術者でしょう！何で術を使わないの！術具だって身に着けてるんでしょう！？」

明青は今こんなことを言うべき場面ではないことを、頭の片隅では冷静に理解していた。これは単なるヒステリーであるということも。しかし襲われて怖い思いをし、それ以上に武器を持った多人数相手に素手で戦う紅珠の姿を見せつけられて心配に胸を痛めた反動は、止められなかった。

頬を紅潮させて睨まれて、紅珠は僅かに苦笑した。

「落ち着きなさい。あなたは勘違いをしている。私は術者ではない。術具は確かに身に着けているが、これは攻撃用ではない」



あくまで穏やかな表情と口調で、紅珠は明青を宥める。

「嘘よ、あなたは確かに術力を持っている。でなきゃあなたは術力に対抗できるわけない。私の術力を測れるわけない。私、分かってんだから。実力を全く持たない人間は術者の能力を測れない。強さとか、能力の内容とか、見抜くことができるのは術を持っている人だからだし、だから私だってあなたに術力を感じてるんだし。あなただって私が戦えるだけの術力を持っているって分かったんでしょ、そういうことじゃない」

明青の言葉は、正しいものである。しかし紅珠は静かに笑いながら頭を振っていた。

「例え術力を持っていたとして、それが戦闘に使えるか否かは別問題でしょう。それに多分、あなたが感じている術力というのは、私の身を守っている術具のものだわ」

言いながら、紅珠は髪留めを外して明青に差し出した。鈍い輝きの銀細工で、暗がりでは判読できないほど細かく何やら文字のような、紋様のようなものがびっしり刻まれていた。

「これは私の養父が私の身を守るために、特別に作ってくれた護身の術具なの。養父は術で身を守ることでできない私のために、たくさんの護身用術具と攻撃補助術具を持たせてくれた。それらはこの世に二つとないものばかりだし、間違いなく最高級の能力を持った術具ばかりだわ。だから、私は今まで無事に旅を続けてこられたの。そして、紅珠はにっこりと笑った。

「今、私がここにあるのは養父のおかげ。養父の持たせてくれた術具が私を護ってくれているからなの。私は、養父に感謝しても足りない。それぐらい養父のことを愛しているのよ」

紅珠の笑顔は純粹で、明青は思わずどきりとして見入ってしまった。それからほっとして気をそがれたように俯く。

「さ、それよりも早く。またあいつらみたいなのが襲ってこないとは限らないんだから」

紅珠がやはり穏やかな声で言い、明青に手を差し出す。明青は俯

いたまま、頷いた。

「…ごめんなさい。取り乱してしまっただわ」

自分の言葉が単なる恐怖の体験の反動からのヒステリーであったことを自認して、恥じ入っている明青に、紅珠は無言で頭を振った。

「あなたは何故、たたかっているの？」

不意に聞こえた声に、紅珠は首を回らす。しかし闇の中、誰の姿も、光すら見当たらなかった。

（この声は…）

しかし紅珠にはその声に心当たりがあった。このところ、何度も聞いている声であった。

「あなたは、何故そんなにたたかっているの？」

「そんなもの、戦わねばならないからに決まっているだろう」

重ねられた問いに、紅珠は答えた。一片の迷いもなかった。

「人には色々な生き方が用意され、与えられているのである」

「そこにはたくさんの選択肢が用意されているのかもしれない」

「でも、きつと人が自分自身のために選ぶ選択肢は、きつと始めから一つしかないのだ」

「私は、私の信ずる道を選んだのだ」

「それは、戦うことで道を切り拓く道だった」

「それは、偶然であり、必然であったのだ」

（……？）

語るうちに、ふと紅珠は違和感を覚える。

（…何故？）

「そんな選択肢は存在し得ないと言ったら？」

(……?)

姿なき声に心が反応する。その事実、紅珠の内心が戸惑っている。

「人生に選択肢など有り得ない。人に与えられた道はたった一つしかない。それは誰がどう足掻こうと、決して違えることなど叶わない。何故なら人はその生き方を背負ってこの世に生まれてきたものなのだから」

「そんなことはない」

(ちよつと…待ってよ)

紅珠が心で叫ぶうちにも、言葉は止まることがない。

「私はもしかしたらあの時、死んでいたかもしれない。もしかしたらあの時、砂漠に迷って野垂れ死んでいたかもしれない。もしもあのとき、あの人の言葉に従っていなければ、命を失っていたかもしれない。私はたくさん偶然に偶然を重ねてこの世に生まれ、そしてここまで生きてきた」

(何で、私はこんなことまでしゃべろうとしているの！)

紅珠の内面が、強烈に反発する。喉を押さえようとするが、そうできた実感もなかった。

「砂漠で生きると決めた、それも私の選択だし、ちち養父に剣を、戦い方を習ったのも私の選択だ。私は無数の選択肢を選んで、ここまで来た。お前に会おうと決めたのも選択肢の一つだ」

「それだって、仕組まれているのかもしれない」

「あなたは、ここまで、導かれてきているのかもしれないよ」

「それならそれだって構わない」

(……私、は)

紅珠の内心はともかく、言葉には迷いはなかった。

「私を導く者がいたとして、その道を踏み外すという選択肢は常に無条件に存在しているはず。私はそれを選択しなかった。それならそれで、私が今ここに立っているのは私の意思の結果だ」

(そう、迷っては、いないわ)

「私は、お前に会いたいと思ってここまで来たのだ。お前に会って、力を借りたい。お前の助けを得たい。それが例え仮に誰かに操られた結果であつたとしても、今の私は私の意志でお前に乞う」

「私に、お前の力を貸して欲しい」

紅珠の言葉に、闇の中のどこかにいる者が笑つたような気配が、微かにあつた。

「本当に、あなたという方は………なのですね」

「？」

笑いを噛み殺しているような言葉のために、紅珠には一部分が聞き取れなかった。しかし反問する前に、再び言葉が続けられた。

「あなたの言葉を聞くことができました」

「あなたの心を聞くことができました」

「承知いたしました」

「あなたに道を開きましょう」

「え……」

そこで紅珠は目を醒ました。

## 6・春の燔祭

吐蕃<sup>トウバン</sup>皇国首都<sup>オウコク</sup>の大都<sup>ダイト</sup>では、5月下旬が春祭の期間にあたる。

その期間、普段は完全に隔絶されている感のある大都の各区域、つまり道路と水路によって区分けされた役人や高官の居住区、行政府、商業施設などの各区域が、一斉に祭色に染まる。もちろんだからといってどこにでも入れるようになるわけではないが、普段よりは気軽に各区域の境を越えて、大都の各地で行なわれるイベントを楽しむことができるようになる。

大都已经なわれる祭は、つまり吐蕃皇国の中心である吐蕃王国の祭である。吐蕃王国を形成する民族は「吐蕃人」であり、彼らの信仰する神のための祭が吐蕃の祭で、一般に「春の燔祭<sup>はんさい</sup>」と呼ばれている。

この祭の中心行事は、三日間に及ぶ皇<sup>オウ</sup>の祈祷である。そしてこの祈祷は、皇の住いでもある王城、「円城」で行なわれる。

この祈祷の期間、普段は閉じられている円城の城門は一般民のために開かれる。城門を入るとすぐが城の前庭であり、そこに特設の祈祷壇が設けられる。祭の期間、皇はそこで日に五度、神への祈祷を行ない、その年一年の国の安泰や豊作を祈願するのである。

この祈祷は年によって日は多少前後するが、毎年5月の最終週に行なわれている。

そして今年も、春の燔祭の中心行事、皇による三日間の祈祷が始まった。

その朝、早朝トレーニング<sup>コウジユ</sup>から戻った紅珠<sup>テイエンフン</sup>は、『天藍』の天幕が何やら騒がしいことに気が付いた。何事かと足を向ける紅珠に気が付いた『天藍』の団員が、彼女を呼びに駆け寄って来る。

「良かった、あんたを待つてたんだよ、紅珠」

興奮しているのか焦っているのか、どちらにせよ落ち着かない様子で紅珠の腕を引く。何事があったのかと思いつつ、紅珠はそのまま中心テントに連れて行かれた。

天幕に入ると、そこには吐蕃の役人らしき二人の男がいた。彼らは武器を携帯している様子はなく、更にこの場にあつては場違いといえるほどに優美な着物を身に着けていた。どうも武官や警察ではなく、どちらかといえば文官のようである。しかしそれにしては着ているものが上物であつた。

（役人…というよりは……）

考えている紅珠に、役人たちに対していた団長が近付いてきた。

「紅珠、王城からの使いだそうだ」

そつと耳元で囁かれ、紅珠の胸中で不審感が募る。

（…王城？ということは皇の使い？では彼らは役人ではなく、皇の側仕えか？）

どちらにせよ、紅珠にはそんなものが自分を訪ねてくる理由に心当たりがない。不審に思いつつ、それを表には出さないまま、紅珠は彼らに向かい合つた。

「おお、その方が噂に名高い『沙漠の舞姫』か。なるほど、噂通り、美しい女子おなごじゃ」

「…」

使者の台詞の内容と口調に引つかかるものを感じつつ、紅珠は静かに表情を消して軽く頭を下げた。

「その方、どうやらこの大都でたいそうな人気を得ておるようじゃのう。町中の者が噂をしておる。『沙漠の舞姫』はたいそう美しく、その舞う姿はまるで天女のようにであると」

「それは、ありがとうございます」

紅珠はにつこりと笑顔をみせる。礼儀と尊厳を完璧に守つたその姿には奇妙な貫禄すらあつた。使者の男たちが一瞬言葉を詰まらせたのに気付कि、紅珠は内心で嗤う。何やら無意味な咳払いをしてから、

彼らは続けた。

「そ…そこでだ、その噂を耳にされた皇は、その方にたいそう興味をもたれておる。ぜひとも町中で噂の舞姫の舞を見たいと仰せられておるのだ」

周囲で聞いていた団員たちの間から、おお、とざわめきが上がる。

紅珠は表情を変えないまま、言葉の続きを待った。

「そこでわれらが皇の使いとして参ったのだ。『天藍』の「砂漠の舞姫」よ、皇の御前に参上して皇のお心をたの愉しませる役目を申し付ける」

周囲のざわめきが強くなる。紅珠がこっそり見回してみると、どの顔にも戸惑いと期待の表情が入り混じっていた。紅珠は僅かに視線を落とした。

正直に、紅珠は皇の使者の命令に迷っていた。そして迷っている自分自身に戸惑っていた。

「王の心を愉しませる」とは何を意味しているのか、分からないほど初心ではない。しかしそんなことに戸惑うほど潔癖な人間でも紅珠はなかった。むしろ彼女がこの大都に来てやろうとしている目的のためには、願ってもない状況であつたりするのだ、実は。

一介の芸人にとって、王侯貴族をパトロンに持つということは、目標の一つであると言える。特に名声を得たいといった野心を持つ者にとつて、金銭面や宣伝の面で、これほど都合なことはない。もちろん世の中は持ちつ持たれつであるから、芸人側もパトロンに提供するものがある。それが女なら、その内容は言わずもがなである。

紅珠は正確に言えば、芸能を本業としているわけではないから、特にパトロンを得る必要などない。しかし本業である傭兵として生きていくにも多少は似たような事情がある。また、旅から旅に生き

ている身分は、一言で言えば相当低い。貧民窟スラムの住人と紙一重の、世間の裏面を生きる人間なのだ。奇麗事ばかりでは生きていけない。紅珠は、決して自分自身に後ろめたい生き方はこれまでしてきていない。しかし、大抵のことは清濁併せ呑んできた。彼女の傭兵としての信条は、目的を達成するためには最善の手段を選択する、といったものであった。

そんな紅珠にとって、皇の命令は願ったり叶ったりで、普段ならすぐにでもそれに乗ったであろう。

しかし今、彼女は迷っていた。もつと正確に言えば、嫌悪感が大きかった。

（何故だ？王城に乗り込むのにこれほど都合のいいことはないではないか。プライドがどうか言うほどのことでもない）

実際、砂漠の民が皇に召されるのはよくあることである。皇に限らず公や貴族含め、貴人にはよくあることである。それは正式に側室や妾として迎えられる場合もあれば、単に一夜の伽の相手としての場合もある。しかしそれだって、決して砂漠の民にとって不名誉なことではない。彼らの尊厳はそんなもので汚れるほどやわなものではなかった。

それでは何故、紅珠はこんなにも迷っているのか。こんなにも皇に対する嫌悪を感じるのか。

（ああ、そうか、私は吐蕃皇が嫌いなのだ）

ふつと心に湧いた言葉であったが、どうもそれが一番自分自身の心に沿っているように、紅珠は思った。

（特に、皇の性癖だ）

紅珠の聞き及んでいる皇の性癖とは、端的に言えば好色であるということである。

皇が複数の妻を持つのは当然のことである。紅珠はそれ自体を問題とはしない。しかし今上皇の好色さは、紅珠の感覚からすれば常軌を逸していて、単純に嫌なのである。



皇の後宮に数多い妃、その他城勤めの女たち、更には町に住む女。年齢の上下や貴賤を問わず、皇の眼鏡に適った女は片っ端から召し上げられているという。もちろん伝聞ではあるが、貧民窟スラムの住人や砂漠の民からも同様の情報を得ている。恐らく間違いはないだろう。

紅珠は皇が好色であろうと構わないと思う。そんな貴人はいくらだっている。しかしあまりにも見境がないと思う。

紅珠が聞いた話で特に不快だったのは、現在の皇の第一寵姫である火晶カシヨウのことである。

火晶が皇の許に嫁いできたのは吐蕃暦328年頃のことらしいが、その時やつと彼女は11歳くらいであったという。吐蕃暦331年現在、火晶妃は14歳と公表されているので、計算は合う。

吐蕃皇国では、女子は12歳頃から婚姻が成立する。しかしそれは働き手を少しでも多く必要とし、少しでも多く口を減らす必要がある農民、漁民などの話であり、貴人の婚姻年齢として、11歳はいくらなんでも若すぎる。しかも翌年には既に火晶に対する皇の寵が噂されている。事実はどうであるか、確認する手立てもないし、特に確認することでもないと思うが、それだけで紅珠の皇に対する嫌悪感の理由としては充分であった。

実際に紅珠が迷っていた時間は、そう長くはなかった。おもむろに視線を上げると、返事を待つ使者の顔があった。その視線の色に、紅珠の心は更に固まる。

（それに　　）

思ったのは、踊り手としての紅珠のプライドであった。

（私の舞を見たいというなら、その視線は何？）

足の前から頭の天辺まで、嘗め回すような視線。本人たちは隠しているつもりかもしれないが、その絡みつくような視線は、紅珠から見ればあからさまにいろ艶を求めているものでしかない。それは時として彼女が武器に使うものでもあったが、安売りする気は毛頭な

かった。

（私の舞はそんなものを売るのが目的ではない）

紅珠の心は決まった。

目の前には二人の皇の使いの男が立っている。周囲には成り行きを見守るざわめきがある。それらを充分に認識した上で、紅珠はゆつくりと口元を笑みの形に動かした。

「…よかったのか？」

天幕を出る皇の使者を見送ってから、団長が紅珠に囁く。

「……あんたらしくもない。絶好のチャンスだったんじゃないのか？」

もったいない、とぼやく団長の顔を見て、紅珠は小さく吹き出した。もったいないなどと言いつつ、その表情はがっかりしたものや怒っていたりするものではなかった。百戦錬磨の狸の表情の中に、気遣う表情を器用に読み取って、紅珠は内心で団長に感謝する。

「かまやしないわよ。私はそんなに自分を安く売るつもりはない。本気で私を欲しがるのなら、側仕え程度を使者に寄越すんじゃないだわ。最低、書状の一つでも持たせることね」

紅珠が冗談めかした台詞で人の悪い笑いを作ると、団長は吹き出し、豪快に笑った。

「前言を撤回しよう。あんたらしい、いや、実にあんたらしいよ」

団長の豪快な笑いに、天幕の中にまだ残っていた何人かの団員が思わず視線を向ける。

団員の間に漂う雰囲気は、実に複雑なものであった。しかしそれでも紅珠の返答に安堵した者もやや多かったようだった。

「余裕ね」

しかし近くで聞こえた言葉に、紅珠は表情を収める。そんな紅珠を、仁王立ちで睨みつけているのは荔枝<sup>リジー</sup>であった。

「何で断るのよ。貴族サマなんかじゃなくて皇から召されたって

いうのにさ。何が不満なのよ」

「荔枝、紅珠は――」

紅珠に対して敵意を顕わにする荔枝に、団長が厳しい視線を向ける。しかし紅珠はそれを遮った。

「あなた何なのよ。そりゃ、あなたは最高の踊り手だわ。最高の舞姫よ。でも思い上がってんじゃないの？あたしたちはたかが踊り子なのよ」

紅珠には荔枝の感情はよく分かっていた。その複雑な反発心は、よく理解していた。しかし紅珠はそれに正面から対することも、できかねた。

（悪いわね――）

「悪いけど、荔枝、私の舞は皇に独占させるものではない。私の舞は皇を愉しませるためなんかに奉げるものではないんだよ」

紅珠は偽りを口にすることはなかった。ただ、真実をはつきりと口にできないだけである。それは不誠実なことだと重々理解していたが、今の彼女はそう思うしかないと思っていた。しかし荔枝は、その言葉の裏に含まれた意味を察することが、今では、できるようであった。

「それは、あなたが砂漠の舞姫、だから？」

『砂漠の舞姫』という部分に不自然なほどアクセントを付けて、荔枝は紅珠を睨み上げる。そんな少女に、紅珠はただ静かに微笑を返した。

荔枝は不意にぱつと頬に朱を上らせると、くるりと踵を返して天幕を走り去って行った。そんな荔枝の後姿に、紅珠は少しだけ悲しそうに表情を翳らせた。

昼前の大都、円城。普段めったに入ることのできない場所とあって、物見遊山の人々でこった返している中に、明青ミンセイはいた。しかし

既に彼女は後悔していた。

（何なの、この人ごみは　　！）

何しろ明青の出身地は東部海岸地帯の小さな村である。彼女の精一杯の表現では、村の全人口を集めたよりも、今ここで、彼女の視界に入っている人間の方が、何倍も多かった。

それでも彼女はここまで、何とかがんばって見たのだ。

まず宿舎からここへ至るまでの間に街角で行なわれている小楽団の演奏を聴いたり、吐蕃皇国や大都の成り立ちを、節をつけて語る、町辻の芸人に拍手を送ったり。

人ごみに入るとまったく向こうを見通せない小柄で華奢な身体で、それでも人の間をすり抜けて列の前まで出て皇が祈禱を行なう姿を見たり。

しかしそろそろ体力も忍耐も限界かもしれないなかった。

（　　気分悪い　　）

人波に酔った明青は、無意識に人の少ない方へと足を向けていた。（だいたい、馬鹿どものくっだらな嫌がらせに腹が立ったから気晴らしに出て来た筈だったのに――！！）

気分の悪さが、むかむかと腹立たしい気持ち誘引する。

二重の意味でむかむかしながらふらふらと石畳を踏んでいた明青は、しばらくして風景があまりにも変わってしまったことに気が付き、ようやく足を止めて視線を上げた。

（あれ、ここは…？）

既に足下には綺麗に磨き上げられた石畳はなくなり、両側には埃っぽい高い壁が迫っていて、なんとなく荒んだ雰囲気はその場に漂っていた。

（しまった、入っちゃいけなかったんじゃ…）

内心やや青褪めながら、明青はそつとその場を立ち去ろうとした。こんなところを城勤めの誰かに見つかつて、それで罰を受けたりなんかしたら、割に合わない。いや、単なる罰ならまだしも、受験資

格を剥奪されたりなんかしたら、それこそ冗談ではない。

そつと足音を忍ばせて元来た道をたどろうとした明青であったが、ふと何かの物音を耳にして、思わず立ち止まった。

（何、これ…）

低い音だった。それも一つではなく、複数の。しかも

（ちよつと待つて、これは人の気配…？）

呻き声。密かな忍び泣き。身動きする音、鈍い衣擦れ。

不吉、だと心が警鐘を発していた。見てはいけない、近付いてはいけない、そう警告の声が聞こえる。しかし明青の足は理性に反するようにじりじりと動く。足音を忍ばせて、物音の聞こえる方へと行く手に壁の切れ目が見えてきた。明青はそつと壁に身を寄せて姿を隠しながら、そつと足音を忍ばせながらそこへ近付く。彼女の理性が盛んに警鐘を鳴らす、どうしても足を止めることができなかった。

壁の切れ目にたどり着き、そつと様子を伺う。

そこからはまず、水路が見えた。勢いのよい水音と軽い振動が伝わってくる。そこには大都の北を流れる大河、明江<sup>ミンコウ</sup>から水路に水を引き入れる口があった。しかし明青はそういったことは知らなかった。ただ、その辺りから、明青を導いてきた物音が聞こえている。彼女は意を決して、そつと顔を壁の切れ目から覗かせた。

「……………！！！！」

明青はとつさに口を両手で塞いだ。そして慌てて壁に身を隠す。

（何なの、あれは　！　）

どきどきと胸が拍を打つ。

明青がそこで見たのは、水路の岸に設けられた大きな檻。そしてその中に入っていたのは動物なんかではなく

（何で、何で人間が　！？　）

明青にはそれが何なのか、分からなかった。しかしそれは見てはいけないものであると、本能が告げていた。

すばやく周囲に視線をやつて、人の気配がないのを全身の感覚で

確認すると、明青は走ってその場を逃げ出した。

ただ、自分の見たものが怖くて、不吉な予感に全身がきりきりと締め付けられるような気がして、ただただ無性に恐かった。

祭のメイン行事が始まって、大都への人の出入りが激しくなっていた。

大都の全ての門は常に開かれ、出入りする人の列には切れ目が無い。

この祭の期間に一儲けしようと乗り込んでくる商人や芸人。一年あるいは一生に一度の旅と、世界一の都とも呼ばれる大都、そして円城を見るのを楽しみにやって来た観光客。人種も職種も様々入り乱れて賑わう様は、なかなか壮観であった。

そして人が増えるのに比例して、商売人たちは益々忙しくなる。

それはもちろん、『天藍』も例外ではなかった。

公演日程は今までと同じ日に二回だが、一回に入る人数が普段より二割程増しており、『天藍』にとってはうれしい悲鳴といったところであった。

昼の公演を終えた紅珠は、彼女にしては珍しく疲れていた。

珍しく舞台上アンコールに応えて舞を披露したということもあり、公演後には客を見送る誘導をしたり、また手が足りなくなっている動物の世話を手伝っていたり、と普段より働いていたということもある。しかし恐らくそれだけではなく、ここ連日のトラブルで、多少神経を使っていたということもあるだろう。

ようやく労働の手から離れ、パンとお茶を手に就寝用の天幕に潜り込んだ紅珠は、荷物の箱に背をもたれさせて大きく息を吐いた。

（私らしくもない）

ふっと思つて自嘲げな笑みを浮かべる。

どうも大都に来てから調子が狂わされっぱなしだ、と紅珠は思う。そもそも一つのことにはこれほどにこだわって時間をかけているというのも彼女にしては珍しいことであつた。普段ならもっと効率的な方法を選んでさつさとことを進めるのが、「砂漠の戦士」である紅珠なのである。その方法が多少無茶でも、少々手荒でも、やや怪しげでも。最善の方法で短期に物事を解決する。それが砂漠での彼女の生き方であつたはずだ。

（今朝だつてそうだ。何で私はあの時　　）

皇からの誘いを受けたとき。正直、心が動いたのは事実である。堂々と王城の、皇の身边に潜り込める。これほどに良い条件はない。それなのに何故、あの時理性は頑なに拒否をしたのか。

（方法を選んでいるほどの余裕なんてないはずなのにね　　）

勝算などない。全ては出たとこ勝負。それだけだつて充分彼女にとっては珍しい行動であるというのに。

（でも、多分、あの夢がなければ　　）

昨夜見た夢のことを思い、紅珠はふつと拡散しそうな意識を引き止める。

『あなたに道を開きましょう』

そう、確かに夢の中で『隠者』の声は彼女に告げた。しかしそれがどういう意味だったのか、そもそも夢は単なる夢だったのか、それも彼女には判断が付かなかつた。しかしそれでも、皇の使者を目の前にして、紅珠の心を最終的に引き止めたのは、その隠者の言葉であつた。

（さすがにここ数日は地下水路なんて行けないしな…）

しかしこの祭の機会を逃しては、そうそう自由に動き回ったりなどできないことを、彼女はよく分かつていた。

（あの言葉が、本物のお前の言葉なら、隠者よ　　）

私に道を開いてくれ、そう紅珠は心の中で叫んだ。念じた。

途端、ふらりと体が揺れたような感覚が紅珠を襲った。  
視界の隅から白いもので覆われてくる。

突然、紅珠は辺りが真っ暗なことに気が付いた。驚いて足を踏み出して、自分が立っていたことにも気が付いて更に驚いた。  
そこは天幕の中などではなく、手にしていたはずのパンもお茶もなかった。

紅珠はぐるりと視線を回らせた。そこは真っ暗で、湿っぽかった。足下はどうやら石畳か何かのようだが、そこもしっとり濡れているのが分かるし、すぐ近くで水音も聞こえる。音の方に目をやると、闇の中に微かにちらちらと揺れる影が見えた。水の匂いが空間に充滿していたが、どうやら臭気ではない。息苦しくもなかった。

（ここは地下水路…か？）

思っているところに、突然足下に明かりが灯った。  
驚いて半歩下がりと様子伺うが、熱くもなければ襲ってくるようでもない。ただ、ぼんやりと明るい白い光の玉であった。

（何らかの術か？）

思いつちにぼう、ともう一つ、闇の中に明かりが灯る。そしてもう一つ、もう一つ。紅珠のいる辺りからずっと前方に向けて明かりが続けざまに灯っていく。

薄ぼんやりと明るくなったところで改めて見ると、やはりそこは紅珠が何度も潜り込んでいた大都の地下水路であった。

紅珠は明かりの灯った地下水路を、誘われるまま進んだ。

何歩か進んだところで、急に周囲が眩しくなり、思わず目を眇めたところでまた普通の明るさに戻った。まるで眩い光の門をくぐったように、紅珠は感じた。紅珠は周囲を見回した。

「いらっしやい、ようこそいらっしやいました、姫」



急に呼びかけられた。紅珠は思わず身構えながら更に周囲に視線を向ける。

そこは先ほどまでの地下水路ではなかった。床、壁、天井は石で造られていて、ひんやりとして湿っぽかった。

そこはちよつとした広さの部屋のようになっていた。室内のあちこちに先ほどの水路で見た明かりが灯されていて、十分な明るさがある。

そして紅珠はようやく声の主を見た。

見て、絶句した。そして不意に腹が立った。

（ふざけてるのか？）

「いいえ、ふざけてなどいませんよ、姫」

紅珠の心を読んだかのように、壁に作られた棚に座った布人形が、パタパタと腕を振りながら答えた。さすがに驚いて、紅珠が後退すると、その布人形はくすくすと笑うような仕草をした。いや、実際笑っていた。

「ああ、驚いていますね」

布人形は女の子の姿をしていた。大きさは紅珠の掌より少し大きいくらいであった。古ぼけた、ややくたびれた感じの人形であった。「驚かないわけないだろう」

紅珠の声は地を這うように低く、どすが利いていた。

わざと声を出すことで自分の中の動揺を抑えつつ、紅珠は何とか体勢を整えた。

「まさかとは思うが、それが本体ではないだろう、『隠者』。お前は何処にいる？」

すると布人形がふわりと宙に浮いた。パタパタと腕を動かしながらすいっと宙を飛ぶ。やはり驚いたが、少しは免疫ができたのか、動揺も小さいまま、紅珠はそれを目で追う。

布人形の飛んでいく先の影から、ゆらりと誰かが姿を現した。そ

の肩に人形がちょこんと座る。

肩に人形を乗せたまま、人影が近付いてくる。だんだん灯りの下に頭わになるその姿に、紅珠は今日何度目かは既に忘れたが、驚いた。

紅珠の目の前に立って、布人形がパタパタと腕を動かした。

「お初にお目にかかります、姫。御無礼の段は平にお許しを。私は私の口からしゃべることはしないのです。代わりにこれにしゃべらせております」

『隠者』がその場に跪き、深々と頭を下げる。

やや呆然としながら、思わず紅珠は問いかけていた。

「…おまえは、私を姫と呼ぶのか？」

それに、目の前の人物は跪いたまま答えた。迷いのない答えであった。

「なれど、あなた様は姫でありましょう？」

「…」

紅珠は気を取り直すと、表情を引き締めて、じっと目の前の人物に目を据えて問うた。

「…改めて、名乗ろう。私は、紅珠だ。沙漠のちち養父よりそなたの話を聞き、そなたの力を借りたいと思い、探していた。

これまでの経緯より、そなたの力の質、そなたの力の強さを私もある程度は知ることができた。

誰も姿を見たことのない者、未来を見通す者、人の運命を語る者、世界の秩序の外に在る者。『隠者』と呼ばれ、或いは『賢者』とも呼ばれる者。暗闇に潜む『魔術師』とも呼ばれる者。

砂漠の隊長よりそなたの事を聴き、そなたの力を借りたく、そなたを探していた。

『隠者』よ、そなたに間違いがないのなら、私に力を貸して欲しい」

紅珠の言葉を受け、『隠者』は身体を起こした。

「存じております、姫。あなたのことも、砂漠の隊長のことも。」

私は顔の無い者。声の無い者。とつかわ外側に在る者。故にこそ遍く知り得る者。

魔術士と呼ばれ、賢者と呼ばれ、隠者と呼ばれし者。＜エック＞の名で呼ばれし者」

目の前で身を起こす人物を、紅珠はじつと見詰めていた。

つるりと仄かな明かりをはじく白い仮面。頭の前から足の先まですっぽりと覆う黒いマント。素顔も身体線の線すらも見えない。人形を通して語られる声は妙に特徴がなくて、男なのか女なのかも判別しがたい。ああ、そういえば頭の中に響いていた声も中性的だった、と紅珠は思っていた。

顔も無く、声も無い。全ての己の真実をたった一枚の幕で覆い隠して。なるほど、確かにヒトの外側にいる人物だ、と紅珠は思った。「私をここに招いたのは、お前の術か」

紅珠の問いに、『隠者』は頷く。

「あなたの声を、私は聞くことができました。

私は私があなたのため、何らかの力になることができることを知りました。

故に、あなたをここに招く“道筋”をつけました。

あなたの声が私を呼んだとき、あなたをこの場に転送することができるように」

「…『転送術』!？」

紅珠の声が驚きに高くなる。

術の中には人や物を、ある地点から別地点に転送させる術、つまり『転送術』というものがある。

しかし一般にこの術は最高難度のものとされており、紅珠が今まで知り合った中では、他に転送術の使い手などいなかった。

噂では、皇立呪術研究所には何人もの『転送術者』があり、また三公国にも公直属の術者として転送術の使い手が必ずいるという。そして皇より危急の召集がかかったときや、あるいは隠密裏に行動

するときなどに、その術者たちが活躍するという。

しかし転送術とは非常に難易度の高いものであるという。小さなものを転送させる術なら一人で行なうことも可能だが、通常、成人一人を転送させる術というのは、少なくとも四〜五人の術者が必要だといわれている。また、「陣」を組んだり場合によっては「結界」を作ったりといった事前の準備も必要である。

つまり、この目の前の人物が紅珠をここに呼び寄せた手段が『転送術』であるとするなら、彼は相当強力な『転送術』の使い手であり、紅珠にとっては初めて出会う『転送術者』であり、初めての『転送術』の体験であつたわけである。

驚くなという方が無理である。

「あなたの望みをうかがいましょう、姫」

信じていいだろう、と紅珠は思った。だがしかし。

「ひとつ、言っておくが、私はお姫様ではない。紅珠だ。姫と呼ぶのはやめてくれないか」

むっとした表情でいう紅珠に、エックの声に笑みが混じる。

「承知しました。あなたがそう望むなら」

「下働きに入りたい？王城の、後宮に？」

紅珠が口にした願いに、エックが首を傾げる。声は人形から聞こえてくるのに反応は仮面に黒マントの人物から返ってくる。紅珠はとりあえず頭からその奇妙な構図を追いついて彼に相対していた。

「知りたいのだ。この国がどんな国なのか、ひいては皇とはどのような人物なのか」

「それを知って、あなたはどのようなのですか？」

彼の反問に、紅珠は軽く肩をすくめた。ごまかしではなく、実は本当に彼女にも説明しがたかったのである。

「皇にとりいろうというなら、そんな回りくどい手を使わなくとも

よいでしょう？あなたなら」

「それは嫌だったのだ。皇に私の存在を知られるのも避けたい」  
ごまかし、隠し通す自信はあった。素性も、本性も、素顔も、本当の目的も。反対に、隠し通さねばならない気もしていた。この吐蕃という国は、決して彼女には優しい国ではない、そう感じていた。

エツクには彼女の希望をかなえることは、可能であった。しかし彼は断った。

紅珠の望みを叶えるのは可能だが、今は奨められない、と言うエツクに、紅珠は不審な表情で彼を見据える。

「私には後宮で働いている『目』と『耳』がいるのですが…」

「『目』と『耳』…？」

反問しながら様々な意味で紅珠は驚く。

「彼らからの連絡がここ最近途絶えています」

「……」

（これが、彼の「預言者」或いは「魔術師」と呼ばれる所以なのか…）

「彼らは相当に優秀な者たちです。ですから彼らの身に何かがあったとは考えていません。ですが外部と連絡の取れない状況であることは間違いありません」

エツクの声には揺るぎがなかった。そのことが余計に紅珠に戦慄を覚えさせる。

「…一体後宮はどういう状況にあるんだ？」

思わず呟いていた。

いかに砂漠の民が吐蕃国中に散らばっていて、互いに情報の遣り取りをしているとはいえ、吐蕃王城は一種の聖域。更に後宮ともなれば幾重にも衣を被せられた、秘中の秘。むしろ後宮の内情が世間に知られているともなれば、その国は終わりであると断じて良いだろう。

故に、紅珠は自身が後宮の内側に入ろうと考えたのである。後宮

からは王城が、そして皇国中が見える。

しかし今、『隠者』の口から漏れた後宮の姿は、予想外の部分で紅珠に衝撃をもたらしている。

「分かりません。先ほども申したような状況ですので。ただ、こうなる以前に知り得た情報ではこのようなものがあります。」

皇は大変火晶妃を大切になさっています。以前、妃のことをよく思わない後宮の姫がいました。当然嫌がらせも相当激しかったと言われています。

その姫は不敬罪で処罰されています」

当然この事件は表沙汰にはなっていない。処刑は秘密裏に行なわれ、姫君の実家にはひっそりと遺品が送り返されたという。当然、その家は現在吐蕃皇国においての力を失っている。

その他にも、火晶妃の関わる人物で、何らかの罪で処罰された例はかなりの数になる。それは後宮内部のみならず、王城に勤める者にも及んでいるという。中には彼女を邪まな目つきで見詰めたというだけで鞭打たれた男もいたという。

「…一体、火晶妃とはどういった人物なのだ？」

「お考えの通りです」と言いたいところですが。実はどうにもよく分からない、というのが本当のところですよ。姿が、見えないのです」

ただ現在明確な事実、後宮内で火晶妃の影響力が強まっているということ。それはともすれば「王妃」である東の姫君をも凌駕するものになりつつあるということ。そこには皇の偏寵が強く影響しているのは明白であるということ。最近の後宮では、火晶妃に倣うかのように香と西域風の風俗を好む姫君が増えつつあるということ。そのためか、後宮の建物の側を通っただけで香が匂うほどだということ。

「…香？薫香か？」

「はい、そのように聞いております」

「……」

「ともかく、現在の後宮は以前よりはるかに物騒になっております。確かに私にはあなたを後宮の中に潜り込ませることは可能です。しかし全く保障もできませんし、一旦後宮に入ってしまうと、助力することもできません。」

加えて現在は、二ヶ月後の『皇公会議』を控え、それだけでなくも王城の警備は厳しくなっております」

エックが、面に覆われた顔でまっすぐ紅珠を見据える。

「そのような不穏な場所に、いかにあなたとはいえ、いえ、あなたであるからこそ、送り込むことはできません。今は、その時ではありません」

「時間と、タイミングを待て、と？」

「その必要があります」

エックが頷く。紅珠は唇を噛み締めて、視線を落とした。

エックの潜む空間から地上に出た紅珠が立ったのは、スラムの一角であった。

人間一人を『陣』や長時間の呪文詠唱などの準備なしに移動させるエックの『転送術』も万能というわけではないようで、ターゲットを彼のいる結界内部に招くことは完璧にできても、結界外に転出させる場合には転送先を明確に設定できないのであった。

しかしもちろん全くどこに出るか分からないというわけではなく、ある程度の制限はある。彼いわく、半径50キロメートル以内で、転出者本人が強く心に念じた場所の近辺に送り出すことができるのだという。誤差はプラスマイナス2キロメートル内だという。

「私は『天藍』を念じたはずだったんだがな」

紅珠は軽く肩を竦めたが、この程度なら許容範囲内だと納得した。

改めて周囲を見回すと、そこは彼女の見知った場所であった。こ

こ一ヶ月近く、何度となく足を運んだ場所であつたからである。

「ああ、ここは秦<sup>シン</sup>の近くか……」

風景を確認して、紅珠は頷いた。

とは言え、今現在には彼に用事があるわけではないし、何よりも紅珠は次の公演の仕度にそろそろ取り掛からねばならない。ここから『天藍』の天幕までは歩いて20分ほどかかる。

迷わず『天藍』へ戻るために踵を返した紅珠は、しかし気になることがあつて足を止めた。

(…やけに閑散としているな……)

彼女の知っているこの辺りの貧民窟は、もっと人間が多かつた。活気こそないが、姿の見えない者も含めて多数の人間の息づく気配で空間が飽和しているような、そんな密度があつたはずである。

それが現在は、風すら妨げるものもなく、乾いた空気がひっそりとそこにあつた。

確かに気にはなつたが、さほど重要なこととも紅珠は思わなかつた。貧民窟の住人が集団で労働に駆り出されることだって、あるのだから。

不審に思いつつ、紅珠は『天藍』へと足早に戻つた。

その夜の『天藍』の公演も、変わらず盛況のうちに幕を下ろした。そしてその夜、『天藍』ではある事件が起こつた。

踊り子の一人である荔枝が行方不明になつたのである。



## 7・祭の終焉―砂漠の舞姫 3―

祭も三日目を過ぎていた。しかし『天藍』<sup>ティエンラン</sup>の踊り子、荔枝<sup>リージー</sup>は戻って来ていなかった。

一日目の夜、公演を終えたときまでは確かに彼女はいた。しかしその後ぱったりと姿を消してしまったのである。

『天藍』の団員は、団長以下裏方に至るまで全員が、公演の合間を使ったり、何とか時間を作っては彼女の行方を捜してきた。しかし三日目の今に至るまでその行方は杳として知れない。

三日目。二回目の公演の準備をしながら、紅珠<sup>コウシュ</sup>はふっと視線を宙に彷徨わせる。

（何処へ行ったんだか…）

何をこんなに気にしているのか、紅珠自身にもよく分からなかった。

荔枝は彼女よりも歳若いとはいえ、決して子供ではない。それどころか砂漠の民として生きてきた荔枝は、並の人間よりはるかに人生経験を積んできている。危険にぎりぎりまで近付いてチャンスをつかむ術も、危険をかわす術も自然と身に付けてきている。そういう娘である。確かに気にしすぎることはない。だがしかし、何かが紅珠の胸に棘を刺す。

（気にする、というよりも…）

「不安だわ」

ぽつりと紅珠は呟いた。

目の前の鏡に映る彼女は、衣装も髪もすっかり整って、後は化粧を施すまでになっている。白粉を塗って、瞼にシャドウを塗って、頬に紅を刷いて、この顔は「砂漠の舞姫」となってゆく。しかし今鏡の中の顔は、とても「舞姫」には見えなかった。視線に宿る光は限りなく鋭く、全身の感覚が全ての違和感を逃さぬよう、研ぎ澄ま

されている。それは彼女本来の姿、「沙漠の戦士」のものであった。紅珠もこの二日間、何とか時間を見つけては大都の町中を走り回った。しかし『天藍』の団員には正直なところ、余計な時間などはほとんどないのであった。特に祭の三日間は動くこともできないといって過言ではない。紅珠も正式には『天藍』の団員ではないとはいえ、今ここに所属している以上は彼女も『天藍』のために働かななくてはならない。何よりも、自分自身の演目を持っており、それが評判となっている以上、自分勝手に動き回ることなど、できるわけがなかった。

しかしいくら気になるとはいえ、いつまでもぼうつとしているわけにはいかなかった。気を取り直すために大きく息を吐いた。

(!!!!!!!!!!)

瞬間、紅珠は覚えのある違和感を身に感じた。背から包み込まれるような喪失感。

はっと振り向いた紅珠は、闇に意識を飲まれる瞬間、確かに何かの悲鳴を聞いた。

「~~~~~」

苦悶の呻きを上げながら、紅珠は非常に不本意な表情で周囲を見回した。何が不本意といって、この自分が一言も発することができずに呻いているしかないという状況が、である。

目が回る。内腑がひっくり返ったようにむかむかする。地面に蹲ってぐらくらくる頭を抱えて、紅珠は何とか頭を上げた。その視線の先に忘れようもない姿を認めて、ぎり、とその姿を睨みつけた。

「大丈夫ですか？」

その肩の布人形がぱたぱた腕を振ってしゃべる。

「……大丈夫なわけないだろう！」

吐気を忘れて紅珠が怒鳴る。

「いきなり心構えもなしに空間を移動させられる身にもなってみる！私を殺す気か！？」

転送術とはあるものがある一点から別の座標へ移す術である。その方法には様々なものがあつて、目に見える速度で空間を移動させるものもある。

しかしこの隠者・エツクの用いる術は、物体の再構築、ないしは存在の位相ごと変換させている可能性がある。でなければ地上にあるものを地下に移動させたり、閉ざされた空間に物体を現出させるということなどできるはずがない。それでなくとも転送対象には負担のかかる術である。何の心構えも事前の準備もなく、有無も言わず転送させられては、身体がおかしくなっても不思議ではなかった。

本気で腹を立てている口調の紅珠に、仮面にマントの人物、隠者ことエツクの声が答える。

「申し訳ありません。なにぶん緊急事態であつたもので」

その口調の真剣さに、紅珠は眉を顰めた。言いたいことは山のようにあつたが、気分の悪さもあつて普段の勢いが出なかつたせいもある。

何とか身体を起こした紅珠は、少し離れたところでやはり蹲っている人物に気が付いて、はっとする。石畳の床に広がっている淡い色の長い髪や、その書生の衣装には見覚えがあつた。それでもまさかと思いつつ、呟く。

「……明青<sup>ミンセイ</sup>？」

ぴくりと蹲っている人物の肩が震えた。ゆっくりと身を起こす。

乱れた髪の間から覗いた瞳は董色。間違いなく明青であつた。

「やっぱり明青、どうしたの！？何故こんなところへ……！？」

何故こんなところに、『隠者』の空間に、一般人である明青がいるのか。不思議に思いつつ、紅珠はまだ重い身体を引きずりながら、彼女の方に近付いた。

一方、顔を上げた明青は、蒼白な表情で、ただその大きな目だけ

をいっばいに見開いた。そしてわなわなと身を震わせた。

「ミンセ……！」

紅珠が呼びかけるより早く、明青が悲鳴を上げる。そして驚いて固まる紅珠に、力一杯しがみついていた。明青はこの華奢な体のどこにこんな力が、と思うほどの力でしがみつき、声にならない悲鳴を上げながら泣きじゃくる。

「……何があつた！？」

戸惑つたままではあつたが、さすがに固まつた状態からは脱した紅珠が、側に佇む隠者に鋭い視線を向ける。明青はとても問いに答えられる状態ではないと彼女は判断していた。小さな子供のようにしがみついてくる明青を抱きとめながら、紅珠は隠者に説明を求めた。

「……私にも、詳しいことまでは分からないんですよ。ただ、彼女の声が聞こえたんです」

彼は普段彼の空間、吐蕃<sup>トゥバン</sup>皇国首都・大都<sup>ダイト</sup>の地下のどこかにある、外部からは閉ざされた空間から出ることはない。しかしその中にある外部の状況は絶えず入手している。

しかしだからといって大都で起こっていることの全てを入手できているというわけではもちろんない。大都の住人数千人、その全ての声が聞こえるわけではない。

しかし時に、意図しないものが聞こえることがある。それはとりわけ強い想い、気持ちであることが多い。今日彼に聞こえたのも、そういうものであつた。

「あなたを、呼ぶ声が聞こえたのです、紅珠」

「……私？」

突然聞こえてきた声に、彼は意識を留めた。そしてその声がどこから聞こえてきたのか、声の主は誰かを探った。そして見えたヴィジョンは、蒼白になって助けを求める一人の少女。その切羽詰った感情に、彼は迷わず彼女を保護することを決めていたのだという。

「そしてあなたにも来ていただくべきだと思つたのです、紅珠。今、この少女にはあなたが必要です」

「…その、切羽詰つた状況とは何だ？そもそも、この子は一体どこにいて何があつたというんだ？」

彼の説明は要領を得ない。やはり詳しいことは明青自身に聞くしかないようであつた。

ようやく悲鳴もおさまり、しゃくりあげるように泣いているばかりの明青の体を優しく離し、紅珠はできるだけ優しい声で何があつたのかを尋ねた。

まだしゃくりあげながら顔を上げた明青は、ようやく紅珠に気が付いたような表情をした。

「紅珠…何でここへ…」

言つてから自分の言葉にはつとしたように、表情を堅くした。

「そつだ！大変なのあの人…そつ、荔枝！あの人が…！！」

その言葉に、紅珠の表情も変わる。

「荔枝？あなたあの子を見たの！？」

紅珠が問い返すが、明青の耳にはちゃんと届いていないようであつた。紅珠の腕をぎゅつと掴み、縋るような、必至な表情で言い募る。

「お願い、あの人を助けてあげて。死んじゃうわ！」

「それはどこ？一体何があつたの？」

紅珠は問うが、明青は答えることができない。ただ死んじゃう、殺されちゃう、助けて、と繰り返すだけであつた。

紅珠は明青を落ち着かせるようにぽんぽん、と優しく背を叩く。

「…じゃあ、明青、何も言わなくていい。ただ頭を振ってくれるだけでもいいから、答えて」

明青が強張つた表情のまま、こくと頷いた。

「荔枝がいるのはこの大都なのね？」

明青が頷く。

「町中にいたの？」

その問いに、明青は少し迷つてから頭を左右に振つた。

「では、町の外？」

しかし明青は今度も頭を振った。

（町の中でも外でもない？……）

紅珠の胸にじわりと不安感が広がる。頷いて欲しくないと願いながら、問いを口にする。

「……まさかとは思うけど、城の中？」

明青が頷く。紅珠は背中に冷たいものが走るのを感じた。そして不意に理解した。彼女が皇<sup>オウ</sup>に対して抱いていた不審感、拒絶心、それは紅珠一人だけの問題からではなかった。

（天藍にとって……いや、私たちにとって、皇とは、この国とは『危険』、なのだわ！）

紅珠が跳ね上がるように立ち上がった。

「お待ちなさい、姫！」

そのまま駆け出そうとする紅珠を、隠者の声が鋭く止めた。

振り返ってきた、と睨む紅珠に対し、隠者はあくまで平静であった。

「どこへ行くというのです。あなたが冷静さを失ってどうします」  
紅珠は何か言いたげな表情で、しかしぐつと口をつぐんだ。

「……だがほうっておくわけにはいかない。行かねばならんだろう」  
限りなく苦い紅珠の口調に、隠者が頷いた。表情も見えなければ肉声も聞こえない隠者であったが、何故か微かに笑ったような気がして、紅珠は眉をしかめた。

「分かっています。ですから私はあなたをここへ呼んだのですから」  
隠者がまだ床に座り込んだままの明青に仮面の顔を向けた。びくつと体を震わせる彼女に、隠者が穏やかに声をかける。

「あなたも手伝ってください、明青」

隠者・エツクの転送術は、術者である彼のもとに何かを転送してくるには精密だが、転出させるのはぐつと精度が落ち、出現地点に誤差が生じる。しかし他にも能力者がいれば誤差を修正することが

可能なのだという。その能力が強いほど誤差は少なくなるし、その能力者自身が転送対象であれば、尚好条件なのだという。つまり、隠者・エックは紅珠と明青の二人を王城内へ転送しようというのである。

明青を連れて行くことには、紅珠はやや迷った。こんなにも怯えている彼女を、再びその恐怖に直面させることには、ためらいがあった。しかし明青自身はほんの少し迷ったものの、すぐに承諾した。そもそも最初から紅珠を連れて行くつもりだったのだと言われ、紅珠は思った以上に心の強い明青に、感心すらした。

「それではしっかり手を繋いで離さないように。転出箇所にずれが生じてしまいかもしれませんから。それからもう一方の手をこちらに」

そう言つて隠者が二人の目前に掌を差し出した。

明青がぎゅっと紅珠の手を握つて、もう一方の手を隠者の手に重ねた。そんな様子を黙って眺めている紅珠に隠者が顔を向け、うながす。

「あなたの手も」

紅珠は一瞬鋭い視線を隠者に向けたが、無言で二人の手の上に自分の手を重ねた。

隠者が明青に言う。

「術力を手に集中させて。そして行きたい場所を強く念じてください」

手を繋ぐ三人を光が包む。紅珠は自分たちを囲む光の帯が規則性のある形を作っていくのを見た。

そして次の瞬間、全てが真つ白な光の中に消えた。

何もない空間に突然白い光が弾けた。そして光が消えたとき、そ

ここに二人の人物が出現していた。

石畳の舗道に放り出される瞬間、紅珠はとつさに体勢を整えて着地した。間を置かずに跳ね起き、周囲に目を遣る。

彼女が転送されたのは、見覚えのない場所であつた。

鬱蒼とした木立。黒い湿った土の匂い。見上げた視界には木々の間から覗く薄暮の空。振り返ると舗道の先に、一際高い建物が見えた。巨大な白壁に瑠璃色の瓦葺。そのたくさんの窓は全てに明かりが灯され、煌々と輝いていた。それを見て、紅珠は今自分がどこにいるかを悟つた。今日は祭であるから特別だとはいえ、吐蕃広しといえどここまで贅沢に灯りを使うことができるのはただ一ヶ所、吐蕃王城・円城だけである。

城が巨大すぎて全くその向こうの様子をうかがうことはできないが、遠くさざなみのように人々の歓声や楽の音が聞こえる。記憶している大都の地図と照らし合わせて、どうやらここは城の北側、裏庭と呼ばれる場所なのだと紅珠は判断していた。

視線を転じて改めて目の前を見ると、舗道の突き当たりにこじんまりした建物があつた。高床の、白い壁の建物で、屋根は丹色の瓦で葺かれていた。瓦の丹色はその建物が宗教建築であることを示している。

（確か円城の北にはお社があつたはず。位置的に見てこれがそんなのか？）

紅珠が状況を把握している間に、ようやく明青が立ち上がった。どうやら彼女は先ほど転送されたときに着地に失敗したらしく、涙目で腰を押さえていたが、彼女は今の切羽詰った状況を、全く忘れてはいなかった。目の前に見える社殿に表情を強張らせながら、ぎゅつと紅珠の服を掴んだ。そのまま無言で紅珠を引っ張りながら歩き始める。

並んで歩きながら、紅珠はふと気が付いて自分の衣装の上着を一枚脱ぐと、それを明青の頭に被せた。薄物の衣装では顔をすっかり



隠すことはできないが、ないよりはましであろう。明青は戸惑ったように紅珠を見たが、紅珠は気にするなと頭を振った。

（私はどちらにせよ顔は売れている。だがこの子はこれから大都で生きていく人間。こんなことでこの子の人生を駄目にするわけにはいかない）

紅珠はそう思っていたが、今はそれよりも重要なことがあった。

「落ち着け、明青」

紅珠が自分の袖を引っ張りながら歩く明青の肩を掴んだ。そして舗道を離れ、脇の木立に入る。確かに周囲に人の気配はほとんどないが、目の前の建物は皇族専用の社殿である。堂々と近付いてよい場所でもないはずである。

明青は抗議したげな表情で見上げてきたが、紅珠は黙るようにと身振りで示す。

明青が焦っているのは分かる。そして焦るだけの理由があるのだろうとも思う。しかしそれ以前に捕まったりしてはどうしようもない。傭兵として生きてきた紅珠にとって、既にこれは身に付いた当然の配慮である。

木立の中を近付くと、社殿の様子が明らかに becoming。

こじんまりした社殿の中では今正に盛大な儀式が行なわれている最中のように、閉ざされた扉の隙間や透明な硝子の嵌め込まれた窓からは明るい光が漏れていた。経文を唱える声や奏楽も響いている。社殿は「こじんまりした」とはいえ、それは大都中の建物、特に宗教関係の建物と比較しての話であって、建物としては結構な規模になる。特に明青にとっては、故郷では見たこともないほど大きなお社と映っていた。

「あそこの中だな？」

紅珠の囁きに、明青が頷いた。

「どうやって近付くつもりだ？」

紅珠が更に問うと、明青は少し言葉に詰まったが、軽く首を振って言った。

「裏から。中で儀式が行なわれているから、あまり外に人はいないはず。さつきもいなかった」

言うが早い、もう歩き始めている。紅珠は肩を竦めると、それに続いた。

（警戒は当然されていると思うが…）

明青に何があつたかまだ詳しいことは聞いていないが、大方想像はついている。恐らく明青はこの社に忍び込み、何かを目撃したのだ、そして誰かに発見され、助けを求めた声が隠者・エックに届いたのだろう。不審人物を取り逃がしたのだ、当然警戒は強化されているだろう。

（私が守ればいい）

紅珠は改めて心を決めていた。

結局、社殿に忍び込むまでに二人の見回りを回避し、一人を気絶させた。

紅珠は出会い頭にのした男を木立に放り込んでから、明青に続いて社殿の裏口から忍び込んだ。屋内に入った瞬間、紅珠は強い香気を吸って軽く咽た。それは眩暈を覚えるほどの濃さで、しかし決して不快なものではなかった。

入ったところは土間になっていて、水場が設けられているようであった。そして大きな岩で作られた上がり框の向こうに板戸があり、その向こうから外でも聞こえた儀式の音が聞こえていた。

「ここから見える」

明青のまねをして、紅珠も板戸の隙間から覗く。

見えたものはたくさんの白い服の人物と、彼らの囲む中心にある、一際立派に飾られた祭壇。板戸の場所から短い廊下の先が本殿になっているようで、儀式はそこで行なわれていた。しかしその廊下にも白服の人物。恐らくこの社殿の神官や巫女たちがいっぱい、なかなか全体の様子を窺うことは難しかった。しかし息を潜め

て見ているうちに、紅珠にも大体の様子が分かってきた。そして分かると同時に、思わず息を呑んでいた。

「あなたが見たのは…これ？」

答えなど分かりきっている問いを、紅珠が口にした。さすがにその表情は強張っている。明青は無言で頷いた。こちらは見るからに顔面から血の気を引かせている。

中央の祭壇の周囲では盛んに炎が上がっていた。そして一段高くなった壇上では幾人も人が激しい身振りで踊っていた。炎の照り返しで見辛かったが、その身には色鮮やかな衣装を纏っていて、一見、大都中の社殿で見かける神職人のように思えた。

しかし髪を振り乱し、舞い踊る一人がふらりと足を乱すと、壇の縁に立った。そしてそのまま彼女は、真つ逆様に炎の中に落ちた。その様に、室を埋め尽くす白装束たちは歡喜の声を上げ、樂奏が更に激しくなる。

紅珠の隣で明青が声もなく息を呑んだ。

合唱のように響いている声名（しょうめい）の内容は、紅珠には分からなかった。しかし似たようなものは聞いたことがあった。この大都でよく聞くもの、神の恵みを寿ぐ経文の一節に節を付けたものである。しかし普段は樂奏などはない。こんなにも賑やかで華やかですらある儀式は、あるものを連想させる。

（これは吐蕃の春祭の儀式ではないのか？）

紅珠は吐蕃の信仰について、聞いたことはあったが詳しいことは知らなかった。彼女は吐蕃国民ではなかったし、大都まで来たのも今回が初めてであったからである。

しかし今回とて人探しと『天藍』での仕事に追われ、必要なこと以外はほとんど知ることができずにいた。都市の様子は歩き回っていれば大体掴むことができる。しかし信仰のような心の内面のことは、とてもではないが知り得ないものである。今回の皇直々の祈祷すら見逃している彼女にとって、つまり今目にしているものが、初めて見る本格的な吐蕃の宗教行事であったのだ。

（吐蕃の宗教とは生贄を用いるものだったのか）

中央の祭壇は見上げるように高い位置にあった。そこで舞い踊る巫女や神官たち。彼らは身も心も神に捧げる存在。

祭壇の周囲で声明を上げ、鼓や笛を奏する神官たち。彼らは神を悦ばせる者。

また一人、壇上から炎に飛び込む神官。声明が一際大きくなり、びりびりと建物が震える。

それにしても、と紅珠は思う。

「祭の祈禱は皇が行なうのではなかったか？」

紅珠の囁きに、明青が何度か息を吸い込んでから細い声で答える。  
「皇は表の広間で皆の前で祈禱の儀式を行なわれるの。でも本当に神様の前での祈禱はここで行なわれているのだって。ここは皇のためのお社だから。吐蕃で一番格の高いお社なの」

吐蕃皇国とはほぼ政教一致の国である。皇は最も格の高い神官の位も兼ねていて、春祭をはじめ、国家のための主要な宗教的行事を主催する。

ほぼ、というのは、数年前から政治の場から宗教勢力を切り離そうとする流れとなっているからである。三代前の皇の御世からそれが顕著となっており、前皇センオウの御世では、特に強力に宗教勢力の縮小が図られた。前皇、隠居した現在は靈山侯リョウザンと呼ばれる前皇は名君として現在でも国民に敬愛されているが、同時に宗教関係者からは強く憎まれてもいるのである。

しかし現皇は特に宗教勢力への対策を採っていない。実はこの春祭の儀式も、現皇になってから特に盛大なものになっているのである。

「なるほど、格の高い神官の称号を有する皇が儀式を行っているという形式が大切ということか…」

それにしても生贄とは…確か吐蕃の神は大地の神、豊饒を司るも

のだったな。信徒からの供物を得て豊饒の恵みを与えるというわけか」

紅珠の言葉に明青が大きく目を見開いた。

「違うわ！」

激しく否定する表情は、怒りとも傷付いたとも取れるものであった。だが、現にここでは生贄が捧げられている。別に、珍しいことではないぞ？ 生きている人間を捧げるというのは、さすがに初めて見たが」

「違う、違うの！」

明青が激しく頭を振る。

「神様に生贄を捧げるなんてこと、私は知らない！ 私の国ではやってなかった！」

「……」

「た、確かにお魚や鳥とか神様に捧げるけど！ 生きてるものなんてお供えしない！ ましてや人間なんて……」

「聖職者が自らの身命を神に捧げることを信仰の至上のかたちとすることはよく聞くが」

「だって……でも！ あれは巫女なんかじゃないもの！」

必死な明青の言葉に、紅珠は眉をしかめる。

「私、見たの。あの人たちはどこからか連れて来られた、浮浪者なの。城の外に檻があつて、そこに捕らえられていた人たちなの！ それに、あの中にあの人、あの人……」

「あの人？ ……荔枝のことか！？」

紅珠ははじかれたように祭壇に視線を戻した。もう一度、今度は視線を凝らして壇上の人影を見極めようとする。

（荔枝は、いない。でも……）

紅珠は、踊る中の一人に注目した。その神官は片頬が大きく削げているようだった。

（確か、あの男を私は見た。そう、確か、秦<sup>シン</sup>を訪ねて貧民窟<sup>スラム</sup>に行ったとき……）

そうだ、確かにあの男だ。紅珠ははつきりと思い出していた。

昔戦に行つて顎を砕く大怪我をしたのだと言つていた。あの生気に満ちた、しかし憤りに満ちた彼の存在は、忘れることなどできない。

（まさか、そんな…）

しかし疑惑は消すことができなかった。

（確かに、この間の貧民窟にはほとんど人の気配がなかった。しかしまさか　　）

必死に悪い考えを追い払おうとしている紅珠の袖を、ぎゅうつと明青が引つ張つた。紅珠は祭壇に目をやって、大きく目を見開いた。（荔枝！）

祭壇上の人垣が大きく二つに割れ、間から一人の巫女姿の人物が歩み出ていた。見慣れない衣装だったが、その顔は紛れもなく、『天藍』の仲間、踊り子の荔枝のものであった。

隣で明青が声にならない悲鳴を上げながら大きく息を吸い込んだ気配がした。紅珠は悲鳴こそ上げなかったが、さすがに顔から血の気が引いているのが自分でも分かった。

どこかおぼつかない足取りで荔枝が祭壇上に歩み出る。声明と楽奏が一際激しく、大きくなる。祭壇上には荔枝以外の姿はなくなつていた。

炎に照らされた祭壇上、荔枝は一人舞う。楽の音と、たくさんの声が、舞の仕草一つ一つと重なつてゆく。そして徐々にそれは大きく、激しくなる。

そして。突然系の切れたように動きを止め。そして壇上からその姿が、消えた。

濃密な香の香りが流れてくる。

「…きやあああああああ！」

紅珠の背にしがみつき、明青が甲高い悲鳴を上げる。そしてしがみついたまま、がたがたと震えながらしゃくりあげる。紅珠は、ようやく呪縛が解けたようにはつとした。

鼻先に甘い香が触れる。花に似て、しかし自然の花にはありえない複雑で、どこか刺激のある香り。間違いなく人工の香りであった。紅珠は思わず咽た。咽ながら、紅珠は胸中に濃い疑念がわだかまっているのを強く感じた。

（　　香？）

嫌な感じだった。香り自体は良いものだと思うのに、何故そう思うのか、説明することはできなかったが。

（　　そんなことより）

冷静になった紅珠は、現在の状況がはなはだまずいことにすぐ気付いていた。

「明青、戻るぞ」

そろそろ儀式は終わる。恐らく、先ほどの荔枝が最後の供物なのだ。彼女の衣装も、踊りも、全てが他と比べて特別であった。

しかし明青はとても冷静に行動することなどできない状況であった。この華奢な身体のだこにこんな力があつたのかと思うほどの強い力でぎゅうつと紅珠にしがみついている、紅珠が何を言っても耳には入っていないようであった。

仕方なく、紅珠は明青の体を抱え上げると、社殿を脱出した。

明青が目を覚ますと、そこは見慣れぬ天幕の中で、側に黒髪の女性がついていた。

「ああ、目が覚めたのか。気分はどうだ？」

ほっとしたような表情で、紅珠が微笑みかける。そのどこか痛々しい表情で、明青は自分が今まで悪夢を見ていたわけではないことを再認識した。いたたまれなくて、上掛けを引っ張って蹲った。すっぽりと寝具に包まれて、ようやく少しだけ心が落ち着くような気がした。

そんな明青の様子に、紅珠は聞こえないように溜息をついた。

「ごめんなさい」

そつと寝具に包まれた明青の頭を撫でてやりながら、ぽつりと紅珠は謝罪の言葉を口にする。

（もつと氣遣つてやらなければならなかった）

紅珠は後悔していた。明青がひどく怯えているのを分かっているが、彼女の勢いに押されて彼女の身心をいたわってやれなかったことを。

（いくら氣丈な子だからといって、あんなものを見て、平氣なわけがない）

下手をすれば一生心に残る傷を負わせてしまったかもしれない。それはプロにあるまじき行動だったと、紅珠はあの時少なからず動揺して、冷静な判断を下すことでできていなかった自分を、恥じていた。

あのととき、社殿を出て紅珠はすぐにあることに気が付いた。あからさまに空氣が違っていたのである。

（あの、香だ）

社殿の中は、ひどく濃い香が充満していた。無意識に吸い込むと、咽てしまうほどの。それはあの時、屋内に入ったとき、すぐに氣が付くべきものであった。ただ、そこは儀式的行なわれている場であり、吐蕃に限らず宗教儀式には何らかの香、或いは煙などがよく用いられることは知っていたので、格別不思議と思わなかったのだ。だからあの香の異常に、氣付けなかったのである。

紅珠は首飾りに使われている小さな紫色の石を一つむしり取ると、明青の口に含ませた。

（解毒効果のある石だから　手遅れでなければいいのだけど）

紅珠は、明青の様子に格別の異常がないのを確認すると、彼女を連れて急いで『天藍』に戻った。そして今に至る。



「 香の毒気はそんなにひどいものじゃなかった。念のため、解毒薬も作ったから、後で落ち着いたら飲んでおくといい」

紅珠はそう言って、明青の枕元にどろりとした液の入った小さな器を置いた。寝具の上掛けに包まった明青からは、何の反応もなかった。

「 済まなかったな」

再び詫びの言葉を口にする紅珠に、明青がのろろと肩を動かした。

「 何で謝るの？」

上掛けの隙間から顔を出した明青は、顔色も悪く声もぼそぼそとして力のないものであったが、混乱はしていないようであった。その様子に、紅珠は少し安心する。

「 私が来てって言ったんだもん。私が連れてったんだもん謝ることなんか」

ぼそぼそと明青が言って、軽く咳き込む。紅珠は冷やした布でそつと明青の額を押さえる。

「 喉が渴いているだろう？薬で悪いが、少し飲むといい」

紅珠の言葉に明青は頷くと、のろろと半身を起こして枕元の薬を飲んだ。

薬を飲み終えて再び横になった明青は、ぼうつと視線を天幕に漂わせながら、おもむろに口を開いた。

「 ……知らなかったの。あんなことが行なわれてるなんて」

紅珠は黙って明青の顔を拭いてやりながら、彼女の言葉を聞いていた。

「 私が今まで住んでたくにでもお祭は色々あったけど、あんなこと知らなかったの。皇様が、神様みたいな方だということは小さい頃からずっと聞いていたけれど。神様が、人の命をお望みになるなんて、知らなかった…。何で、何であんなことができちゃうの

「  
紅珠は無言で聞いていたが、その表情は思案するように堅かった。彼女は吐蕃の通常の宗教儀式がどのように行なわれているのか、聞いたり読んだりした知識でしか知らなかった。しかし改めて冷静に考えると、いくらか疑問に思う点が出てきたのである。しかしそれは口にせず、じつと明青の言葉を聞いていた。

「荔枝を、見かけたの」  
しばらく口を噤んでいた明青が、ぼつぼつと語り始めた。

明青は祭の初日、円城に遊びに行った。しかし皇の祈祷を見ているうちに人の多さからか気分が悪くなり、人気の無い方へ無意識に歩いて行った。そしてこの門の外で、気分の悪さも吹っ飛ぶくらい驚くものを目にした。

「檻が、あったわ。そして中に、  
人が、人がたくさんいた」  
「檻？…人？」

紅珠がいぶかしそうな表情で明青を見た。明青は堅い表情で真っ直ぐ前を向いたまま、微かに頷いた。

「人がいっぱいいた。みんなぼろぼろのかっこうしてた。びっくりして、ほんとにちらつとしか見てなかったけど」

それでも人間が人間の姿をしていて、そんなに離れていない場所から見て、見間違うはずもない。

そのときは驚いてとにかく逃げ出してしまった明青であったが、やはり自分が見たものが気になって仕方がなかった。宿舎に戻っても上の空で、勉強になど身が入るはずもない。二日目をそうして悶々としてすごした彼女は、三日目の今日、意を決して、再び円城に行っただという。

しかし祭の最終日である今日は、皇の奉げる祈祷も最も重要な意味を持っていた。そのために城の警備は普段より厳しいものとなっ

ており、祭とは関係なく庭をうろつくことは許されなかった。

警備の厳しさに、明青は王城に入るのを諦めた。がっかりしつつ、同時に奇妙な安堵感を覚えつつ、彼女は踵を返して歩き始めた。ふと雑踏に向けた彼女の視界に、見覚えのある女性の姿が映った。

（え、荔枝？）

それは確かに先日天藍で会った踊り子であつた。しかし何やら様子が変わつた。たった一日かそこら前に会つたときよりも印象はげつそりとやつれ、虚ろな目をした荔枝は、両脇を男たちに抱えられ、どこかへと連れて行かれていた。

反射的に明青はその姿を追つて歩き始めていた。

人ごみの中を小柄な体ですり抜けながら、明青は荔枝たちの姿を追つた。遠目で彼らの様子はよく見えなかったが、荔枝は何だかとてもぼんやりしていて、男たちに引かれてようやく歩いているという感じに見えた。

しかし途中で彼らを見失つてしまった。それでも何となく諦められなくてうろろしていた明青は、城の外れの勝手門に出た。

先日紛れ込んだときは別の方角からやってきていたので、最初は自分がどこに出たのか分からなかった。しかし壁の向こうの大勢の人の気配に気が付いて、明青はここが先日たくさんの人を見た場所であることに気が付いた。

先日と同様、その辺りには人影がなかった。あの時見たものが何だったのか、確かめなければならぬ。半々の好奇心と義務感から、明青はそつと壁の隙間から外の様子を窺つた。

そこには確かに檻があつた。そして捕らわれていたのは紛れもなく人間たち。塵芥やらなにやらに汚れくたびれた衣服を身に纏つて、虚ろな表情をしていた。

彼らは何者なのか、明青には分からなかった。ただ、老若男女、様々いたが、幼児や老人は少ないように見えた。そして女性よりも男性の方が多いように見えた。そして彼らは一様に表情に精気がなく、動作ものろのろとしていた。

どきどきしながらその様子を見詰めていた明青であつたが、彼らが移動を始めたのに気が付いて、その動きの先を追った。

檻の北側に、木戸が設けられていた。それが開いていて、側に真白な衣装を着た人物が立っていた。どうやら門の両側に立っている彼らが、檻の中の人たちを招いているらしい。早くしろ、とろろするな、といった罵声が聞こえて、明青の胸をきゅっと締め付けた。しかしある光景を目にして、明青は息が止まるかと思うほどびつくりした。

「荔枝……！」

思わず叫びそうになって、慌てて口を押さえた。周囲に視線を遣るが、誰かがいる様子はなかった。再び壁の向こうに視線を向けて、明青はばくばくいう心臓をぎゅっと押さえた。

門を出て行く人間たちの戦闘に、先ほど追っていた荔枝の後姿があつた。他の人間たちとは違い、衣服は汚れてはいなかった。むしろこの場にあつては場違いなほど色鮮やかで綺麗な衣装に見えた。しかしやはり後姿はふらふらとしていて、両脇を白服の人物に抱えられ、門を出て行った。

（どうしよう、どこに連れて行かれちゃったんだろう……）

明青が見ているうちに、檻の中の人間は全員、門の向こうへと出て行ってしまった。明青の見える場所からは、彼らがどこへ連れられていったのか、分からなかった。

（……でも多分、この先……）

明青は木立の中に消える壁沿いに視線を辿った。

そろそろと足音を殺して壁伝いに歩いた明青は、やがて先の森が拓かれていることに気が付いた。

手前で足を止めて、木の陰に身を隠しながら様子を窺うと、細い道があつた。それは真っ直ぐ東西に伸びている。明青は木立の中を、道に平行に進んだ。

いくらか行かないうちに、行く手に大きな建物が見えてきた。それは明青が見たことのないものであつた。しかしその形はいくらか

見覚えのあるものであった。

（お社だ…）

明青の故郷にもあった、神様をお祀りする社がそこにあつた。もちろん彼女の故郷のものは今日の前にあるものとは比較にならないほど小規模なものであったが、建物の形や色は同じものであった。（そういえば、お城の裏側には皇族の方々がお参りされるお社があるって聞いたけど…これがそう？）

しかし何故今、こんなところに出てきてしまったのだろうか？不思議に思いつつ、何故か心のどこかで冷たい不安感が凝っているのが彼女には分かった。

（まさか、そんな。神様のお社で…）

思いつつ、明青は視線をそこから外すことができなかった。そして彼女は見たのだ。

「お社の、窓も扉も開いていた。そして人が出入りしていた。その中に、確かに白い服の人たちと檻の中にいた人がいたの。それで…」

後のことは思い出したくなかった。しかしそんなことは、既に意味のないことだった。

「どうして？同じ人間なのに　どうして、あんなことができちゃうの？あんな、惨いこと」

そう言つと、明青は耐え切れずにぼろぼろと涙と零した。既に泣きはらした眼元は真っ赤で、涙の塩気が痛いであろうが、そんなことは気にならないようであった。

「…同じ人間、とは思っておらぬのであろうよ」

紅珠が堅い声で言った。

「あれは、確かに正式な神職に就いている者たちではなかったな。

恐らくあの壇上にいたのは貧民窟<sup>スラム</sup>の住人や異民族　吐蕃国民では

ない者たちだ。吐蕃の皇や神官たちにとっては彼らは人間ではない、別の生き物なのだろう。だから、殺せるし、生贄にもできる。彼らにとってみれば、最高級の神への供物なんだよ、あれは」

吐蕃皇国ほどの大国で、そのような考え方は奇妙かもしれない。しかし反対に言えば、対等な人間として見ていないからこそ、たやすく異国や異民族を襲い、生命を奪い、その生活を破壊し、併呑することができるのである。砂漠で、戦いの中で生きてきた紅珠には、そう考えてしまえばすっきり納得できるものがあつた。

しかし納得は理性の賜物であつて、感情はそういうわけにはいかなかったが。

明青は納得した様子ではなかったが、反論の言葉は出てこなかった。枕に顔を伏せてしゃくりあげる明青の背中を、紅珠はそつと撫でてやつた。

「どうしよう？私、これからどうしたらいいの？」

（それは、あなた自身が決めなければならないことね）

紅珠はそう思ったが、今は何も言うべきではないと思った。

ただ明青が落ち着くまで、いたわりと慈しみをこめてその背中を撫でてやつていた。

「お嬢さんは、落ち着いたかい？」

天幕を出た紅珠に、団長が声をかけた。

「ええ、やつと眠りました。ごめんなさい。迷惑かけます」

紅珠はぺこりと頭を下げた。公演前、忽然と姿を消したと思つたら、ぎりぎりになつて戻ってきて、しかもぐったりした少女を抱えていたのである。紅珠は様々な理由で『天藍』には迷惑をかけまくってしまったのである。

「気にしちやいねえよ。今夜も成功だったしな」

団長はにやりと笑つと、ぼん、と軽く紅珠の肩を叩いた。確かに今

夜の公演は大成功だった。紅珠の踊りにも全く動揺は感じられず、観客からは惜しめない賞賛とたくさんのおひねりが飛んだのである。紅珠も吊られたように微かに笑って見せると、しかしすぐに表情を戻した。

「団長、一つ確認したいのだが」

団長の表情も、一瞬で真面目なものに戻る。

「例の、王城からの使い。彼らはあの日私が出た一回だけではなかったのではないか？あの前：はどうか知らないが、あの後も、何度か来ていたのではないか？」

紅珠の問いに、団長は厳しい表情で頷いた。

「ああ、あんたはたまたま会えないときばかりだったが、来ていた。そして踊り子を皇に召し出せと言っていた。俺は気に食わなかったから、全部追いついてやっていたが……」

「それを、誰か　団長以外の人物が聞いていたりしたか？」

「ああ、もしかしたら聞いたかもしれない。天幕に入れなかったときもあるし。何しろこの数日忙しかったからな」

「そいつらが来なくなったのはいつ？」

「ああ、確か　三日前か？少なくともこの二日間はずっと見ていない。まあ、もし来ていたとしても俺も出てばかりだったから会えなかったのは間違いないが」

「……荔枝が、いなくなってからね」

「ああ、そういうことになるな」

紅珠は頷いた。その表情は限りなく沈鬱で、痛々しかった。

荔枝は、紅珠に敵対心を抱いていた。

それも当然であろうと、紅珠は思う。

荔枝はほんの小さい頃からこの『天藍』で育ち、踊り子として修練を積んでいた。そして最近では『天藍』を代表する踊り子の一人にまで成長していたのだ。

そんな彼女の事情からして、突然『天藍』に入り込んできた女がいて、しかもそれが自分よりも実力のある踊り手であつたら、どう思うであろうか。とてもではないが、ただ無邪気に笑つてなどいられるはずがない。

（それに、多分　　）

荔枝は同じ踊り手として、紅珠について、あることに気が付いていたのだらうと紅珠は考えている。そしてそれは、荔枝の自尊心を傷付けるものであつたのだらう。

しかし紅珠は荔枝のことが嫌いではなかった。むしろ、正直な荔枝を、気に入つてもいた。荔枝とて、完全に紅珠のことを嫌つていたわけではないのだらう。　　今となつては確かめようもないが。

許せない。そう思つた。

本来なら、そう思うことは　　少なくとも、紅珠が今まで生きてきた中で身に付けてきた考え、すなわち他国の事情には必要以上関わらない、というものにはいささか背くことになるが、しかしもうそれを抑えることはできなかった。

紅珠は心を決めた。

「団長、また迷惑をかけることになるが　　許してくれるか？」  
強い瞳で真つ直ぐに見詰められ、団長は頷いた。

「　　あんたの頼みとありゃあ、きかねえわけがないだらう？」

団長がにやりと人の悪い笑みで応える。  
生粋の、「砂漠の民」の表情であつた。

\*\*\*\*\*



祭の明けた吐蕃皇国首都・大都の空は雲一つなく晴れ渡っていた。まだ薄蒼く翳る大都の一角、町を南北に貫くメインストリート「夜光の道」、そこに紅珠は立っていた。

地面に裾が付くほどに長い、墨のように真つ黒な衣装。長い黒髪には何も付けられておらず、そのまま下ろされていた。装飾品といえば本当に少なくて、胸に下げられた銀色の小さな円鏡が一つに、手にはめられた、銀の小片を何十何百と連ねた手甲、裸足の足首にはめられた銀の足輪、そして耳にはいつもの紅玉が三つ連なった耳飾りが揺れている、それだけである。

周囲には誰もいなかった。

紅珠はじつと瞳を閉じて立っていた。ただその口元が、音を発することなく、小さく動き続けている。

早朝の人気の無い町の中。蒼い光の中に立つ姿はどこか神々しく、つくりものめいていて近寄りがたかった。

ふ、と紅珠が目を開けた。

彼女の濃い紫の瞳が、いつにも増して鮮やかに映えた。すうつと紅珠は一步を踏み出した。

薄い黒の衣装がさらさらとなびき、白く脚の形を透かし出す。

ゆらり、と片腕が天へと差し伸べられる。

しゃらしゃらと鈴に似た澄んだ音が響く。

掌が空で何かを掴む仕草をすると、それを脇へ投げ捨てるようにぶんと振る。

澄んだ音がまるで舞の楽のように辺りに響く。

唇からは絶えず小さな声で何か歌うような音が零れている。しかしそれは吐蕃の言葉ではなかった。

ゆつくりと歩を進めながら、紅珠は観客のいない舞を続ける。

荔枝の死には自分も責任がある。紅珠はそう、団長に謝罪した。

荔枝が紅珠を意識していたのは知っていた。しかし紅珠はこれから先も『天藍』と行動を共にするわけではなかった。予定外に長期に大都に留まることになってしまったが、どちらにせよ祭が終われば移動せざるを得なくなっていただろう。そしてそのときには紅珠は彼らと別れることになる。だから、そんなに気にすることは無いと思っていた。

大都という都市の魔力と荔枝の心の鬱屈の深刻さ、それらに気が付いていれば、あるいはこんな悲劇は起こらなかったかもしれない。もちろん、荔枝が実際には紅珠のことをどう思っていて、何を言われて、何を考えて王城からの誘いに乗ったのか、今となっては推測することしかできないが、それでもきつと回避する方法がどこかにはあったはずなのだ。

償えるものではないが、とにかく自分には謝ることしかできない。紅珠は『天藍』の団員全員が見守る中で団長の前に跪いて、深く頭を下げた。

団長は、『天藍』の団員は皆、彼女のことを責めはしなかった。少なくとも口に出しては。彼らはほんの一ヶ月ほど前に知り合った紅珠とは違い、荔枝が幼い頃から共に生きてきた者たちである。仲間ではなく、家族であった。悲しみも憤りも紅珠のものよりもほど深く激しいに違いなかったが、責めないでいてくれる彼らを、紅珠は本当にありがたいと思った。

最後にもう一つ、迷惑をかけることになるが、どうか許して欲しい。そう紅珠は彼らに告げた。

「何をやっても荔枝の命の償いにはならない。でも今、ゆっくりと報復を計画することは不可能だ。早晚我々は大都から、皇の手の範囲から逃れねばならない。その前に、一矢報いてやりたいのだ。『砂漠に手を出す者には相応の報いを』例え吐蕃皇国の、大陸一の国家の長とて、砂漠の尊厳を踏みにじることは許されない。それをほんの少しでも思い知らせてやりたい」

「…そうだな、皇の誘いを蹴った我々だ。ただで済むはずがない。祭が終わった今、あちらも動き出すな」

団長が頷く。彼は、紅珠が直々に皇の使いを拒絶する前から、彼らの要求をはねつけ続けていたのだ。当然、皇の感情を害しているであろう。

「…済まないね。私一人が皇に従えば、それで事は済むのかもしれないけれど」

しかし皇がそんなに甘い人物であるとは、彼らの誰一人として到底思えなかった。

「それに、あんたを皇に差し出してそれで全てを収めようなど、我らの誇りが許さない」

団長の声は重々しく天幕中に響いた。

「我らを砂漠の民と知っての今回の荔枝への、そして姫への皇の狼藉、これは我が砂漠に対する侮辱とみなされる」

天幕の中に一瞬、静寂が過ぎる。

「報復を」

ぼつりと、団員の一人が声を発する。

「報復を、紅珠」

踊り子の女がぎらぎらとした瞳で紅珠を見上げる。

「報復を。我らが砂漠を冒すものに報いを」

猛獣使いの男が野太い声を張り上げる。たちまち天幕中が騒然となった。

彼らが静まるのを待つて、紅珠は彼らに告げた。

「あなたたちは翌早朝、門が開くのを待つてそれぞれ大都を脱出して。決して目立ってはいけない。改めて私が言うまでもないことでしょうけど。私は私で用が済めばさっさと脱出する。多分、当分会わない。でも、きつとまた必ずどこかで会っだろう」

そう言つと、紅珠はふわりと笑った。

「我らが我らである限り」

両の腕を宙に差し伸べ、虚空をかき抱く。  
仰向く顔が、天の一点をじっと見据える。

天のいと高き処に栄光の御座みまし

紅珠の唇から澄んだ、耳に心地よい歌が流れる。

そは荒ぶるもの

流れるもの

うつろいゆくもの

そはその力もて総てを動かすもの

そは我らが王

我らが愛しむもの

そは風となり、雨を呼ぶもの

皇に報復をすと言つても、そこまで大それたことはできない。

紅珠はそう判断していた。

皇の周辺の警護が嚴重であることは疑う余地がないし、それを今日明日でかいくぐるなどということは不可能である。そもそも例え皇を亡き者にしたとて、すぐに替わりの皇が立つだけのことである。それでは何の解決にもならない。それに自らの命が確実に危うくなるような方法を探ることも、紅珠の選択肢にはなかった。

「私が望むのは皇の権威の否定」

一体何をするつもりなのか、尋ねた団長に紅珠は答えた。

皇が皇の権威をもつて自分たちを虐げるなら、その権威を否定する。そのためには何をするのが効果的か。

その権威の因る基盤たる、皇の威力を打ち消してしまうのがよい。例えその行為自体が直接的に皇の名を汚すことがなくとも、皇自

身に、皇室そのものに、心理的に屈辱を味あわせる。それだけのことで、必ずやそれは布石となる。紅珠はそう考えていた。

「私は、諦めない。そして決して許さない」

一瞬、紅珠の紫の瞳がざらりと光った。

「今、できることがこれだけとしても、決して私はこのことを忘れない。今、この思いを忘れない」

いつそ静かですらある紅珠の言葉は、しかし内に抑え難いほどの熱を持って、静かに威を放っていた。

夜は徐々に明けていった。

踊りながら歩む紅珠が大都の真ん中辺りまで来た頃には、一日の行動を始めようとする者たちが表に出て、踊りながら歩む紅珠に気が付き始めた。

中には彼女が移動芸能集団『天藍』の踊り子であることを知っている者もいた。

「何だ？何かまたやるのか？」

次第に沿道には人が集まり始めていた。

我は王に代わりて地に立つ者

我の手は王の手なり

我はこの手もて王に代わりて汝らに願う

我らに恵みを

我らに慈しみを

我らがこの乾いた大地に汝の恵みを与えたまえ

紅珠の歌は吐蕃の言葉ではなかったので、誰にも意味は分からなかった。しかしその美しい歌声は、誰をも魅了した。

しなやかな腕が天を抱き、辺りを払う。そのたびに澄んだ鈴のような音が響く。

裸足の足が黒い敷石を踏むたび、その足首の足輪が、やはり澄んだ音を響かせる。

それらは歌声と相俟って、まるで楽の音のように響いた。

「綺麗だねえ：まるで天ににいるという天女様のようだ：」

老若男女問わず、沿道の全てを魅了しながら、紅珠は真っ直ぐ北へと歩みを進めていった。

晴れ渡っていた空の一部に、不穏な黒い雲が湧き始めているのに、誰も気を留めていなかった。

皇の威光とはつづまるところ、この吐蕃という国を富み栄えさせるといふものである。だからこそ、皇は最高位の神官として神と交感し、民に豊作と一年の気候の安寧を約束する。それが吐蕃の春祭、『春の燔祭』である。ここで皇は神に好天と豊作を祈願する。

何故好天であり、雨乞いではないのか、それはこの国の首都の位置が関係する。

現在の首都・大都、前首都・江州共に、吐蕃<sup>「ウツユ」</sup>皇国では北部に位置する。そして町の周囲には河や運河がある。

北部地域は年中の温度差が激しいが、どちらかといえば寒冷な気候である。そして乾燥しがちな土地である。しかし明江<sup>ミンコウ</sup>はじめ大河やその支流、そこから水を引いた運河などの存在で、土地は潤されている。

特に春は雪解け水で普段より水量も多い。故にこの時期、雨乞いをする必要はないのである。それよりも春とはいえまだ寒さの残っているこの時期、晴天が続くことの方が必要なのである。

故に、皇は好天を祈願した。

（ならば、私はそれを否定する）

呪力による威光ならば、呪力によって打ち消す。それが最も効果的であろう。

天の御座にて我らを見守る王よ

我らに慈しみを

我らが一部であったもののためにその情けを

我らが愛しむ者のためにそのお慈悲を

心有るならばそのお恵みを

我らが一部で在りしもの

その心を慰めんがために

どうかあなたのお心を

我らの上に降らせたまわん

夜が明けたときには雲一つなく晴れ渡っていたはずの空を、黒雲が覆い始めていた。それは南から湧き上がり、徐々に大都の上空を覆い始めていた。

大都の南門から始まった紅珠の舞は、今、王城『円城』の門前に達していた。

時ならぬ騒ぎに、門を護る衛兵たちはすっかり困惑していた。

紅珠はふわりと広げた腕をそろえて天に掲げた。天を仰いでしゃん、と両の手甲を鳴らす。

荒ぶる神よ

慈しみを垂れる王よ

（神よ、私に力をお貸しください）

紅珠の歌声が切ないほどの響きを持って天に捧げられる。

既に沿道どころか、周囲の建物、果ては「夜光の道」を北上する紅珠の後を追う群衆で、周囲は騒然としていた。しかし彼女の声は、雑踏に紛れることなく、美しく、力強く、そして切なく、聞く者の耳に、心に届いた。

我はその栄光を讃えん

その慈しみを讃えん

（神よ、もし私たちを愛してくださっているのなら）

紅珠は天に捧げた両腕をゆつくりと下ろしながら、その場でふわりと一回、ターンをした。そしてそのまま地面にぬか額づく。

黒い薄物の衣装の裾がふわりと舞って、花びらのように黒の敷石に広がった。

優雅で艶めいた仕草に、周囲から歎声が漏れる。

王よその御手もて

我らが上にそのお恵みを

（神よ、私にそのお力をお貸しください）

跪いた紅珠は、しばらくそのまま動きを止めていた。

周囲の群衆も、何が起こるのかと固唾を呑んでその様子を眺めていた。

「おい、お前……」

ややあつて衛兵が紅珠の前に進み出ようとしたとき、天が裂けた。白光と地を揺るがす轟音。群集のあちこちから悲鳴が上がり、何人かは頭を抱えて地面に蹲った。その上に、ぽつりぽつりと雨粒が落ち始める。

「……雨だ……！」

次々と声が上がった。悲鳴を上げて逃げ出す者、呆然として天を見上げている者。

雨は一気にその勢いを増す。地面にはじけた雨滴が跳ね上がり、周囲が急に白く煙り始めた。



その騒ぎの中、黒髪黒服の舞姫は、忽然とその姿を消していた。  
そしてこれ以後、大都で『砂漠の舞姫』の姿を見た者は、いなか  
った。

### 三・春の燔祭・完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2248e/>

---

風都紅塵戦奇譚      三．春の燔祭

2010年10月11日08時16分発行